

おやいさん

羽生田順平追憶集 羽生田鉄工所

羽生田順平翁の靈前に捧ぐ



遺影

おやじさん

人間らしく生きた

おやじさん

思ったことはやり抜いた

おやじさん

おやじさんの泣くときは

人のまことに触れたとき

おやじさんの眼が笑うときは

でっかい仕事のとれたとき

そしてうっかりすると

大きな雷を

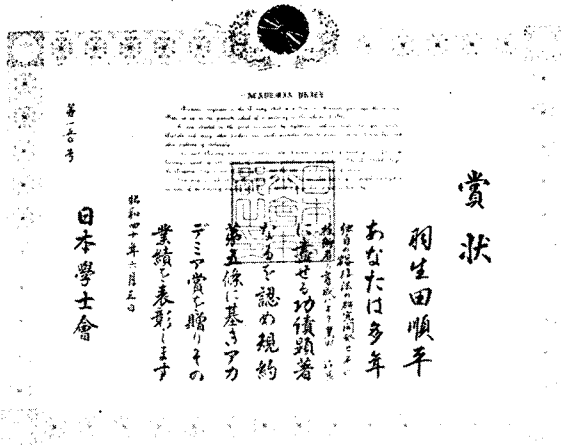
落としていったおやじさん

おやじさんの味は塩味のように

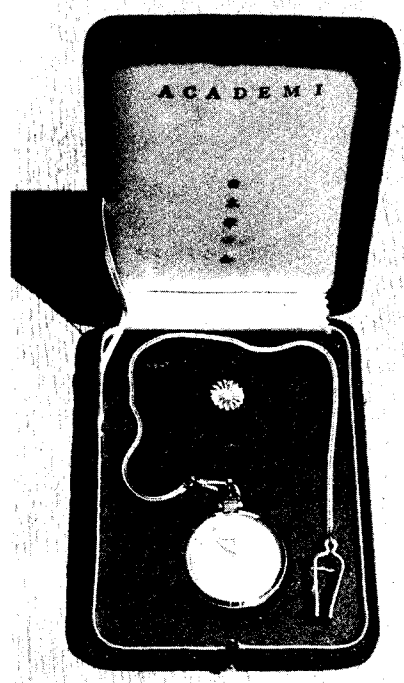
心の奥に浸みている



胸像 制作者・日展委員 羽田千年氏
制作・昭和43年8月



昭和40年アカデミア賞



アカデミア賞・襟章と金時計

感謝状

株式会社羽生田鉄工所
業務部長 水 羽生田順平 殿

貴廠が本年地域業界及び換気装置に献身的な努力を致し、常に製品の質の向上に改良工夫に留まらず、方開連諸団体の要職に身を捧げ、昨五社団法人ボイラ圧力容器安全協会の設立に當り、百進を奉祝せしと、東京西走し、協会創立当時の物産博覧会に率先重電油圧力を下り、協会の二公日披露三演習の園を為さしめた功績は、誠に絶大なるものがあります。
依て、故に設立第二年度のボイラ祭に出席して、功を未だに謝せらるゝの記念品を贈呈し、感謝の意を表します。

昭和三十一年七月八日

株式会社ボイラ圧力容器安全協会

会長 長 齋藤邦吉

感謝状

感謝状

羽生田順平 殿

あなたは社団法人水落接協会東京都東部支部長として、本年の閉接技術の向上に寄与された、当協会のボイラ接士実技試験については、格別の御協力を賜りました。

ここに昭和三十一年度全国安全週間にあたり、厚く感謝の意を表します。

昭和三十一年七月五日

東京労働基準局長 四方陽之助

感謝状



明治43年(16歳)頃・姉うめと



大正5年(22歳)頃・兄辰治と



大正6年(23歳)頃・羽生田家本家へ
遊びに行きし折り
車上左より義兄徳次郎,故人,兄辰治



昭和12年6月(故人43歳) 奈良にて夫人キネと



昭和19年10月, 現社長三郎岐阜陸軍航空整備学校入校の折り
左より三郎, 故人, 孫宇多子, 夫人, 次女みち, 長女みや



昭和30年,東京工場旧事務所前にて愛犬太郎とテリー



昭和35年5月,浅間温泉にて



昭和32年頃・太田幸義氏と



昭和34年4月28日・羽生田鉄工所創業者羽生
田源治郎翁胸像除幕式の折り 前列中央故人



東京工場事務所新築地鎮祭の折り 昭和38年6月27日



昭和36年夏・須坂自邸の庭にて
後列 夫人キネ,故人 前列 長女みや,次女みち,孫恭子



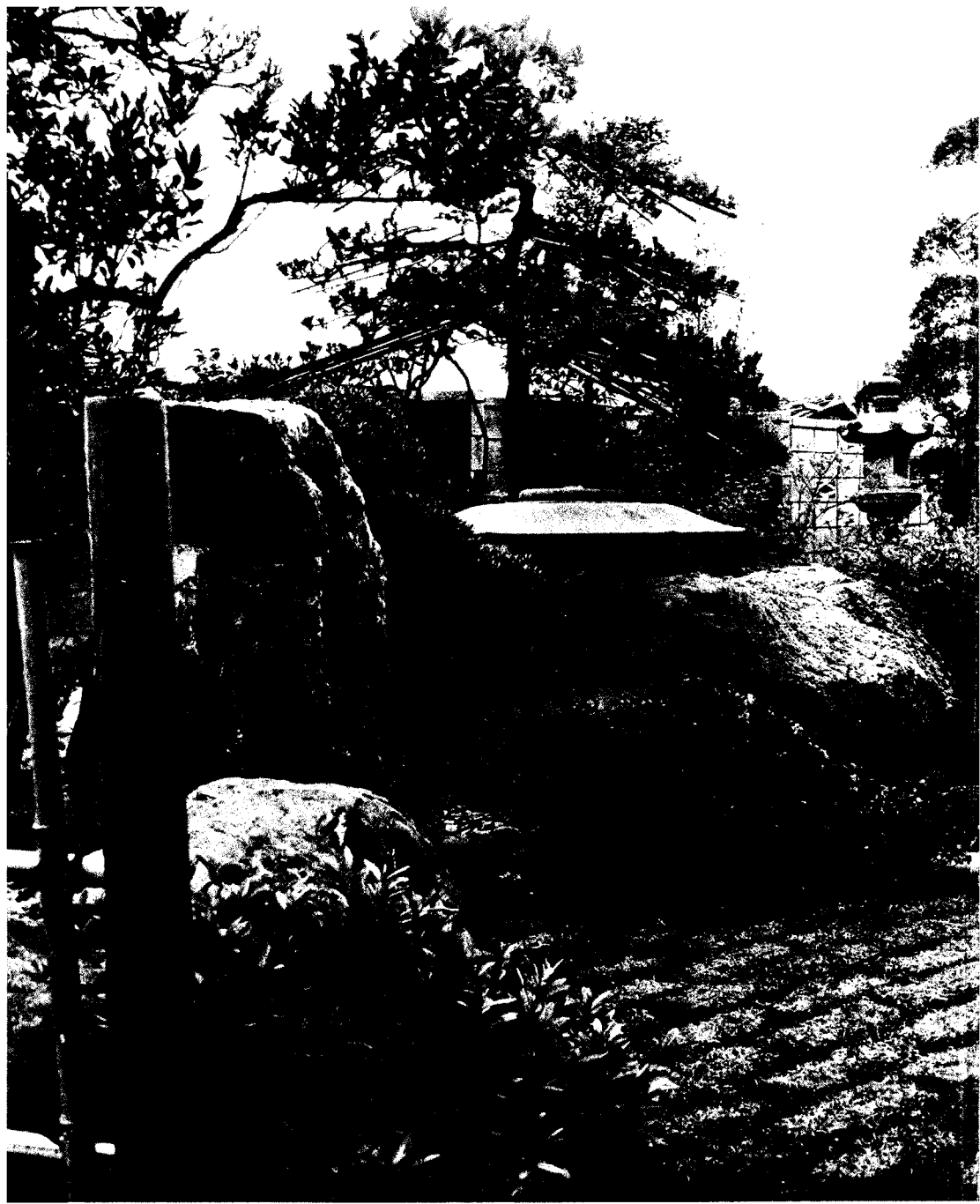
昭和37年11月，明治記念館庭園にて，
故人を囲み、左から現社長夫人，池田
耕作氏，同夫人（次女みち）

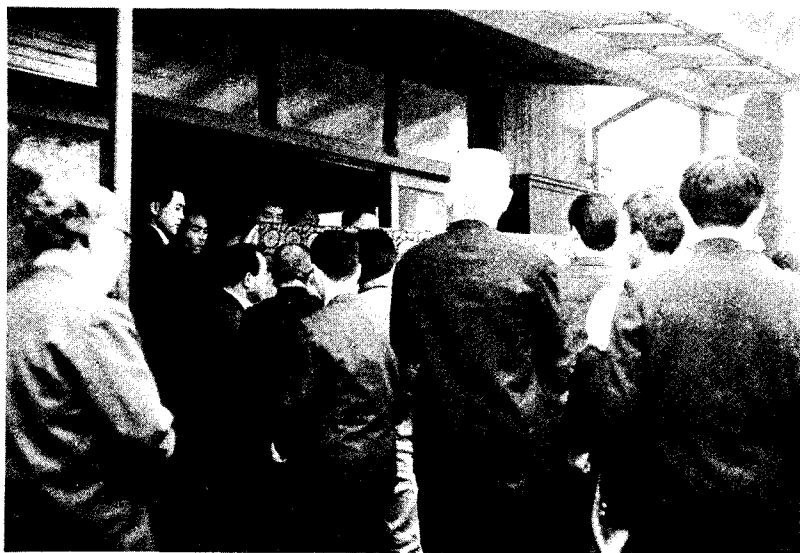


昭和39年正月，東京自邸にて，現社長と
孫（左より 真理，恵美子，義人，順子）
に囲まれ



故人遺愛の庭（東京自邸）





1月12日・出棺の様



遺族席

東京工場・社葬

昭和42年1月14日



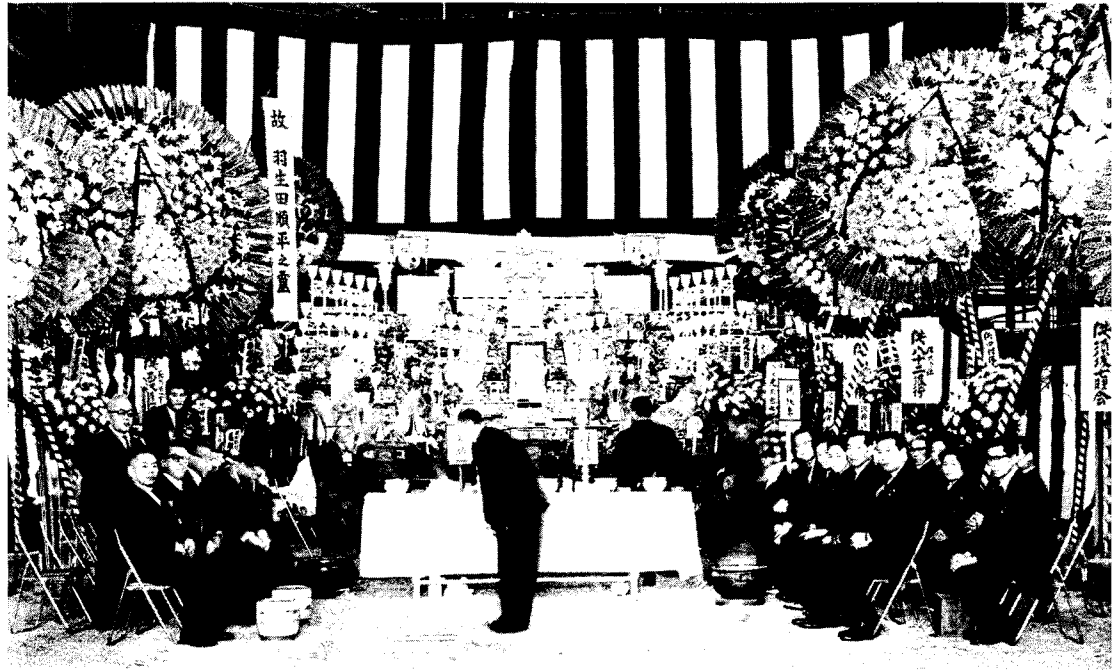
祭壇



1月13日(通夜)・東京工場正門

本 社 工 場 ・ 社 葬

昭 和 4 2 年 1 月 2 2 日



社葬齋場



式場入口



昭和42年1月23日,善光寺にて



昭和43年7月11日,故人墓前にて



墓域

ご挨拶

株式会社羽生田鉄工所

代表取締役社長

羽 生 田 三 郎

月日のたつのは早いもので、父が亡くなりましてから早くも二年近い歳月が流れました。

今回、故人の三周忌を迎えるにあたり、改めて生前故人に賜わったご芳情と、亡き後も変わらずご支援くださっている皆様方のご厚意に心からお礼申し上げます。

このたび、従業員一同の発願により、故人の追善供養のため胸像が東京工場に建立され、さらに追憶集出版のはこびになりましたことは、亡き父とともに感激にたえません。

故人の胸像はありし日の姿そのままに暖かく私たちに接し、その魂は天国より会社の繁栄と従業員一同の行く末をじっと見守っていてくれるものと信じます。

また、この追憶集は、故人の創業精神と今日に至るまでの歩みを伝えるものであり、次代をになう私たち一同の精神的遺産として行く手を照らす燈火となるよう念じてやみません。心か

らなる文章をお寄せいただいた皆様に謹んで厚くお礼申し上げます。

なお、生前ご親交願った皆様方にもご高読いただき、故人を想うひとときをお持ちいただけますすれば、私たちの幸せこれに過ぎるものはございません。

お礼とともに今後のご支援をようお願い申し上げます、ご挨拶にかえさせていただきます。

昭和四十三年九月

目次

おもかげ

(写 真)

ご挨拶

羽生田 三郎 1

追憶 第一部

故羽生田順平翁に憶う

(社)ボイラ・クレーン安全協会会長／衆議院議員

齋 藤 邦 吉 11

慈父のなつかしさ(社)日本溶接協会東京都支部事務局長／(株)産学協同センター社長

三 浦 万 亀 男 12

和衷協同の教え 関東信越税理士会・常任理事・長野県支部長／尾和税経事務所長

尾 和 郡 司 15

羽生田順平会長を憶う

田沢工業(株)社長

田 沢 義 明 19

会長の笑顔

溝 口 好 雄 28

弔 辞

東 本 願 寺 本 山 30

弔 辞

東京都鉄工溶接事業協同組合理事長／(株)麻生鉄工所会長 三 幣 庫 吉 30

弔 辞

(社)日本溶接協会東京都支部支部長／小松川化工機(株)社長 川 村 千 春 33

弔 辞

(株)大田製作所社長 太 田 幸 義 37

弔 辞

戊 申 同 級 会 38

弔 辞

(株)羽生田鉄工所本社・工場 41

弔 辞

(株)羽生田鉄工所東京支店 43

弔 辞

(株)羽生田鉄工所東京工場 45

ちようじ

孫 一 同 47

追 憶 第二部

お名を呼ぶ

畔上 仲次郎 51 技術屋として想う 井野辺 淳 59

親父さん

有賀 一夫 53 会長の気力 内田 直吉 63

人生の鏡

泉 沢 清 54 笑顔で話す言葉 菊池 常男 64

昔 話

泉 田 智哉 56 根性の勝利 北 沢 洋 一 66

心訓	倉科 弘	72	親爺さんの小言と冷酒	立野 俊雄	115
親父さん会長	倉持 栄作	74	会長	田中 純	129
いまは亡き会長の追憶を	小池 一貴	77	豊富な機転	田中 光男	130
「友情は金で買えぬ」	小島 友治	84	故会長よ、やすらかに	藤堂 鯉作	134
大雷は親心	小林 祐一	85	人情家	富沢 和夫	138
はげましの言葉	駒場 忠雄	88	巨星	永井 実	141
身近に感じられた方	阪本 千行	89	会長の商訓	浜中 秋雄	150
故会長に	桜沢 三千男	91	「彼」	原田 晴海	154
この母の感謝の思いを	桜沢 恒代	92	「親父さんと呼べ」	番場 一夫	156
バイタリテイー	佐々木 寛	94	たよりになるオヤジさん	平林 和男	158
会長の霊に、そして……	佐々木 義夫	96	慈愛のまなざし	平林 ぶん	161
「家庭を大事に」と	三宮 栄	98	偉丈夫	古沢 仁一	163
おやじさんと共に	菅原与左衛門	99	香をあげて	堀内今朝徳	164
メガホンを手に	高野 旭	112	会長の格言と私	増井 富夫	166
会長さんと私	高村 磬子	113	いいおやじさん	丸山 清治	169

思い出すがままに

人の気持がわかる人

蜂の巣

会長との出遇い

鉄三昧の人

ステキな会長さん

情の深い方

やさしい心づかい

大空のような心

丸山 政男 171

水田 政夫 174

宮沢 巖 176

三好 敏夫 178

森 清 180

湯本 米蔵 193

横溝 成夫 195

吉田 昌造 200

吉田 美智子 201

子供に対する深い愛情

朝礼

和気 三郎 202

和田 市造 205

きびしさと思いやりと

深い理解

会長に続く

寛容と熱情を学ぶ

温情のなかの闘志

赤坂 末蔵 207

宇田川平次郎 210

木村 潔 212

高橋 正司 218

田代 春雄 220

追憶 第三部

追悼の言葉

叔父の陰に母の力

頌歌

思いつくまま

安藤 義三 227

羽生田 勲 228

羽生田 政子 230

羽生田 春子 231

姉思いのおじさん

一声の訓辞

仕事が一生

祖父の面影

小林 福雄 233

芹沢 菊之助 236

池田 明雄 238

羽生田 恵美子 242

祖父

やさしかったおじいちゃん

私の願い

おじいちゃん

羽生田 義人 243

羽生田 順子 246

池田 恭子 247

羽生田 真理 249

父に捧げる

父のこと

きびしさの中に深き愛

父に生きる

池田 みち 250

羽生田 みや 253

羽生田 寿美子 256

羽生田 三郎 259

遺稿

想い出づるままに

後記

お礼の言葉

羽生田 順平 269

池田 みち 289

羽生田 キネ 291

年譜

編集後記

編集部 303

献題

詩字

池
田
み
ち

追

憶

第一
部

友情は金で買えぬ。——羽生田順平

故羽生田順平翁に憶う

齋 藤 邦 吉

(社)ボイラ・クレーン安全協会会長
衆議院議員

私は仕事柄、人と会う機会が非常に多い。一度会った人は、たいてい職業や名前くらいは覚えていたが、そのなかでも何十年たっても忘れられないほど印象の深い人と、自然に縁が薄くなっていく人がある。これはその人との利害関係や義理につながるものではなく、ただなんとなくそうなるものである。

故羽生田順平翁と私は、地元のボイラ関係の会合でときどき顔を合わせる機会があった程度で、さほど深い交際をしたわけではないが、私の頭の中には生前の翁の面影が、くつきりときざみこまれている。

「一杯の酒にも血がかよう」という言葉が翁にはびったりとあてはまった。私が翁と会っての第一印象は、相手の立場を大切にされる豊かな人間味を感じたことである。それは世間によくある「イエスマン」ではない。相手の話の内容をかみしめて自分のものとして消化される。

そして、はね返ってくる言葉の中には相手の気持がより高い次元のものとなってはぐくまれて
いるのである。

この印象は、二度会い三度会うごとに深められ、故人となられたあとでも薄れることはな
く、私の人生に大きなプラスとなった。翁の胸像を仰ぎみる日が待ち遠しいようである。

慈父のなつかしさ

三 浦 万 亀 男

(社)日本溶接協会東京都東部支部事務局長

(株)産学協同センター社長

故羽生田順平翁と私とのつながりは、ひと昔からのことで、いまでも故人とは思えない気持
がいたします。

十年前、日本溶接協会東京都東部支部設立の計画をして飛び回っていたころのことでした。
はじめて翁と知り合った私は、なんとなくその人柄にひきつけられました。それからずっと肉
親のようにかわいがってもらいました。相談したい事があれば、だれよりも先に翁のもとに飛
んで行きました。

ある夏の日の早朝でした。宇喜田の工場の奥にあるお宅を訪ね、玄関の戸を開けたとたんに、居間の方から「三浦さんお上がり」という翁の声がきこえました。予告もせず行ったのに、私であることをちゃんと知っておられたのにいささか驚き、「よくわかりましたね」といったところ、「いま時分にやってくるのは、あんたにきまっている」といわれ、私の性格をよく見抜いておられたのに二度びっくりしたことがあります。

翁と話していると、なんとなくほのぼのとしました。どんなむずかしい会合でも、翁が主役をされると円満にはこびました。人徳というものでしょう。とりあげるほどの趣味もなく、飲んでも酔った顔を一度も見たことはありません。それでも機嫌よく宴席のムードを盛り上げられました。

翁は仕事の話となれば別人のように厳しく、どんな相談でも引き受けたら必ず実行されました。仕事に自信があったからでしょう。しかしその半面、後輩にはゆきとどいた指導をされました。私の事務所にもよく和服姿で気軽に足をはこばれ、気付いたことは遠慮なく注意されました。そして若い事務員たちによく手みやげの菓子をおいてゆかれました。

私が経営している産学協同センターの基盤となったのは、日本溶接協会東京都東部支部と日本溶接技術専門学校の開設であります。翁はこの事業に私費を投じて協力されました。そのこ

る、東海村には原子炉に火がともされ、やがて宇宙時代がやってくるというときでした。しかし、地元の鉄工業者のほとんどは親ゆずりの家業をつづけるのが精いっぱい、新しい時代に向ける人は少なかったのです。大企業はすでに外国の技術をどんどんとり入れて、いわゆる技術革新時代にはいっていました。中小鉄工業者が時流についてゆけなかったならば、たちまちおしつぶされてしまいます。

私たちは、まず溶接技術者の養成に着目して翁に相談をもちかけました。翁には先見の明がありました。「いままでの徒弟制度の枠の中で育てられた職人では将来役にたたない。理論的な教科編成によって基礎から学習し、学理の上になった技術者を養成することが急務である」と強調され、私は大いに喜び、かつ恐縮しました。

かくして昭和三十二年十一月二日、日溶協東部支部の設立総会が城東公会堂で開かれ、初代支部長として壇上に立たれた翁の晴々とした姿がいまでも私の目の底に焼きつけられています。

それ以来、私と翁との心の交流は深まり、続けられ、それが私に対する励ましとなり、心のささえとなったのです。いまでは日溶協東部支部は全国支部中屈指の組織となり、日本溶接技術専門学校からはすでに三千余人の技術者を業界におくりました。翁の胸像が建てられるときいて故人の遺徳がしのばれ、ことのほか感慨ぶかいものがあります。

和衷協同の教え

尾 和 郡 司

関東信越税理士会常任理事・長野県文部部長
尾和税経事務所長

故羽生田順平翁の胸像完成に当たり、改めて翁生前の業績を偲び、茲に追悼の意を表します。翁の業績の卓絶なることは、今更私が改めて述べるまでもなく、関係各位既に御承知のことと存じますが、私は三十有余年にわたる御交誼を偲ぶよすがとして、翁の事業の一端にふれてみたいと存じます。

私が翁に知遇を得ましたのは、今を去る三十有余年前、羽生田鉄工所が隆運に向かいつつあり、株式会社への発展的組織変更に際し、計理面の依頼相談を受けたときに始まりです。

当時既に翁は時運を見抜き、時代に遅れまいとする努力と、進歩的な考えの片鱗を見せておりました。今後の鉄工業界に協同組織の必要性を痛感され、須坂鉄工組合を組織し、専務理事に就任されて業界発展のため奮闘される一方、時局にに応じて長野刀剣株式会社を設立し、初代社長として活躍され、終戦にいたるや、広く有志を糾合し信濃ゴム株式会社を設立し、ゴム

製品製造の發展に努力され、更に郷土の主産業である製糸業の合同に參画し、信濃蚕糸株式會社を設立し、その手腕業界の認めるところとなり、懇望されて重役の任につき、その發展に寄与するところ大なるものがあつたのであります。然し機を見るに敏なる翁は生來の進取前進の氣性制し難く、この頃中央業界に雄飛せんとの意を固め、凶南の翼をはばたかしたのであります。遂に羽生田鐵工所東京出張所を設立し、日夜奮闘され、其の間に今後の鐵工業界において電氣溶接こそ、その發展の重要な一面を担う点に着眼されるとともに、これに伴う高度の知識と技術の必要性を痛感し、ここに日本溶接技術専門学校を創立し、親しく初代校長の職につき、學と術との一体の実踐へ第一歩を踏み出し、後輩諸子のため、學と術の体得の場をつくる等、まさに時代の先端を歩むの覲がありました。

他方、更に東京都鐵工溶接協同組合を設立し、理事長の任にあたって斯界のためにつくし、日本クラッチドアー株式会社（現羽生田クラッチドアー株式会社）を設立して、これまたその要諦につき、この面での活躍により我が国各種加工産業の合理化上に一大革新をもたらしたのであります。

以上は翁の事業の面について偲んだのでありますが、翁は単なる事業の敏腕家であるばかりでなく、常に進歩的な、そして進取的な考えを持たれ、その上時代を見抜く先見的なひょうめき

を持たれた方でありまして、常に時代の先端を歩む心構えを忘れず、安逸は退歩であるとし、前進に次ぐ前進の気魄を堅持し、これに伴う苦難克服の秘訣は「協力」であると、しみじみ述べ懐かれていたことがあります。この心構えこそ幾多の艱難を乗り越える原動力であったと思われまます。そして溶接業界の偉業といわれるチェコよりの溶接機の輸入による研究と技術の導入は、今日の大学で行なう産学一体の試みに先鞭をつけたものでありますが、これ翁の先見前進の精神の現われであり、この精神こそ日本鉄工業界の発展につながるもので、機を見るに敏なる翁はボイラ製造に飽き足らず、プレスをはじめあらゆる鉄工加工の面に進出し、遂に我が国においても有数なる二千トン級プレスの設備という大業をなし遂げ、羽生田鉄工の名声を天下に轟かせたのであります。

こうした逞しい精神の反面、俠気、信頼感にあふれ、私が東京事務所開設の当時、翁のこの暖かい熱情に触れ、いまだに当時を偲んで感激いたしております。また翁と共に歌舞伎鑑賞の一夕の時、舞台がある場面になりますと翁は涙滂沱として下り、あたかも翁自身劇中の人物になり切っておられるかのような姿を拝見し、その人情のこまやかな心情に接したのであります。そのことを想うとき、そこに翁の片鱗が今更のように偲ばれるのであります。

翁の病篤くなつたと聞き病床に見舞った際、淡々として語られた末、翁のことさらにしみじ

みともらされた言葉は「和衷協同」の一言でありました。思うに翁の生涯は明治、大正、昭和にわたる実に有史以来の大変動のときであります。その激変に耐え、変動を乗り切る奮闘と努力の生涯でありました。翁の胸に去来する七十年の生涯を通して、自ら得た尊い体験がこの一言を吐かせたこととごさいましよう。羽生田鉄工所が今日の大をなし得たその根源には、この精神が脈々として流れているのであります。

私は静かに翁の一言を思う時、実に毛利三矢の教えにも劣らない名言であると、感激した次第であります。

ああ天なる哉、命なる哉。生者必滅の理は遂に翁を幽明の世界に隔てて生前の声もなく、実に翁の逝去は業界発展のため惜しんでなおあまりあるものがあります。あの万里に羽うった翼を今は静かに休めておられることとありましよう。今後、生けるが如き胸像の前に瞑目すれば、ありし日の翁の姿が彷彿として浮かんで参りましよう。この口なにを言わんとするか、曰く「和衷協同」、この眼なにを見んとするか「時世の推移はいかに」、この耳なにを聞かんとするか「時代の声はいかに」、容姿無言とはいえ、大南州の像は東京を見守り、レセップスの像はスエズ運河を見守る。後輩の者、この像により故人生前の偉業を偲ぶとともに、その精神を汲んで自己の指針とするところに意味があると思ひます。翁の胸像また然り。幸いに現社長及

び副社長外一同、翁生前の教え「和衷協同」の精神に徹し、翁の遺業を継がれ、更に進展を目指して奮闘の決意新たなるものがあります。在天の翁、この意を納めて何卒安らかにお眠り下さい。

茲に故翁の大なる功績を偲び、併せて羽生田鉄工所の限りなき発展を衷心より祈って追悼の詞といたします。

羽生田順平会長を憶う

田 沢 義 明

田沢工業株式会社社長

羽生田順平会長逝って一年余り。自らの手でつくり上げ、しかも羽生田鉄工所の躍進への礎をつくった大プレス工場を祭壇の場とし、ここが永遠の別れとなったことは誠に意味深く、会長も感慨無量のものがあつたことでしょう。

自分の構想のおもむくまま事業を推進し、遂に大成して現世を去った会長の靈に、

「カイチヨウノシ マコトニザンネンデナラヌ ダイニロータリーキルンケンセツノ カンセ

イヨ ミセタカツタ アリシヒヨシノビ ココロカラ ゴメイフクヲ オイノリシマス」

と言わざるを得ず、この言葉をもって弔電とした。

私の気持を表わすには、あまりにも短い弔電ではあるが、その永遠の別れの言葉としては何千字の文字を並べても真の心を表わせるものではない。それほど会長を信頼し、尊敬するもののひとりであった。

私は社用にて浦安に行ったそのついでに、羽生田鉄工所をおとずれ、久々に会長にお会いすることができた。そのとき、杖をたよりに温容な態度で応接室におられた。これが最後の別れとなってしまった。それは昭和四十年十月頃と記憶する。

会長に御無沙汰をお詫びし、その後の健康の模様をお伺いすると、「わたしは男としてやるだけのことはやった。悪いこともさんざんやって来たので思い残すことはないよ」と黄色い声をたてて目を細くし、金歯をわずかにのぞかせながら笑っておられた。その笑い、その顔には、何とも表現のしようのないひとを惹きつけ、好々爺としてのすこしも邪念のない、まったく文字通り苦難の道を乗り越え、大発展をさせた羽生田鉄工所の将来への安心感、子息三郎氏外社員一同に対する期待感、すべて達観した清純そのものの面影だったのが羽生田順平会長の晩年の姿ではなかったでしょうか。そのとき私に対して、「ロータリーキルンをもう一基つく

るんだね」と言われた。

聞くとところによると、会長は長野県須坂の出で、俗に言う裸一貫から身をおこし、幾多の苦難の道はあったでしょうが、一国一城の主となって大成功された会長らしい、その積極的な事業熱、根性は、あの温容の中にも充分にあって、その心が私にキルンをもう一基つくれと言ったのかもしれない。

事業熱心と言えば、昭和三十七年一月慈恵医大に入院されておると聞き御見舞に行ったことがある。さだめし床の中でぐったりしているものと思いきや、意外にも元気で相変らずの笑顔で迎えてくれた。「わたしは病気の治療と言うより静養に来ているようなものだよ」と上機嫌（もつとも私は機嫌の悪い顔をみたことはないけれど）。ロータリーキルン製作当時の思い出話、そのときの関係者の動向、旅館の女中さんの話等、よもやま話に花を咲かせた。

話の間に、「仕事は大きいものを手がけにゃ駄目だね。田沢君のキルンをつくっているいろいろ教えられるところがあった。チップケなものをつくっていは事業はのびないね。今度二千トンプレス工場をつくったのもそういうわけだ」と言われ、全く誇らしげに声をたてて笑っておられた。その成功に絶対の自信をもった面影は、今でも脳裏に残っている。

羽生田鉄工所と言えば伝統あるボイラーメーカーで、その技術も優れ、会長は溶接学校の校長

をされていたと聞いていたが、それはそのボイラ専門から多角経営に踏み切ろうとしたその先見の機智から得たものと言えよう。

こうして書いているうちにいろいろの思い出が断片的に浮かんでくる。

羽生田順平会長と最初にお目にかかった当時から記憶を思い出すままに書いてみたい。

私達業界の多くは、その原料である石灰石、苦灰石を焼成するには立炉を使用していたが、将来飛躍するには回転炉（ロータリーキルン）が絶対的なものと考えた。然しこれには莫大な資金を要するばかりでなく、私にすれば大冒険な事業でもあった。けれどもこれを建設すべく遂に踏みきったのである。この製作の発注先を日独製作所にした。時に昭和三十四年十二月下旬でした。

しかしその工事は、発注先の製作所に金を支払わせられるばかりで一向に製作の進捗がみられない。

各機械の製作分担工場を廻ってみたが発注されているところは殆どなく、勿論金も支払われていない。その中で発注はされてあったが要領の得ない状態にあったのが羽生田鉄工所であった。これが羽生田順平会長と初めて会う機会になったもので、誠に縁は異なものと言われるが全くその通りである。信頼と尊敬の出来る人に会うことが出来たのは、これ日独製作所のお蔭

とも言えよう。

私が会長に初めて会ったのは、工場に入って右側の、真中頃の現場事務所の二階で、会長は地下足袋にゲートル巻きの、どうしてどうして負けん気そのものの姿であった。

私は日独製作所に発注してから今日までの状況を詳細に説明し、協力方をお願いしたところ、よし、しっかりやろうと言ってくれた。

会長の申すのには、私ほもと石川島造船所にいたことがあり、そのときキルンを手がけたことがある。齋戒沐浴して立派なキルンをつくりますと、情ある言葉を頂いて思わず頭が下がった。

その後私のところと直接契約し、作業を進めることになったが、今まで一面識もないので何千万円という金が私から満足に貰えるかどうかもおそらくそのときは分っていなかったろう。只々私の今までの苦勞と建設への執念とをみて、同情をもった外に何もなかったといえよう。

側近の者に聞くと会長は、そういう義侠心の持主でもあると言っていたが、その後会長とおつきあいしているうちに、なるほどとうなずかれるものがあつた。

その後昭和三十五年四月頃と記憶するが、建設打合会を開き各関係技術者の方々を拙宅にお

呼びした。そのとき会長は、弁当を持ってきて、これは玄米食だよと女房に見せ、食べてみないかとすすめていた。私も一口食べてみたがゴソゴソボロボロしてまじった。会長が言うほど美味しいものではない。たしかに栄養的には満点だろうが、お世辞に美味しいものですねと言ったら、女房に盛んにすすめた。女房曰く、割合に美味しいものですねと。これもお世辞だろう。さあ大変だ。会長はすっかりその気になって玄米食の弁を一くさり。「私は長い間これを常食にして体の調子がよい。奥さんも」とすすめられ、女房も体の方はあまり丈夫でないので、おいしくないけれど健康上のことを考えてコックリうなずいたものと思われる。そうすると帰京後早速に玄米を炊く高圧釜を贈ってくれた。

何分にも栄養的なものだそうなので、早速炊いてみた。ところが不思議なことに会長から頂いたものよりずっと美味かった。それは弁当と違って温かいうちに食べたので甘味もあり、舌ざわりも割合とよく、結構食べられる代物と判ったのでした。お蔭でビタミンBを豊富に摂ることが出来て健康の面で大いに助かったわけである。

昭和三十五年六月いよいよ羽生田鉄工所から製作されたロータリーキルンの本体が到着し、据付けの段取やら、いよいよ建設は活況を呈して参り、その頃会長は東京にじっとしていられないのだろう、車を葛生まで飛ばして建設の状況を見にこられた。

やはり地下足袋にゲートル巻きというサツソウたる姿だった。

「田沢君大きい工事だ、大きい事業だ、しっかり頑張りなさい」と激励されたものだ。

当地に来ての宿は十五、六キロほど離れた赤見鉱泉と、今はゴルフ場で知られている唐沢山荘とに泊ったものだ。その中でも赤見鉱泉の方がお気に入りだった。ここは川魚料理が主体で、当地方でもおいしいのだが、それよりも鮎のような女中さんがいて、その若鮎にとりかまされて目を細くして、たのしそうに冗談を言い交わすことが出来たので、特に赤見鉱泉がお気に入りだったんだと思う。私の方はさっぱり熱があがらず、ニヤニヤ手酌で側にいたものだ。又、時折り拙宅に来ては女房に健康のことについて何かと注意していたようで、自分が使用して大変効果があった電気治療器があるからとわざわざ届けてくれた。

永らく使用したが、そのうちあきてしまつて今では土蔵の中に眠っている。土蔵の中の掃除をするたびに、この高圧釜と電気治療器が出て来て会長のあの当時の元氣な姿を想い出す。

このように強氣の反面には人情味を豊かにもつ人物であることが充分にうかがわれる。強氣と言えば羽生田鉄工所自身の工場の拡張に当つて前進することのみを考えて資金繰りのほうはサツパリ、金はなんとか「セガレ」がやるよ。オヤジはかけ出す、セガレは鉢巻きで追いかける、こんなレースも度々あったのではないでしょうか。

私の工場建設にあたっては自分自身の仕事のようなつもりでたのしそうにやっておられた。この仕事をして儲けようなんて素振りはありません。仕事は飯より好きだといった感じで軽々と現場を廻っておられたものでした。この精神が羽生田鉄工所を今日に至らしめたのではないのでしょうか。

お蔭で待望のロータリーキルンの建設も完了し、忘れもしない昭和三十五年十月六日点火、事も無く運転出来たときは羽生田順平会長外関係者の協力に対し涙なしではいられなかった。感謝の念と、建設の苦勞と、完成した喜びとが交錯し、感慨無量とはこんなものだろうかと思つた。

あれから既に七年余りの歳月がたつて、当社もその需要を満たすため第二基目のキルンを建設することになった。

その頃会長は健康すぐれず病床におられた。「あと一基つくるんだね」と期待していた会長には社長から伝えてもらった。第二基目の工事は正に突貫工事で昭和四十二年一月中旬鋳入、五月に操業という誠に急ピッチのものであった。その完成を待たずして会長は永遠の旅に立たれてしまった。これが私の弔電となったものである。

私はこの建設の御苦勞に感謝の意を表わすとともに、今はなき会長にせめて写真上でもよ

いから是非工場をみせたいと、羽生田三郎社長にお願いしたところ、オヤジもさだめしよろこぶでしょうと、社長ほか幹部技術員五、六名が来社された。会長の写真は社長にしっかりと抱かれながら工場を見学された。

その後夕食をするため唐沢山荘に行った。その座敷の床の間に写真を置き、供え物をしてその前で会食した。

そのとき呼んだお酌さん二名が、写真の会長をみてこのオジサンに会ったことがある、それもこの座敷だと言うことになり、私もびっくりした。私と会長とこの山荘に来たことはあるがこの座敷、そしてこのお酌さん二人とはすっかり忘れていた。当時の会長のこの座敷での模様などを聞いて、社長はこの偶然にオヤジもさぞ喜んでいるでしょうと、すっかり感激したものだ。

想うに会長は、事業熱に関して極めて旺盛であり、誰にも負けん気のキカン坊でありながら、反面非常に人情味のある、酸いも辛いもかみわけた人物であることを重ねて記し、氏が何時までも羽生田鉄工所の将来を見つめ、はげまされんことを。会長よ、安んじて眠れと、心から祈りつつ筆をおく。

(昭和四十三年七月三十日)

会長の笑顔

溝口好雄

若葉が萌え緑茂り、紅葉散り寒風肌を刺す時節が来れば一年は終わる。早いものだ。会長逝いて二年になろうとしている。肉体が減びるとともに、その人も忘れられ勝ちになるのは世の常である。然るに会長の徳を偲び、従業員諸氏集まりて胸像を建立し、永久に偉業を賛えんとする。誠に美しき限りである。

遠く忘れ去ろうとする想い出も、また新たななる感情とともに蘇ってくる。

会長はほんとうに苦労人であったからこそ真の愛情というものを知っておられた。

中小企業の置かれた地位、競争激甚下の中から突出する為に最も必要なのは人の和である。

その人の和は、愛情によってのみ培われるのだ。会長はその表現を最も判り易く言っておられた。

「うちの従業員は家族じゃよ。喜びも悲しみも同じじゃよ」この精神が全従業員に徹底したれ

ばこそ企業の発展があったのだと、私はいつも尊敬している。

またその精神は永く伝えられていく事と思う。

会長は人の話を良く聞く。知識人から一工員に至る迄、熱心に耳を傾けた。そしてその中から将来への理想、実行方法を考えておられた。

私の最も偉大だったと思うことは、

「不況時にこそ設備をし、好況時にその設備によって多くの利益を生み出す」

これを強い信念をもって実行された事だ。常人の出来る事ではない。

会長は如何なる苦難も乗り越えて行った、而も笑顔をもって……。

私はその偉大さを今また想い返している。

槌の音を、また交錯するモーターの音を音楽として耳を楽しませ、自分の理想を大半実現して生涯を終わった会長は満足であったであろう。

——愛する第二の故郷江戸川工場に

靈みたまあらば 来り宿りて 我子等を いつくしみ励まし 導きて

弔 辞

東本願寺本山

長妙寺門徒羽生田順平殿

志操堅実勤儉産を治め、家業愈々盛大、而も本宗の宗義を信奉し、菩提寺の経営に参与し、其の功見るべきものあり。今や忽然其の訃音に接す。哀悼の至りにたえず、茲に香一炷を献じて弔意を表します。

昭和四十二年一月二十二日

弔 辞

三 幣 庫 吉

東京都鉄工溶接事業協同組合理事長

(株)麻生鉄工所会長

羽生田順平氏に最後の御挨拶を申し上げます。

あなたはここ数年來何回か入院加療に専念し、その都度あなたの偉大なる精神力、生命力は常にこれらの大病を克服し、近親知己をして驚嘆せしめて参りました。

昨年暮入院されたことは、御子息三郎氏より伺っておりましたが、「相変らず元気ですよ」と申されたことを信用していただだけに、こうも呆氣なくお別れ申し上げねばならないと誰が思いました。

生前、私達業界が受けた海山の御恩は、まことにはかり知れぬものがありました。

想いおこしてみますに、十年前この地に日本溶接協会の支部を設立する計画を樹てられ、直ちにこれを実行し、御老体にもかかわらず、みずから先頭に立って有志を歴訪され、地域青年の溶接技術の習得の急務と、これが教育機関としての支部設立の必要性を力説され、多くの賛同者を得て、極めて強固な支部の設立をみたわけであります。

支部育成に当りましては、これ亦献身的な御努力を傾けられ、六年有余にわたり最高責任者として、私達会員の御指導に心血をそそがれました。

また、あなたは我々中小企業のひ弱さを痛感され、これからの中小零細企業者は大同団結が何より大切であり急を要することを喝破し、第二弾として昭和三十四年、圧力容器同業者による協同組合の設立を呼びかけられました。

当時としては永い年月自己の殻に閉じこもり、近隣の同業者とさえ接触を持たぬ我々としては多少の杞憂もありましたが、あなたが信念とする「われよりも先ず人のために」、あるいはまた「人の嫌がることに進んで取り組め」等々、明け暮れのおさとしは、聞く人の心に受けとめさせ消化させ、実行に移す御指導はいまなお私達の心に脈うっております。

こうしたあなたの御尽力により、翌三十五年六月予定した同志を集めて、あの難題であった東京都鉄工溶接事業協同組合が、鉄の団結をもって花々しく設立されたのであります。

その後組合のためにお尽し下された数々の功績ははかり知れぬものがあり、いまお別れに当り当時の御苦労が一入しのばれ、私はじめ組合員一同深く感謝申し上げる次第であります。

おかげ様で組合も順調な発展をとげ、東京都よりモデル組合工場の指定を受ける名誉をかちとりました。

あなたの手がけた機械は、昨日も今日もすさまじい音をたて、組合員のために力一杯働いております。何卒御安心下さい。これから先も組合員一同心を一つにし、益々組合を繁栄させ、亡きあなたの御霊にお応えする所存であります。

羽生田さん、それではお別れます。どうぞ心安らかに冥されんことをお祈りします。

昭和四十二年一月十四日

弔 辞

川 村 千 春

(社)日本溶接協会東京都支部支部長

小松川化工機(株)社長

私はいま郷土の先輩、業界の先輩でもある故羽生田順平氏の霊前に溶接協会を代表して永いおわかれをつげるにあたり、ただ万感きわまり、申す言葉もありません。あの元気だったおやじさんの温顔、これから先も永く私の胸に残ることでしょう。

苦しかった時、悲しかった時、くやしかった時、いつも私どもを慰め、はげまして下さったおやじさんのお姿、気高くさえあったあの慈愛深いまなざしが、今さらながらまざまざと浮かんでまいります。

おやじさん、あなたはいまどきまれにみる苦学力行の士でした。少年のころ大志を抱いて、あの草深い、文明からみすてられたような小天地を抜け出し、上京して石川島重工の一職工として働きながら夜学に通われ、羽生田鉄工所の今日の素地をつくられました。

それから四十有余年にわたる苦闘は涙なくして語ることができぬほどでした。ただ、石にか

じりついても初志を貫徹するというおやじさんの執念ともいべき根性でした。

私達はおつき合い願ってから今日お別れするまでの間、多くのことを、おやじさん、あなたから学ばせてもらいました。

その第一は

「自力更生堅忍持久」

の精神でした。

第二は

「絶えざる前進」

ということでした。おやじさんは近代的な科学と技術を、思いきりとり入れて、新しい産業の開発に力を入られました。

羽生田鉄工所の今日の繁栄の基礎が築かれ、あわせてわれわれ業界が先進工業地区と互角に事業を続けられるのも、すべておやじさん、あなたの適切なご指導によるものでした。

またおやじさんは特に技術教育の振興と、人材の育成に重きをおかれ、ご自分の少年時代の夢を現代青少年に期待せられたようでした。

第三は

「協同一致の精神」

であります。昭和三十二年、この地の溶接技術の遅れを嘆かれ、同志を募り社団法人日本溶接協会東部支部を設立せられ、自ら先頭に立ってこれが技術の向上に異常なる熱意を示され、地域産業の振興に努力された功績は誠に偉大なものであります。

いま、支部設立当時をふりかえってみたとき感慨無量であります。一銭の基金すらない支部経費を私財をもってまかない、実技試験場講習会場等に惜しげもなくご自分の工場施設を、また材料を提供し、若人の溶接技術の習得と技術の向上に、文字通り滅私ご尽力下されました。当時いかなる講習会にも必ず出席され、勉強にいそしむ若い方々の肩をたたかれ、優しいはげましのお言葉をかけられ、また時には寒空の下で実施した実技講習会にしばしば杖を頼りに立たれた尊いお姿に、これから私達はお目にかかれませんが、永遠に私達の脳裏から消し去ることとはできません。

日本溶接技術専門学校の創設もおやじさんでした。これもまた多額の私財を投じ、機械を設備し、実習室の改造をやりとげ、学校の今日の隆盛の素地をつくって頂いたわけであります。支部も学校もおやじさんの血はいつまでもつきることなく清く流れて行くことでしょう。

おやじさん、支部はおやじさんが口ぐせのように言っていた「どうせやるなら日本一にな

れ」いまそのとおりになりました。

また、業界の企業の近代化と合理化を押しすすめるため、同志を結集し、事業協同組合を設立し、業界に新風を吹きこんだのもおやじさんあなたでした。

本当に永い間小さな私達のために大きな苦勞を下さいまして有難うございました。

このようにおやじさんの御指導でやり抜いた共同の事業はすべて成功し、他業者他地区より羨望されております。欲を申すわけではありませんが、おやじさん、もっと永く生きてもっと発展する私達の姿をみて頂きたかったことが心のこりでありませぬ。しかしおやじさんは先見の人でした。おそらく先の先までよんで、お前達みんなが力をあわせ懸命に努力をつづければ、必ずより発展すると見通して安心して地上を去られたことと思います。

人は死んでも事業は残る。おやじさんの残してくれたこの聖なる事業をより発展させ、守ることこそ、おやじさんのご恩に報ゆる唯一の道であり、その道をまっしぐらに進むことを靈前にお誓い申し上げます。

それではおやじさんお別れします。

願わくは業界の守護神として永久に安らかにお眠り下さい。

昭和四十二年一月十四日

弔 辞

太 田 幸 義

(株)太田製作所社長

羽生田君！ 順平君！

呼べど叫べど戻らない返事を承知しながらもう一度と思ふ悲しみ！

君は手の届かない永遠の旅に立とうとしている。この時に当って、五十年に亘り過ぎ去った数
数の思い出を胸に抱き乍ら惜別の言葉を述べなければならぬとは何と悲しいことであろう。

そもそも、君と知り合つたのは大正八年長野県須坂におられた頃、製糸工場のボーラ等の仕
事をお頼みして以来、私とはうまが合うというのか、何となく心が通じ、互いに信頼しあい、
会う毎に二人の友情は深まり、遂に昭和十二年日支事変が起こり世の中が激変するや、心に期
する処があり、二人して事業を起こすべく車坂に事務所を開き、東京へ進出した。資金もなく
「つて」もないが、若さに頼り一生懸命頑張つた甲斐があつて日東製鉛、カルピス会社の仕事
を得た時は、手を握り合つて男泣きして喜んだ。以来、全国的に手を広げ、事業の拡大を計つ

てその成果が挙げられた頃、大東亜戦も終戦を迎え、私は家業に専念することとなり、君と別れたが、よくここ迄頑張つてくれました。

五、六年前上京した折、君に休養するように話しましたが、工場の音を聞いてないと心が休まらないと言っていたが、やはり体に無理があったのではなかったか。苦勞も多かったが、共に事業を進めて来た君と、これからは老人同士、いつまでも語り友達として楽しい日を送ろうと思つておつたが、幽明境をへだてることとなり、天の無情を歎きます。

しかし、君が残した業績は永遠に輝くであります。

どうか安らかなご昇天を祈ります。

昭和四十二年一月十四日

弔 辞

戊 申 同 級 会

(代表 牧晴雄)

戊申同級会を代表して謹んで羽生田君の靈にお別れのことばを申し上げます。

君は小学校時代からつねにあらゆる方面において私達より一歩さきんじていました。もって生まれた豊かな才能によるものとはいえ、人知れぬ努力あったればこそでありましょう。

私達はつねに尊敬してやまなかつたのであります。よく遊びましたあのなつかしい鎌田山に登り、何かにつけリーダー役を引き受けてくれたのであります。さらに友情の深さにいたっては数々の思い出をもたぬ友人は一人もないにちがいありません。

須坂小学校に机をならべた日々、そしてお別れしたあの明治三十九年は、日露戦争終結の翌年でした。

君は上京、日本工手学校に入学、石川島造船所に入社されたが、ご尊父の鉄工業継承のため帰郷され、製糸関係機械ボイラの製作に専念され、優れた才能と努力で着々発展の緒につかれたのであります。当時、年若き青年の君が業界に大きく飛躍の一步を踏み出されたことは、一般が驚異の目をみはったのでした。

昭和十三年には須坂駅前現在の場所に工場新築、本上町より移転され、工務と業務の総合的事業の統合をはかり、東京に支店、長野・高田・十日町に営業所を開設して事業の拡大を計られた、その勇猛果斷に勢を得た君は、続いて昭和三十年一月東京都江戸川区小島町の広大な敷地に東京工場設置、内外の受註に、中央業界に躍進せられたことは同級生としてその朗報ある

毎に歎びあったのでした。

昭和三十五年には溶接技術専門学校を創立、初代校長に就任、その他関係事業の団体結成につとめられ、いずれも要職にあってわが国鉄鋼業の発展に寄与されました。

昭和四十年二月には、産業功労者として日本学士会よりアカデミア賞を授賞表彰される栄誉をかちとられたのであります。当時、同級会一同は上京、お祝いにまいり、かえって歓待を受けて帰ったこともありました。

数々の思い出があります。小学校卒業以来六十年継続した同級会にはあの忙しい中何をおいても来て下さって、共々に健康を誓いあったのですが、病魔のおかすところとなって、ご家族親戚友人多数の方々にかこまれて一月十一日午前零時四十八分、ついに黄泉の客となられ、永遠のお別れとなった。なんとなかなかなしみでしょう。いかに惜しんでも、惜しんでも惜しみたらない思いであります。

ここに同級生一同を代表して心から哀悼の意を表します。

羽生田君のみたまよ、どうかやすらかに永眠せられんことをお祈り申し上げて、お別れのことばといたします。

昭和四十二年一月二十二日

弔 辞

(株)羽生田鉄工所本社・工場

(代表 畔上仲次郎)

親父さん、親父さん、今私達は変り果てた親父さんのお姿を眼の前にして、ただ呆然と涙さえ出ない始末であります。

この正月、病状が悪化されたとの報せをお聞きしておりましたが、「親父さんは死ぬものか、決して死ぬ筈はない」と思い込んでおりました。

それなのに、親父さんはどうして病気に打勝つことが出来なかったのかと、くやしくて、くやしくてなりません。

親父さんを知らない若い人達に、あの立派な、あのにこやかな親父さんのお姿をひとめ見せてやりたかったです。

私は三十九年間という長い年月を親父さんの側で働かせてもらいました。私達のどんなくだらない言葉にも耳をかたむけ、共になやみ、共によるこんで私達の将来を思っていて下さいま

した。

満州事変、支那事変、太平洋戦争と、あの長い戦争の中にあっても、只前進、前進と、寝るまもねないで事業の上に親父さんの心は火のように燃えさかっておりました。その反面、社会のためにも数々の功績を残してゆかれました。親父さんは常に人間を作れ、立派な人間にならねば決していい職人にもなれないぞ、親に感謝を忘れず、妻や子供を可愛がらねばいけないといつも私達をいさめて下さいました。

親父さんの築きあげたこの工場に残された私達は、今只今から、心を新たにして社長、副社長を中心にもっともっと良い工場にするために、いたずらに悲しみ泣くばかりでなく、明日への努力を誓いたいと思います。

どうか親父さん、遠い天国から私達を見守っていて下さい。

そして、いつまでも、私達の心の中に生きつづけていて下さい。

では、これでお別れいたします。

昭和四十二年一月二十二日

弔 辞

(株)羽生田鉄工所東京支店

(代表 立野俊雄)

病床にあって夢にまで見ておられた、この親しみ深い工場において、本日、故羽生田会長の葬儀の執り行なわせらるるにあたり、われわれ従業員一同は、ここに謹みて故会長の霊前に心からの敬慕の情と哀悼の誠を捧げます。

私どもの会長、会長には既往のご病氣療養のためのご入院ではありましたが、あまりにも突然のご他界に一同ただただ茫然としてしまったわけです。

ただ、かりそめのご病氣と思っておりましたが、かくまでにわかたに逝かれようとは全く信じられなかったのであります。

しかし、今やわれわれはこの悲しむべき現実の前に、ひとしく首をたれ慈父と慕い、恩師と仰ぐ人の面影を追うよりほかにないのであります。

顧みればありし日の会長は私どもにとって実に偉大な存在でありました。

事業に関しては孤軍奮闘、いうなれば仕事の鬼となつて率先お示しになったこの信条は、おれわれに対する尊い教訓であり、今でもおれわれの脳裏に奥深く躍動しております。

また、会長がわれわれ従業員を見ること家族のように、家長として各個の意志を尊重せられ、従業員の生活、福祉に絶えず留意されたことは、誠に感謝にたえないところであります。

そのためにこそわれわれは後顧のうれいなく業務に精進することができました。

そして明るい働きよい会社、住みよい会社として、常に親しみと感謝を持つことができたのであります。

なお、社会的には幾多の要職につかれ、業界はもとよりわが国産業発展に貢献せられたその功績を認められ、先年、日本学士会より榮譽ある「アカデミア賞」を授賞され、その喜びにあふれた面影が目に映るようであります。

しかしながら、会長は一步前進、また前進と止まるところをしらない性格で、まだまだなしとげたい仕事も多々あったことでしょうが、それが叶えられず本当に残念に思いでしょう。

われわれから見れば、会長は大成した偉大な人物です。

これは偶然か、会長のご戒名に「大成院積順明居士正定聚位」とありますが、回顧して、会長の生涯がこの戒名にことごとく表わされておるものようです。

今われわれの前には会長の柩が安置され、大勢の方々に見送られ、去りがたいこの社屋から郷里へお送りしようとしているのであります。

我々は、今、只々悲痛傷心のうちにありますが、各々の仕事は決して忘れておりません。

幸いにして社業はいよいよ盛んなるものがあり、会長の遺志を受け継いだ新進気鋭の社長、副社長並びに諸役員をいただき、一致団結し誠に力強いものがあります。会長のご遺訓を守り、会長精神を永久に生かすことを心から念願しつつ、業務に励む覚悟であります。

希くば、われわれの衷情を受けさせられ、社業の安泰をお守り下され、そして、安らかにご永眠されんことを。

昭和四十二年一月十四日

弔 辞

(株)羽生田鉄工所東京工場

(代表 菅原与左衛門)

本日、この親しみ深い社屋において故羽生田順平会長の葬儀執り行なわせらるるにあたり、

われわれ工員一同はここに謹みて、会長の霊前に心から敬慕の情と哀悼の誠とをささげます。かえりみますれば、在りし日の会長は、わたくしどもにとりて実に偉大なる存在でありました。

われわれ従業員の生活福祉に絶えず留意され、自由を尊重され、働きよい社、住みよい社として常に親しみと感激をもつことができたのであります。

わたくしどもは病院に病を養うと聞いて、一日も速やかに全快されんことのみを祈っておりましたのに、温顔を再び社内を迎えることなく永眠なされ、われわれの前には会長の霊柩が安置され、われわれ従業員はいままさに社屋からお送りしようとしているのであります。

われわれはいま悲痛傷心のうちにありますが、おのおのの仕事はけっして忘れておりません。

われわれは社業の発展を御遺訓として守り、現社長のもとに会長の築き上げられた精神を、永久に生かすことを心から念願しつつ、仕事にはげむものであります。

願わくはわれわれの衷情を受けさせられ、安らかに永眠されんことを祈ります。

昭和四十二年一月十四日

ちようじ

孫 一 同

(代表 羽生田真理)

おじいちゃん、私たち孫をたいへんかわいがってくださいありがとうございました。
私たちが工場へ行くと「よく来たな、よくきたな」とにこにこ顔でむかえてくださいました。そして「いっぱい食べて早く大きくなってくれ」「学校はいつ卒業かな」といつも同じことを言っていました。

また、こんなことがありました。「庭のつつじが美しく咲いているから散らないうちに見にきなさいよ」と電話があり、家族そろって行ったところ、おじいちゃんは庭にイスを出して、こしかけていました。そのまわりを、おじいちゃんがかわいがっていた犬がぐるぐるかけずりまわってじゃれていました。

池のさかなにえさをやったり、写真を一緒にとったり、おこづかいをいただいたり、とても楽しかったことをおもいだします。

おじいちゃんは私たちが工場の中を見てまわるととてもよろこんでいました。私たちはおじいちゃんの志をしっかりと胸にいだいて、一生懸命がんばりますから、おじいちゃん、やすらかに天国で見守っていてください。

さようなら、おじいちゃん。

昭和四十二年一月十四日

追

憶

第二部

うちの従業員は家族じゃよ。喜びも悲しみも同じじゃよ。——羽生田順平

お名を呼ぶ

畔上 仲次郎

この度、先代社長の胸像建立、追憶集ご発行の意義深いお催しを心からお慶び申し上げます。

社長は二十一歳の若き頃より会社の経営者として進取の気性に富まれ、仕事と外交の両輪にたくみで、今日の名誉ある工場を創建されたのでございます。

私はこの三十有余年の長い風雪の下を社長と共に歩んで来ましたので、あのこと、このこと、思い出せば数限りなく、二枚や三枚の原稿用紙などに書き現わすべを知りません。

一例をあげますと、昭和二十三年頃のこと、揚水ポンプの概況を兄弟子や職人にいくら聞いても教えてもらええず困っていると、社長がやって来て、「よし、いくらでも聞け」と言って、細大洩らさず教えてくれました。お陰でその仕事を立派に仕上げられ、兄弟子たちの鼻を明かしてやったことがあります。

社長はあらゆる仕事の奥の奥まで研究され、職人達のよき指導者として自ら陣頭指揮にあたっておられました。

社長は子供の頃から苦勞され、私が奉公に上がった時分には厳格な養父のもとで休む暇なく努力されていたお姿を思い起こすと、胸が一杯になります。一見、無軌道なようでも、社長の蒔いた種は必ずきれいな花を咲かせました。

また、私が仕事の失敗で大ヤケドした時も、回復するまでの二、三年間、それこそ親身も及ばぬご心配やご配慮をいただき、その時の有難かったことは生涯忘れることが出来ません。私は死ぬ日まで社長の尊いご教訓を守って、工場のために働く覚悟でございます。

社長こそ私ども一家の救いの神であると思ひ起こすたび、懐しい社長のお名をお呼びしております。

社長のご冥福を心からお祈りするものでございます。

親父さん

有賀一夫

眼鏡して小柄な親父さん

冗談話もすきだった親父さん

いつも白い犬が一緒だった

職場を廻り注意と慰労の言葉

おーす、集まってはいろいろな話

やがて杖がふえ付人の手を借りるようにな

姿を見せるのもときれがちになり

疲れるのだったのでしょうね

今は根となった親父さん

どんだん芽が出るよう見守って下さい

親父さん……

人生の鏡

泉 沢 清

このたび会長銅像建立、追憶集刊行等、一連の記念行事の行なわるるにあたり、時あたかも明治百年記念行事も行なわれ、一従業員として故会長をまさに偉大なる人物として追憶し、その業績、人格を改めて顧みるとき、自分に対する反省と、猛然たるファイトを将来に持つべく、浅学非才をも顧みずあえて一筆末席に加えられるれば幸甚とぞんじ一筆申し述ぶる次第。言うべくして言い足らず、言うべからずして言い過ぎしところは重々ご判読のほどを。

明治維新も事成りてまだ十有余年、一部にはチョンマゲ姿も珍しからぬ時代、英国における産業革命が行なわれてまだ五十年足らず、英国においてはようやくに資本主義の基礎が固まりはじめたころにあたり、一方わが国においては全力を傾倒して諸外国より鋭意その先進産業、技術を導入して、現在のわが国の基礎を、国力をあげて造成するその緒につきはじめしころと覚える。

その頃お生れになった故会長は、年若くして将来を予見し、国力の基礎産業たる鉄工関係の事業に踏み出され、爾來幾星霜、幾度か危機に見舞われしも現在の磐石の基礎を築かれし業績はまさに立志伝中の人と言うべく、しかもポイラという産業革命の花形産業に着目し、これ無くしてはわが国の産業の発展も危ぶまれる事業に関与し、年を経るとともに研究に研究を重ね、自己を犠牲にしても、業界のため、献身努力なされた。

その真摯な態度は業界の先達、リーダーとしてその尊敬を一身に集められ、業界に率先して新しい設備を整備し、新機軸を生むと同時に新検査設備を設け、いよいよ羽生田のネームバリューを高め、あわせて業界の発展のため、多くの公職を兼ね、その間、将来のため青少年の教育、育成にも鋭意努力を傾けられた。まことにわが人生の鏡として尊敬するに足る人物たりしことは、ひとり自分のみならず、広く人々の認むるところ。

願わくばその千分の一、万分の一たりとも、自分の言動に影響を与えられるよう努力するとともに、常に心に会長の姿を偲びつつ意義ある人生を送ることができればと思います。そしてついには悟道に入り、会長のごとき大往生といわるる人生をまっとうするを目標に一生懸命努力いたす所存です。

昔話

泉田智哉

私が羽生田鉄工所に入社するいきさつはY社社長Nさんの御紹介によるものですが、当時の私の職場はボイラ等製罐の仕事には関係がなかったので、羽生田鉄工所の事業内容は何も知りませんでした。そのような状態で何故羽生田鉄工所に入社したかということになります。その原因は会長の若かりし頃の事業に対する逸話をNさんから聞かされたことから始まります。

終戦当時長野県の味噌醸造は県農協の管轄下にあったそうで、Nさんは農協の指導的地位におられたのですが、たまたまU工場のボイラ設備工事の計画に当り、同上工事の入札を行なうことになり、会長も同工事入札に参加したのだそうです。

そして落札し、工事に取りかかったのです。ところが日々経過するのですが一向に現場に人が来ないし、仕事が進まないのが会長を呼び、何故仕事が進まないのか理由を問い正したところ、いわく「金がないので材料が買えない。したがって仕事をしたくとも出来ない」とのこ

とだったそうです。このようなことを事情はともあれお得意様に言い切れる人はそう多くいるものではないでしょう。

この話をNさんから聞かされた当時の私は、この上ないはげましをおぼえると同時に何かすがすがしい男らしさを感じさせられたことをおぼえております。しかしそのような会長にNさんは材料手配の面で協力し、Y社のボイラ設備を完成させました。ある意味では会長の恩人とも思います。これもNさんが会長の人間を買ったが故であり、会長の人柄が偲ばれます。私はこの話を聞いた時、ボイラとはどういうものか何もわかりませんでした。今、羽生田鉄工所の一社員として「横煙管ボイラ」であることが思い当ります。

Nさんが私にこの話を聞かせてくださったのは、私が個人の立場でY社のサービス仕事の現場にいた時でした。その間の事情についてはNさんもよく存じておられましたし、私に同情の念をいだいておられたかに思っております。Nさんは私のフリーの不安定な生活を思っ下さり、また羽生田鉄工所の会長はそのような人柄の人であるから働いて見る気はないかとすすめてくれました。

その時私は羽生田鉄工所入社を心にきめておりましたが、種々事情ある中でのことでしたので、一応心にかけておくことにし、周囲の事情がゆるされる状態になって、改めてNさん上京

の際お願いをしてご紹介をしていただいた次第です。

二、三年前Y社の横煙管ボイラが廃伍され、ハイパワーボイラが新設された話を日本シルクのサービスマンにいた時間かされました。パーナーは日本シルクのハイパワーボイラについているものと同じ13Y型でした。何か私はY社のボイラと私とのつながりを感じたものです。ハイパワーボイラは本社で納入しました。また同工場にはクラッチドア缶も東京工場より納入しておりますが、当時私がお世話になったMさんと東京工場でお目にかかった時は、Mさんもびっくりしておられた様子でした。

前述のように私はボイラ等製缶の仕事は何も知りませんでしたので、Y社で生まれて初めてボイラを見、クラッチドアを見、鏡板を見、鉄板がこのように美しく加工が出来るものであることを知り、それが羽生田鉄工所の製品であり、そして私が羽生田鉄工所の一員である現在を思うと、何かしら不思議な感慨におちいります。

入社以来最初に会長と話したのは工場事務所新築に関して資料を集める件についてでした。最後は事務所にいる時、あることでおこられた時でした。一度おほめにあずかったこともあったようです。仕事の性質上会長と直接話す機会はあまりなかったのですが、私だけが知っている会長の若かりし頃のことを思うと、会長に対する感情が身近な所にあったのだと今思い出さ

れます。これから長い年月仕事をして行く時々思い出すであろう会長の若かりし頃の話は、私の心の糧になることと思っております。

技術屋として想う

井野辺 淳

朝の東海道本線、出張の帰路、薄もやに柔らかく包まれて続く車外の景色にうつろな瞳を向けている。忽然と球形タンクの偉容が視界を射る。なだらかに続く周囲の平坦部に比べあまりにも対蹠的であり、ふと今は亡き会長が頭に浮かぶ。球形タンクとの連想はことさら、言を待たない。このタンクの骨格的加工を成すプレスマシンを導入、育成されたこと、今日わが社の主要部門までに発展した現状から、偉大な事業家として将来への卓抜した情勢判断に敬服し、今日あるわが社に働く喜びを感謝しているものである。

☆

時にふれ、われわれ設計業務にたずさわる者としての自覚を常に啓蒙されておられたことを

思い出す。「車中・街中を問わず常に事物・現象に眼を配れ」という主旨のお言葉であったと記憶する。これは何も当世ハヤリの女性の“mini”までにもというのではなく、同じ目でも“machin”の方であることはいうまでもない。苛酷激烈をきわめる現代社会に企業として生き抜いて行くためには、「より良い、特色ある製品」を研究・改良・開発して行かなければならないことは周知のことである。「良い製品」とは全体的に見て機能特性・品質・コストの三つがバランスしていて、少なくともその中の一つは他社水準よりまさっていないければならぬ。そのためには常に「敵を知り、己れを知る」ことが必要であり、ここに内外の情報・資料の収集の重要性が生ずる。確実な情報があつてこそ、現在・将来への情勢判断が可能となり、時流にマッチした設計を行なうことができる。また、たゆみなく蓄積された数多くの技術資料は迅速に活用できて設計業務のスピード・アップ、設計品質の向上に大いに役立つものである。およそ設計するということは個々の技術資料の活用が八〇パーセントで、個人の独創性の盛り込みは数パーセントに過ぎない。しかしその数パーセントが重要な価値を持つのだともいえよう。そのためには技術者たるもの常に各種、内外の資料収集に心掛けていなければ時代に取り残されてしまうと思う。

☆

前会長の即時速行、妥協を許さぬ一面は、われわれ従業員だれしもが体験した懐しい思い出であろう。スピードとタイミングの重要なことは周知の事実であるが、設計業務には「考える」という時間的に不確実な要素が多い。したがって期日までに設計を完了することがむずかしいというジレンマに常に出会う。遅れた図面はただの紙きれである。ただ、腕をこまねいてはならないので、良くない頭を絞り絞りどうやら間に合わせたものである。

技術とは「本来理論上可能なはずでも、実際経験上において不可能と思われるものを可能にすることである」と聞く。いいかえれば「無い袖ふるのが技術の仕事」である。したがって無理なこと、困難なことこそ改善・進歩のチャンスと考え、創意工夫し、仕事を成して行かなければならない宿命の仕事である。ただし無理なこと、困難であったことを創意工夫し、定められた期間に解決できた時の喜び、ささやかな自己満足感は、われわれ技術者でなければ味わうことのできない特殊な感情であろう。また、こういう苦境を一つ一つ越えて行くことこそ進歩して行く過程でもあろう。

☆

会長がまだご健康で活躍されておられたころ、基準局の検査に先立ち社内検査と、官検立会いに事務所より工場へたびたび行った折り、先ず質問された事は「製品の仕上げ程度」であ

り、缶体各部のスパッターの有無、機器コーナ部の仕上げ等の結果に關することであつた。わが社の製品が鉄鋼を素材とした固いものであつても、機器の素面を屈強な男の手のヒラでなく、柔らかな女性の手のヒラで触れても傷がつかない高レベルの仕上げまでを望み、指導されていたこと、このことは概して鉄工加工業に見られがちな大マカナ加工・仕上げの欠点を鋭くさとされ、製品に対する愛情度を高められようとお考えの一面であつたと考える。現在、この遺志が広く深く製造部門の人たちに浸透しており、完成品を見る外来の技術者・ユーザーの世辞の無い感心の声を聞くにつれ、「会長の指導方針の賜物である」と語れるささやかな誇りを常に味わうものである。

☆

かえりみるに、会長のお身近で働く月日の数少なかつたわれわれ設計担当の者ではあるが、その折々述べられた数々のお言葉の内容には、おのおの意味深い意図が感じられたものである。『凡人の浅はかさ』で充分その御意をくみ取ることが少なかつたことをおわびするとともに、残された偉大な業績とご教訓を生かし、ますます発展するわが社の一翼をになう従業員たらんことを目標に努力して行かなければならないと思う。

会長の気力

内 田 直 吉

会長の思い出と言われても私は入社して日も浅く、会長と話をしたこともありません。

あそか病院へ入院されている間、二、三日会社へ帰って来てはまた病院へ行くというような様子でした。

今でも印象にのこっているのは、杖をつき、社長の肩につかまりながらプレス工場や各工場を見てまわる姿でした。

苦しい闘病生活をしておられながら、自分の設置したプレス工場を見てまわる会長、その気力が、今日の躍進の基を築いたものの一つでしょう。

これからますます発展躍進を続け、一流の会社になるよう、実質的にも精神的にも、羽生田鉄工所の従業員として努力したいと思います。

笑顔で話す言葉

菊池常男

会長が死んでから一年半の時間が流れた今日、生前の姿を想い浮かべながらつれづれなるままに筆をとった。親しみやすい笑顔を、人柄を考えた時に、私は「親父さん」という言葉で書きたいと思う。前置きはこのくらいにして……。

私が入社した当時、つまり十年前の工場は、現在の姿をみた時に、想像もつかないほどの貧弱かつ小規模な設備しか持たないものだった。いかに、親父さんの残した業績が偉大なものであるか、今の工場を見た時にすぐわかるうというもの。しかしその裏にかくされた親父さんの苦勞を、若い世代のわれわれはしよせん知るはずがないし、想像もできない。

親父さんは、現場をまわるたびに、よくこんなことを言った。「あんちゃん、気をつけてやってくれやな」笑顔で話すその言葉に、私自身すぐく愛着を感じていた。

そんな会長の笑顔には、会長の若き日の苦勞や経験の苦しい想いなど少しも感じられなかつ

た。また、私たち若い者の苦労や悩みを一掃するかのような笑顔と私には感じられた。そうではなければ、生意気な言葉だが、会長の職人気質というものが、われわれ従業員に対してそう感じさせたのかもしれない。ともかくもよく気を使ってくれた親父さんだった。

それから忘れられないのは、あの高い張りのある声。朝礼の時には、必ず聞かされた。高齡にもかかわらずよく出るものだと感心するほど。今でも、耳を澄ませば聞こえてきそうだし、かしそのころから、親父さんは、病気との闘いが始まり、床に居ることが多くなり、やがては入院という大事に至った。

そんな初夏のある日、私は四年間の夜学生生活も終わったので、お礼をも兼ねてお見舞に行った。はじめは喜んでくれたが、突然大きな声を出しながら子供のごとく泣きだした。うれしかったのか、あるいは心強く思ってくれたのかわからないが、私自身はあまりいい気分にはなれなかった。もっとも、入院生活をしていると何となく孤独感に陥ることがある。私もその直後、腰の病気で入院したことがあるだけに、親父さんの気持が何とはなく理解することができるよう思う。

現場にあれほど顔を見せた親父さんも、その後は、途絶えがちになり、不安ばかりがつのる一方だった。そして昨年一月、ロウソクが短くなり、その灯が消えるかのように、親父さん

の人生の灯もはかなく消え去ってしまった。

他界の人となつてからなお一層愛着を感じる自分に気がついた。

物を大切にしたら親父さん。

われわれよりもっと若い世代の従業員の名前を覚えずに死んだ親父さん。

でも親父さんの魂は、生き続けていると、私は思う。

親父さん、安らかに眠ってください。ご冥福を祈りながら、これにて筆を置きます。

根性の勝利

北 沢 洋 一

故会長のもとで私が働いた年月は、約十年であります。十年という時間はいへん永い年月ですが、ウカウカと過ごした私にはたいそう短く、初めて親父さんにお目にかかり、挨拶した時のことが、つい先ごろのことのように思えてなりません。しかし思えばこの間、親父さんについての想い出は限りなく、また、比較的親父さんの身近にいることの多かった私には、あの

懐しい姿の印象は、私の心に深く刻まれております。

眼を閉じれば、元気でおられたころの姿が、工場の真中の現場事務所や、古い椅子や、作業帽や、愛犬や、また、幅広のズボン等々が、現実のように想い浮かび、思わず、図面片手に「親父さん……」と相談を寄せたい想いかられます。

せんないことではありながら、もう一度「なあわれ……」と話しかけてもらえたら、メガホンで菅原さんと呼ぶ声が聞けたらと思わずにはおれません。三回忌にあたり、親父さんの胸像の建立が計画されました。再びあの温顔に接することのできるのはいへん嬉しく、日々想いを新たに、仕事への励みが得られるものと信じます。

最初お逢いした時、なんとお呼びしたらよいかを尋ねたところ、「俺は鍛冶屋の親父だ、皆もそう呼ぶし、親父さんでいいから」とのことでした。若いころ苦労し、大をなした方でありがちなの一徹な固さや、尊大を感じさせない、少しもえらぶったところのない、気さくな感じで、まことに心やすい印象でした。

この印象は、全く親父さんの実体であって、その後もずっと変わることがありませんでした。このことは、現場の人々を初め、工場、会社を形成する一切の人たち、工場にこられるすべての人々との間に、何の垣根もつくることなく、本心を割った話や行動を、通じさせる基で

あつたかと思ひます。今の社風を形づくる、格式張らず、お互いをすなおに認めあう氣風、そしてまた、和を以て人々の心を連ねているわが羽生田鉄工所の空氣——自由の精神とも申してよいものの根源は、実にわが親父さんにあつたと、私は思ひます。この空氣があればこそ、工場のだれしもが、もてる力をはばかることなく、存分に奮い、新しい創意や工夫を、随時もち寄つて、少ない人材、乏しい物にもかかわらず、今日をなすに至つた力を形成したのだといひましょう。

私が知つてからの親父さんは、特に趣味とか道楽という類のものをもたず、仕事一途であつて、ちょっと目には多面的なところのない感じに見えもしました。しかし實際はどうしてそうでなく、前記のような印象はほんの一面に過ぎず、それらのことは矛盾するとさえ見える、仕事への激しさや、強固な意志や、精神の集中を見せることも、しばしばでした。

私はクラッチドアの仕事に関して親父さんと接する機会が多かつたのですが、この対外的にも対内的にも問題の多かつた仕事に対してみせた親父さんの洞察と情熱は、まことに息の長いねばり強さとなつて、これを今日まで、發展的に存続せしめるに至りました。

クラッチドアは今日では、ようやくその有用性が広く業界に認識され、今後ますますその需要は増大するものと思われませんが、十数年前に、いち早くその将来を見越して、実用化を計

り、これを内外に広く知らしめ、あらゆる障害を排して今日の基礎を築いた功績は、今日、また将来のクラッチドアの重要性を考えるにつけ、いまさらながら偉大であると感ぜずにはおられません。これは親父さんの執念、根性の勝利であると、言えるかと思えます。

親父さんの将来を見抜く洞察の深さ、確かさは、万人の認めるところであります。古くは東京への進出、現在地への選地等、また、このクラッチドアもそうですが、羽生田の三本の柱の一つとされている、プレス加工の業務だけを見ても、それがうなずけます。私も直接教えられたことがあります、仕事は自分の打つ手に対し、相手あるいは物が、どのような反応をするかを考え、さらにそれに対する策を、その時に講じて置かねばならない、ということでした。

つまり、常に一手先の手を用意してかかる心掛けをもって事にのぞむようにしておられたようです。実際、俺がこうやったら先方はどうするだろうかというような質問を時々されたものでした。これはもちろん私などの答を必要とすることではなく、自問自答されておられたことでもあります。私などにはわかって、マネもできないことですが、親父さんはもって生まれた事業家としての素質と、それまでの幾多の修練を経た手腕とから、それを着実に実行され、実績をあげられたのだと思います。

先をみるとともに、そこに打つ手を間断なく、確実に実行に移すということも、親父さんの

すぐれた特質の一つであったように見受けれます。私は工場設備の機械類の設計を一部受け持ちましたが、それを通じ、特にこのことを感じました。

在世中、親父さんから出された私への仕事の指令は次々と間を置かず、応接にいとまがありませんでした。間をおかないどころでなく、しばしば二つ、三つと重なり、時としては前回の分が立消えになる、というようなこともありました。私の非力から、すべてを尽くし得なかったことは、親父さんに対して申しわけなく悔恨の情新たなるものがあります。このような指令の状態は、もちろん私の方のみでなく、計画の推進に必要な面にはすべて同様に行き届いていました。そのため、多少の混乱や、出来た設備等に、前後の脈絡というか、関連を欠く面もありましたが、とにかく、実行がなされ、今日見るような設備が整えられました。出来上がったものを見ての批判は、いろいろありましようが、それらのものが今日まで負荷した実績は大いなるものがあり、見のがし得ないところでありましよう。

親父さんはまた、人情にあつかったことでも、良く知られております。従業員はもとより、関係する人々すべてに対し、求められるまま、その面倒を親身になってみられました。私自身も、家族のこと、一身上のことで、ひとかたならざるところでなく、非常なお世話を受けました。これはわれわれ家族一同として常々感謝にたえないところでありますが、このようなこと

は多くの人にわたっていたようであります。そのため利害相反した人々の間で誤解を生んだやに聞いておりますが、私の見聞する範囲では、全くご自身の善意を以て、その人の身の最善を案じてのみなされておりました。

これに関連して想起されるのは、親父さんはいへんな感激家であり、感動的シーンで目頭を光らせ、時としては独特の感泣をされたことも、今はただ懐しく、時の還らぬのがまことに残念に思えます。また、このことを示す一事として、昭和三十五年の田沢工業のキルン製造据付けの工事が想い浮かびます。

羽生田鉄工所は今日、ロータリーキルンやロータリードライヤ等についても、実績をもつに至っています。これは最初のキルンの発注先である田沢工業の社長さんの男意気に、おやじさんが感じたことに始まります。おやじさんは田沢社長のひとかたでない誠意とやる気、同じ仕事をなさんとするものの心を鋭く感じとり、これに同じ誠意と熱意をもって、こたえたのでした。

田沢社長とおやじさんは、心と心をかみ合わせ、一時の採算にとらわれることなく、誠心誠意ことに当った結果、当初、諸種の困難があり、順調と言えないスタートを切った、その大きな難工事を遂に見事まとめあげ、完成に漕ぎつけるに至ったのでした。

爾來、田沢工業とは深く永いおつき合いを得、共々に繁栄を分かちあっております。更にまたこれに端を発し、それからそれへと、幾つものキルンやドライヤを製造し、実績を重ねて来たのであります。この分野をひらき育てたのは、一に親父さんの仕事への執念でありました。

私の不確実な記憶や、思い違いから、親父さんの本当の姿をゆがめなかったかと心配であります。

親父さんが会社に、また社会に遺した偉大な業績と、私自身への諸種のご親切に深謝し、あわせて親父さんのご冥福を祈って筆をおきます。

心 訓

倉 科 弘

昭和二十一年七月ごろ、まだ私がこの道に弟子入りして、一年を過ぎたころ、一度、会長が、私の働いていたところに訪ねて来られたことを記憶している。その時に、とにかく、本当に親切で温厚な人だなあ、と思ったことが想い出される。

「親爺さん」この一言で本当に生前の、あの活気に満ちあふれた多年のことが走馬燈のように想い浮かんで来る。十数年間を「羽生田鉄工所」すなわち「親爺さん」とともに日々の仕事に「忍耐と努力」を心におき、がんばり従事して来た。また、親爺さんは、その長い年月を嬉しい時、悲しい時も相変わらずの態度で過ごして来られたのだと思う。

特に感動したことは、終始、「職人は一生勉強だ」と言い続けていたことである。この言葉は私も本当に好きだ。

毎日の朝礼の時によく話した「高砂や」の訓話。謡曲の道に弟子入りしてからの、その芸の修得のきびしさの話だ。工場の人たちに、その芸人の気持を理解し納得させるように努力した親爺さんの心中を今静かに察している次第だ。

また、仕事を離れては、衣、食、住の三原則、および、家庭行楽、人間関係等、すべてのことに対して神経を集中し、指導またはめんどろをみてくれた。そのことは、私自身もいろいろの件に面して教えられ、「人間」として生長することに役立った。一生私の脳裏から消え去らぬことのひとつと思う。そして、親爺さんの日ごろ、日常の心の中は理解できていたように思うが、誠の心の中を、ついに体得することができなかったことを残念に思う。また、逆にいって、「一癖」あった親爺さんかもしれぬ……それだけに、なおいっそう、私の脳裏から忘れ去

らぬひとなのであらうと思う。

最後に生前、特に教えさとしていただいた勅語？……を紹介したいと思う。

大黒主義

- 一、今日一日三つの恩を忘れず不足を言わぬ事。
- 一、今日一日腹を立てぬ事。
- 一、今日一日人の悪を言わず己れの善を言わぬ事。
- 一、今日一日の存命を喜び家業を大切に勉むべき事。
- 一、今日一日嘘を言わず無理をせぬ事。

右記の心訓は、われわれの日常生活にとっては大切な意味を表現していることと思う。

親父さん会長

倉 持 栄 作

故会長の三周年にあたり胸像を建立されること、心からお喜び申し上げます。

私が羽生田鉄工所にお世話になるようになったのは、昭和三十一年のころでした。羽生田鉄工所が東京工場を現在所に移されて間もなくのころでした。金井さんの手引きによってでした。そのころ、会長は張り切っておられ、全く六十歳の人とは思えなかった。また、本当に気さくな方で、私のような者にも親身になって何につけてもよく面倒を見てくださいました。

時たま大きな声でどなられたこともありましたが、しかし親父さんは、その時は怒っても、あとは何もなかったようにしておられました。全くよい親父さんであったことをいまさらのように思い出します。

会長が社員の皆から親父さん親父さんと慕われたのも、ほかの人にまさった指導力と、何となく親しめるお方であったからにほかならないと信じます。

私の聞いたところによると、皆の反対を押し切ってプレス工場を新設され、また着々と拡張し、今日のプレス工場を残されたことも、一重に、親父さんに先見の明があったからにほかならないと信じます。一代にしてこれだけの偉業を成しとげられた親父さんは、事業一筋に専念され、実におごること無く質素を旨とされ、全くわれわれの及ばないことであります。しかし私たち社員は、この万分の一、いな百万分の一でも見習えれば、全く幸福な人生を送れること、明らかなことであろうと思います。

朝礼の時、元気な大声で「お早う」と言った声が今でも聞こえるような気がする。全く礼儀正しく質素な方で、社員一同の尊敬できる「親父さん会長」でした。

何事に付けても、お世話のかけどおしでした。ご恩返しもできないうちに逝去なされ、全く残念ではありません。このうちは、親父さんへの恩返しに会長親父さんの築かれた羽生田鉄工所の一員とし、微力ではありますが一生懸命やる覚悟です。そのことこそ、万分の一の恩返しと深く信じております。

☆

銅像が建立され、これからは毎日、社員一同を見守ってくださるかと思うと、本当に気強く感じます。

しかし親父さん会長は生きているのだ。

この銅像を見上げた時「皆元気にやっているか、夫婦は仲よくやれよ」と、健在の時によく言われた言葉を、いまさらのように想い出させられることでしょう。

親父さん、見守っていてください。

現社長の下に、社則にしたがい、しっかり務めて行く所存であります。

終りに会長のご冥福を心からお祈り申し上げます。

いまは亡き会長の追憶を

小池 一貴

尽きせぬ深い哀惜の情をこめて

「人生は死ぬまで勉強である」と、つね日ごろ私たちに教訓し、かつまた死の直前まで自ら実行し、静かに他界された会長の、この言葉を最近しきりに思うようになった。私が追憶の初めに、この言葉をかかげたのは、私の会長に対する深い敬慕の念からであるが、また、故人の幼な友達、友人、知人、並びに従業員一同も、私と同じように敬慕の念をいだいているだろうと思ふからである。

社会の先覚者及び先輩達の教訓を常にまなび研究し、自分の事業に良きことは直ちに取入れ実行するよう、つねに努力をおこたらなかった人であった。

その仕事ぶりは実にすぐく、猛烈であった。見るからにエネルギーが豊富な会長が、仕事の鬼になるのだから、私達はだれでも疲れて、やがてついてゆけなくなる程のものであった。

一生を通して、仕事に対して必死の努力家であったと言える人であると同時に、仕事の終り

のない人であった。

眞実を貫いて一生を静かに終った人とも言える人であった。

幅広い交友関係と、ものやわらかい腰の低いところが、世の人たちに好意を持たれた所以であらう。

私達がぼんやりとして見過してしまふこと、あるいは見て考えてもとうてい理解出来ないことを、見逃さず有意義に事業に取り入れられておられた。そういうことに關しては、会長は抜群の人であった。

日がたつにつれて懐しさが増す人がある。会長は私にとってそういう人である。私だけでなく、会長を知っている多くの人もそうだろうと思う。

私が会長にお目にかかったのは、入社以前の学生のころであった。

みすずかる信濃路の秋は深まり、空は青くすみきり、山には紅葉が見えるようになったころだと思う。

ねずみ色の中折帽に、茶系のダブルの背広のような気がするが、じょうずに着こなした色白のおしゃれな英国風の紳士の姿が、最初の印象であった。

田舎ではこんなすばらしい紳士にはなかなかお目にかかれるものではない。

入社後初めてお目にかかったのはたしか昭和二十五年三月九日の日である。千葉県 の 笹川にある水飴の製造工場であった。黄色の作業服に身をかため、現場工事の陣頭にたたれて、仕事の指揮にあたっておられた。

非常な突貫工事のため、昼夜の区別なく仕事の続行であった。朝は早くから現場にこられ、夜はおそくまで私達と一緒に労苦を共にされ、疲れた時は事務所のソファの上にそのままごろんと横になって休んでおられた。このように仕事に対する熱意が人を動かしたのだろうと思う。

工場長の武田さん、技師の弓削さん、その他従業員の人もその仕事に対する確信と熱意に心をうごかされ敬意をはらっておられたようである。

このように、先ずは仕事と、何事よりも優先させて実行し、つねに仕事を愛し、仕事の中に生きてこられた人であるといえるであろう。

技師の弓削さんは、入社して日の浅い私に、親切に現場の技術を指導して下さいました。いまだにその好意が忘れられない。会長の仕事に対する熱意が、弓削技師をして私にそうさせたのかも知れない。

会長のお住いが市川の菅野にあったころ、よくお伺いしたものだ。閑静で住みごこちのよい

ところであった。度々ご馳走になったものだ。会長はウナギが好物のようであった。

よく「人生は如何に生くべきか」と、自分の豊かな体験談と、古い書物の中の言葉を引用して、夜のふけるのを忘れて、やさしく話をしていただいたものだ。

会長は非常に読書家で、幅広く読んでおられたようである。その頃のことは、具体的に覚えている話はほとんどないが、その時思ったことだが、すばらしく記憶力の良い人だと、ただただ感心することばかりであった。会長にお目にかかって帰るときは、いつでも何か晴れ晴れとして口笛を吹きたいような、いいようなない心持になった。

そのことがまざまざと蘇ってくる。

深川毛利町に東京工場があったころは、よく会長と一緒に風呂に入った。会長は肉づきがよく、色が白く、皮膚が美しかった。背中を流してあげたりしたが、ときどき私も背中を流していただいたものだ。機嫌のよい時などは、風呂の中で、渋い小さな声で得意の浪曲や、私にはわからないような唄を、気持よさそうに口ずさんでおられた。

会長は非常におしゃれすぎであった。いつも身なりをきちんとされ、清潔にされておられた。頭の毛などをのぼし、無精にしておく、床屋にゆけと、しばしば注意されていた人達をよく見かけたものである。服装についても非常に厳しかったようであった。

お元氣な頃の話であるが、酒の席などで興にのると、ときおり若かりし頃の思い出話をしてくれたり、冗談をいってみんなを笑わせておられたが、若い頃は相当もてたらしい。

会長の一生は、事業のために生き、事業をするために生まれてきたような人と私は思う。そのような人であったから、仕事に対しては、非常に厳しい人であった。私は幾度か、その試練にあった。その時は、非常に厳しいと思ったが、今考えてみると当然のことであり、また良い勉強にもなり、教訓にもなった。

その反面、会長は、人情にはもろい性質の面や、淋しがりやの面のあることが感じられた。またいつも周囲に人をおき、にぎやかにふるまっておらないと気がすまないという人のように見うけられた。

信州の田舎に生まれた会長は、貧しい人びとの生活をよく知っておられ、また非常に苦労された方であるから、人に対する思いやりの気持がとて強かった。困ってたよってきた人には種々便宜を与えておられた様子であり、めんどうをよくみておられた。

もう昔のことだが、社長が出張される時など、いかなる忙しい時でも必ず駅に送りにゆき、また帰る時は迎えにいったものだった。

私達が出張する時なども、小学生の子供が遠足にゆく時のように、あれやこれや、身のまわ

りのことや、出先のことを、親がわりのような気持で心配し、気をくばっていたものだ。仕事をして帰って来た人を迎える時、仕事に出てゆく人を送るときの会長の顔は忘れがたい。

私が帝国ホテルのボイラ工場の現場監督をしていた時、わざわざ現場に見え、その労をねぎらい、私の顔についていた黒い煤を、胸にさしていた真白なハンカチでふいてくれた、その気持が忘れられない。その目にしみるようなハンカチの白さが、今でも目にちらついている。

これはほんの一部の話であるが、会長の周囲にいた人たちには、そういうたくさんの思い出があるだろう。そういう人であったから、得意先にいっても、必ずといっていい程すばらしい思い出話に花が咲き、万感胸にせまることがたびたびある。

会長が人生を大切に考え、人間に対して深い愛情があったからだと考えられるのである。

会長は、得意先などに対しては、先ず、いかなることがあっても相手を立てて、自分は耐え忍ぶことが、商売の秘訣であるということを自認し、かつ信念として、必ず実行してこられたようであり、また相手には非常に親切にされた。このようなことが、たくさんの人に、尊敬され、敬慕の念をいだかせたのだろうと思う。

会長の遺稿にあるように、波乱にみちた生涯と、つねに仕事を愛し、仕事の中に生きがい

感じた一生を送られたことを思う時、胸をつかれる思いがする。

私達の周囲にあるものは、すべて会長の魂が感じられる。そして私達の魂に強く呼びかけ続けている。

会長について、過ぎし日のことを思い出せば、書きたいことは、まだたくさんあるが、与えられた紙数はすでに尽きている。

一生を通じ、長野、東京と、両工場の建設を現在のものになしとげ、なお日本のポイラメーカーとして、名実共になしとげたことは、偉大なものである。

また私財を投じて、業界の発展に貢献した功績の偉大さは、勝れた産業功労者として、日本学生会より贈られた「アカデミア賞」でわかるであろう。

これらのかけには、社長、副社長お二人の大きな協力のあったことも忘れてはならないことであろう。

私達の今日あることを考え、会長の私達に残された精神的遺産を基礎に、社長のもとに一致団結し、日常の業務に大いに寄与し、社業の隆盛を期したいと思う。

ちかごろますます会長のことを思うことが多くなった。

「友情は金で買えぬ」

小島友治

私がおやじさんと、はじめて話をしたのは、ある日曜日でした。私がこの会社に入ってから日もあさかったので、会社の中でぶらぶらしていると、おやじさんが犬をつれて家の中から出て来て、「おい」と私を呼ぶので、私はびっくりしましたが、おやじさんの所へ行ってみました。すると、「おい、わるいがタバコ買って来てくれ」と五百円よこしたので、何のタバコかと聞くと「朝日」だと言われました。私はすぐに買って来てタバコを十個と釣銭をさしだしたところ、おやじさんはタバコだけ取って、「映画でも見て来い」と、二百円を私にくれました。これが私の一番はじめの思い出かな。

それから、私の友達が胃がいたくてたおれた時、おやじさんが来て友達のを飲んでやってくれた事もありました。その時におやじさんが言った言葉を私はまだおぼえています。「友情は金では買えないのだから、しっかりかんびょうしてやれ」と言われた事を思い出すと、私は

今でもいいことをおやじさんは教えてくれたと思っ
て感謝いたします。

それから、私が会社に入ったころは朝はいつも、みんなあつま
って、おやじさんが話をしていました。その時は、いつも諺を引
かれましたが、いろいろのいい話をしてくれたことをおぼ
えています。

大雷は親心

小林 祐一

私が故会長に最初お会いしたのは戦時中、本社工場に東京より
帰られた会長が、朝礼に全従業員を集めて当時の戦況と今後の
われわれのあり方、心構えなどについてのお話をされた時の
ことと記憶しています。その時の第一印象を思い起こすに、と
ても恰幅の良い話上手な方だったことを覚えています。

その頃会社ではボイラと、手榴弾の機械加工、そして綿内村に
刀剣会社を作り、昭和新刀なる刀を作る軍需工場として、い
ささかお国のために寄与し、また諏訪、長野両出張所では日本

無線の工事をしていました。会長は長野、東京、松本、諏訪、また南信、北信、東京と、休む間もなく廻られ、とても馬力のある人でした。終戦間近な頃、陸軍の兵隊が来て松代に大本営を作る工事をしていました。その大本営の鉄扉を作るのを毎日手伝っていたこともありました。その頃、長野へ最初で最後の空襲があり、須坂でも空襲警報が出され、われわれは急ぎ防空壕（コルニッシュボイラの中釜を土の中に埋めた）の中に入ったところ、たまたま会長と一緒にになり、私はまだ若いのと、空襲のこわさをしらないので、飛行機見たさの好奇心に壕から出入りをして大目玉をくいました。

そして終戦後は社長の職を退き、会長に就任され、弱電ダイヤルの工場を子会社に持ち、その他、信濃蚕糸、アルプスゴムの大株主として工事その他をなし、進駐軍が長野鐘紡を接收すると素早くその煖房工事業所として工事をし、丸進ボイラの製作には東京の技術者を招き指導を受ける等、着々と業績を挙げるよう不眠の努力をなされた事を思い起こし改めて想うこと多々あります。

私はその頃長野営業所と本社をいききしていましたが、東京より支店に来るよう上司からの話があり、あの会長のいるところで働けたらと思っておりましたので喜んでお受けし上京致しました。日本橋の支店へ来て十二年の間は毎日工事現場へ自転車やリヤカーでボイラの部品そ

の他を運搬することがおもな仕事でした。遠くは埼玉県の草加までリヤカーを引いて行くこともありました。そしてやっとダットサンの中古車を買っていただき、会長と車で東京中のボイラ店を廻り、いろいろと商売について教わりました。毎朝本八幡の会長宅まで迎えに行き、夜仕事を終えてからお送りするといったことが毛利町の工場が出来るまで続きました。その頃が私にとって一番辛く、そしてまた、今思い出すと一番会長と一緒にいて教わる事が多く楽しいことも多かった時だったのだと思います。

会長は人を信用するとなんでもその人に仕事をまかせ、何かと親身になってめんどうをみてくれました。私も大変よくめんどうをみてもらった一人ですが、時々は大雷も落とされました。しかしそれが会長の、その人に対するほんとうの親心であったと今は本当に有難いことと思っています。

お亡くなりになるまで仕事を思い、会社のことを気にかけていらした会長、われわれに残してくれた幾多の教訓を私はしっかりと胸にきざみ込んで、これからもあゆんでいきたいと思っております。

故会長の三回忌と胸像建立にあたり、つたない追憶文ではありますが、ここに文集の一部を汚させていただきました。

はげましの言葉

駒場 忠雄

私が入社したのが三十一年の六月、その時がおやじさんとの初対面でした。田舎から出て来たばかりで西も東もわからない私に、いろいろと気をつかってくださった、その当時のことが種々思い出されます。

入社して二、三年したある日のことでした。その日私は、赤い靴下をはいて作業していました。するとおやじさんが私のそばに来て、自分のはいていた靴下をぬいでよこし、私のはいていた赤の靴下が気になったのか、もって行きましたっけ……。

またこんなこともありました。ご承知のように、今私がこうして、子供を二人かかえて暮らしておりますのも、あの病いとの戦いの時に、おやじさんもお身体の方が大変でしたのに一緒にあそか病院に行ってくれて、入院手続やら名医を紹介してくれるやら、いろいろと心配してくださったおかげです。

会長もまもなく入院されました。一緒に入院してましたその時にいただいたはげましの言葉が、いまだに耳の底に残っていてわすれられません。

今でも、「おい身体の調子はどんな具合だ」と、どこからか声がするようない気がしてなりません。

まだまだ丈夫でいてくださったらなああと、悔やまれてしようがありません。

身近に感じられた方

阪 本 千 行

ちょっと用があるから現場事務所へこいといわれ、おやじさんのところへ行きましたら、明日からプレスをやれとのこと、おやじさんのご希望通りにする決心をして種々お話を聞ききました。

おやじさんは一つおまえに話しておこうと言われ、

「ほんとうのことを、はっきり言うな」

このように注意してくれました。このお言葉は考え方によっていろいろと解釈できましようが、私の場合にはやさしい言葉の使い方方をせよと注意して下さったのだと考えております。ご在世なれば詳しく御教え願うことができませんが、今、おやじさんにお聞きできないのがなによりも残念でなりません。

私の住家が悪くて生活できるような家ではなく、隣近所は地揚げして私の所は一段と低くなり、雨が降れば水はたまるし、どうしようもなかった。建築しようと思っっている金策したが、あと十五万円くらい不足で困り、申しわけないと思いつながらもおやじさんをお願いしたところ、気持良く貸してくださいました。

その時おやじさんは、(土地が少ないので)二階にしてはと言われました。今は子供も小さいが、大きくなるとせまくなると教えてくださいましたが、私としては借金がかさむので平家にしました。今は子供たちも大きくなって、ほんとうにせまく、おやじさんの言われた通りになりました。

親子楽しい生活ができるのもおやじさんのおかげです。ご在世中何のご恩返しもできず、今日になって残念でなりません。子供たちもおやじさんを良く知っております。工場内でも、家庭的にも、身近に感じられたお方でした。

故会長に

桜 沢 三 千 男

六月なかばに、家に帰りました。家族とのよもやま話の中に、故会長の銅像建立と追憶集を出すということも出ました。母はしきりと会長に一度しか会えなかったことをくやみ、三回忌の行事のつつがなく終わることを願っておりました。そして何か書きたいと言っておりました。

帰京後、編集を担当している人に話したところ、よいだろうとのこと。さっそく、母にその旨を伝えました。

折返し、母から便りがあり、次の文章が同封されて来ました。

私の思いも母と同じです。私も会長の教えを胸に刻むとともに、母へもつくしたいと思いません。

母とともに、深く会長の靈にぬかずきます。

この母の感謝の思いを

桜 沢 恒 代

中卒の、そして世の中というものを知らない息子を、まがりなりにも一人の社会人として育ててくださった会長さんは、ぜひ、今一度来てくださいとおっしゃってくださいましたが、人のお世話はかなさか、運命の冷たさか、今では私たちと幽明境を異にしてしまいました。

私は、いま眼も悪く、頭もにぶく、何を書いてよいかわからないのですが、一筆書いて、この私の感謝の気持を亡き会長様に捧げたいと思います。昔から親子は一世、夫婦は二世、主従は三世とか申します。私のこの考えは昭和の現代ッ子には通じないかもしれませんが、でも私はいつもそのように思っています。

世間というもの、人生行路の荒波がいかなるものであるやも知らず就職した息子、この母は毎日二本の線路をみては、今日は息子はどうしているか、明日は無事に勤められるかしらと案じ暮らして三年、私は息子の会社へ行くことができまして、三日間もお世話になり、また会長

様はじめ上司の方々にもお目にかかって、今まで私が心にかけていた不安というか、きぐの念はカラッと晴れてしまいました。そしてお目にかかって承ったお話の数々、今でもなお忘れることは私も息子もできません。

会長様、あなたのご厚情の教訓があればこそ、あの子が一生涯の財産を、その身につけさせていただいたわけです。古いといわれるかもしれないませんが、親孝行もしてくれ、時々は老いた私たちをホロッとさせます。思えばあれもこれも、私たち親にできなかったしつけをしていたからだと思います。それを思っても、二度とお目にかかる機会がありませんでしたのが残念でなりません。

悲しい訃報を息子から聞いた時は、私は何か大きな声を立て思い切り泣きたいくらいでした。ご厚情で溶接の証書をいただいた時も、私は赤飯を二つそなえて遠くから祝ったのに、今度は庭に咲いてる紫と白の花をそなえて、ご教訓を偲びつつ、ご冥福を祈る日がこんなにも近く来ようとは、人の世のはかなさがしみじみ感じられ、寂しい気持でした。けれど現身はこの地上になくとも、み魂は羽生田鉄工所の上にあり、いつも目に見えずとも、声にならずとも、あのありし日のように従業員の皆様に、そして私の息子に、いつも温情こもるご教訓と励ましのお声をかけてくださっていることとぞんじます。

前に書きましたように、今後は三世のえにしの綱を強くたくましくにぎって生きて、否、生かして生きていたきたい。ただただ私の願いはそう思うだけです。何のご返礼も出来ないうちに千万億土とやらの遠くにへだたってしまった会長様に、今はただ、安らかなれと、ご冥福をお祈り申し上げ、やがてアジアに、そして広く世界にまでも躍進前進する羽生田鉄工所の前途を祝して私の感謝の一端といたします。

(昭和四十三年六月二十八日記)

(註) 桜沢君のご母堂の文章は、桜沢君のお母様の故人への追慕の念を文章にしたいとの御意向を承り、他の方の御家族のお気持をも伝えるものと、編集担当の者の一存にてお願いしました。

(編集部)

バイタリティー

佐々木 寛

私が会社にはいって、一カ月半くらいたったころ、会長は急に病気が悪化して、危篤状態になった。救急車が呼ばれ、あそか病院に入院しました。そのときはじめて会長にお目に掛かっ

たわけですが、その後約半分くらいは病院にはいりつきりなのにもかかわらず、なかなか元気なようす、会長の生命力の強さに感心させられました。そういうことなので、会長のプライベート的なことはよくわかりませんので、皆が話している会長の人物像を、私なりに主観的に考えて綴ってみようと思います。

第一に、若くして糖尿病という不治の病を身体に背負いながらも、非常にバイタリティーがあったといっても過言ではないと思う。性情的なものもあると思いますが、学校を卒業してから家業を手伝って、そこで得たものを基にして幾つもの会社へ武者修業をしたのが後々のために役立ったのだらうと思います。

もっともその間、苦学苦修もあつたらうと思います。それが羽生田鉄工所発展の第一歩になったのだと思います。今ではボイラといえれば羽生田というキャッチフレーズが出るほどです。それもそんなところから生まれたのではないかと思えます。

第二にクラッチドアおよびプレス加工に対してはつきりしたビジョンを持っていたので、今では業界においてなくてはならない存在になったのだらうと思います。福沢諭吉がいった「世の中で一番楽しく立派な事は一生涯貫く仕事を持つ事です」という言葉は、会長にピッタリだと思えます。

会長の霊に、そして……

佐々木義夫

手紙を書くことさえ嫌いな私に追憶文を書いてほしいとの事、私に何が書けるでしょう。日頃会長と親しくお話をした経験のない私には、尚更の事書けるわけがありません。

僕達従業員にとっては、「会長は恐い」という先入観が強かったのでしょうか。それが、病人で気が小さくなったせいでしょうか、療養中の会長は気味が悪いほど優しくなり、元氣な頃とは変わってあわれささえ感じる事がありました。ゲートルを巻き現場を廻っていた会長の姿とは縁遠い、まるで別人のような感じさえ受けたものです。

「惜しい人を亡くした」とよくいますが、会長も惜しまれる人物であったはずですが。東京工場の創設を初めとして、溶接協会支部長、溶接学校校長、そしてほかにも理事長職を二つも兼ねたりなされたようですし、あらゆる部門において残した業績は、大きく輝かしいものものではなかったでしょうか。アカデミア賞の受賞も業績に対する当然な報酬だったはずですが。

私達従業員は会長を恐いと思う反面、尊敬もし誇りにも思っていたものです。ボイラもいまでは名も知られ、プレスにおいては大企業との取引が多く、安定した仕事が続いているようです。これも会長がいちはやくプレスの製造設置に着手したお蔭ではないでしょうか。今になって考えますと、会長は当時から今日の忙しさを予測していたようにも思われます。ただ一つ予測しえなかったのは、古材を買って来て建てた、仕事のやりにくいプレスの建屋かも知れません。会長の意志を生かし業績をさらに上げるためにも、私達はお互いに働きやすい職場を築き、信頼しあえる人間関係を作り出すよう努力しなければなりません。 「実るほど頭のさがる稲穂かな」晩年の会長は朝礼の時よくこの諺を私達に話してくれました。会長の教えを理解して、限りのない仕事に、技術に、そして未来に向かって勉強する事により、会長の霊を慰さめる事が出来るでしょう。

私には会長がお亡くなりになった事を、他人の死とだけでは済まされたい私情があります。会長がお亡くなりになってから二十九日目に、私の妹も世を去りました。近い月日の間に身近な二人を失ったのです。私は会長を思い出す限り妹を思い、妹のことを思い出す限り、又、会長のことを忘れることは出来ないのです。会長の霊の安かれと祈ると共に、妹の霊にも語りかけることを許してほしいと思います。

「家庭を大事に」と

三 宮 栄

僕が入社したころは事務所は古い建物で、事務所の前には花壇が有り、その中央には銅像が立っており、食堂も古い建物で雨が降ると水が溜ったり雨漏りする始末でした。

その頃会長はあそか病院に入院していました。入社一週間後に菅原さんに連れられて、病院にあいさつに行きましたが、頑固そうでワンマンな感じを受けました。

そののち退院して製缶工場前での朝礼に杖を突きながら、あいさつに出てこられました。

僕が一番印象に残ったその時の話は、一家の主人として、家庭また奥さんや子供を大事にしなさい、もし家庭に嫌な事が有ったり、また夫婦喧嘩のような事があると、会社に送り出した奥さんも一日不愉快な思いをするし、会社に行った夫も仕事の能率が落ち、怪我の恐れもある。一家和やかな毎日を暮らすようと、日常生活のアドバイスなどもしてくれました。

一目見たときガンコそうな会長だったのに、意外だなあと思いました。

おやじさんと共に

菅原 与左衛門

昭和十四年頃、当時城東区大島町二丁目の藤井鉄工で、はじめて会長のお顔を見た。会長はその時、二、三人で仕事場を見学に来た。僕は得意のコーキングやハツリの仕事で夢中だった。その中の一人が、にこやかに僕に話し掛けて来た。「御苦労様」と笑いながら、冗談まじりに、「君はよく働くから金が儲かるだろう」と、いった。

仕事熱心で研究心のあるらしいその人は、いろいろと話しながら仕事をよくみて帰って行った。

あとで話を聞いてみると、羽生田鉄工所の社長さんだとわかった。われわれ工員に親しく、また楽しく、お話をして下さった事は、心からうれしかった。

支那事変がますます激しくなって、毎日のように出征兵士の見送りで、いよいよ人手が不足になって来た。

僕は個人で、各工場の仕事をもらっていた。ある日、深川毛利町、丸鉄工所での仕事の帰りに、会社の門前で車に乗った人が僕をよく見るので、僕は頭を下げた。きっとボイラーでも注文した帰りのお客さまかと思った。

「君はどちらまでお帰りかね」と聞かれたので、「城東区大島町までです」と言うと、「それなら私の車に乗って行かないか、私は砂町の中村鉄工所に行くところだから」と親切に言われたので、僕は遠慮なく車に乗せてもらった。

車の中で名刺をもらった。「もし手があいたら夜でも私の店（日本橋の浪花町）に遊びに来るように」と言ってくれた。

僕は社長の体のどこからともなくにじんでくる温かさと人情に強く打たれた。自ら他人に手を差し延べて車などに乗せてくれる人は少ない。上に立つ人ほど、下のものに知らん顔をしているものだ。

大東亜戦争が始まり、個人の仕事は出来なくなった。昭和十七年から東京の空にも敵機が飛んで来るようになり、人々は田舎に疎開していった。

その頃、私は元の丸善鉄工所の工場長の渋谷新吉さんに、「長野県の羽生田鉄工所へ行ってくれないか」と頼まれ、これが縁となり今日に至ったのである。

僕はやりかけの仕事を全部片付けて、いつぞやもらった名刺をたよりに、空襲警報の真下を半日ばかりでようやく夕方浪花町の事務所を訪ねることができた。

人気がなく、社長さんが奥の机で何か書きものをしていた。

「よく来てくれた」とよろこんでお茶を入れてもらい、ここまで来た甲斐があったと僕もうれしかった。

「菅原です。よろしくお願いします」と言うと、「君はなかなか良く働く人だが、酒はやるかね」と聞かれたので、僕は頭をかきながら「仕事より好きだ」と言ってしまうと、社長さんは急にきびしい顔になり、「良くない」と注意してくれた。

渋谷工場長から頼まれて来た事情をよく話すと、「あ、そうだったのか、不思議な縁だ。それなら一日も早く長野へ行ってやってくれ。この非常時を乗り切るためにお互いに頑張ろう。国のためだ」と、力強く肩を叩き、帰りぎわに当時手に入らない本ものの酒をコップ一杯ご馳走になり、元気に別れた。それから二、三日後東京を発った。

長野駅から電車に乗り換え、須坂駅から二、三分で会社に着いた。門には大きな字で、「株式会社羽生田鉄工所」と書いてあった。こんな山の中にこれほど立派な会社があるとは思わなかった。面食らってしまったが、なるほど社長にふさわしい会社だなと思った。事務所な

員は約四、五十人くらい、現場工員百数十人ほど、そのほか、下請が十五、六人もいたので、僕はまたおどろいてしまった。

翌日から、日の丸の旗を揚げて朝礼をし、必勝を祈り、仕事についた。機械と技術は進んでいた。

また昔風の立派な居宅の方には社長夫人がおられ、きびしさの中にも優しさのある良い人であった。この奥さんにしてこの社長ありと、僕はしみじみと思った。

現副社長都子様は、事務所の事務長として活躍していた。事務長さんは、自分から出て来て「東京の職人さんお願いしますよ」と挨拶された。僕は何も知らなかったので、頭を下げたきりだった。二、三日して他の工員さんから都子さんは会社の王様と聞いた。

また現社長はその頃長野工業学校を卒業し、国立山梨工業専門学校に在学中、妹さんは女学校を卒業したばかりの美しいお嬢さんで、現場監督や設計事務となんでも張り切って働いていた。若い人達の憧れの的であった。今の池田耕作氏夫人、美智子様である。

二、三日経つと社長が東京から帰って、朝礼のあと、今度座間航空隊のポイラ、ランカシャ五台、径七尺、長さ三十尺の、大型の注文があり、それも、大至急に納めよということであった。今でも大変な仕事である。昔はリベットだから尚更大変だ。みんな、国のためと、朝は七

時より、夜は九時過ぎまで、必死に働いた。ある時は、社長も共に徹夜をして納期に間に合わせる事ができた。間もなく軍より皇国第四〇八号指定工場と指命された。益々仕事の量は増すばかりだった。

その頃現社長は学徒動員で、多摩陸軍技術研究所に勤務されることに決まった。更に昭和十九年十月には、山梨工業専門学校を卒業、同年十月岐阜陸軍航空整備学校入校の知らせに社員一同心から武運をお祈りした。戦争は一層烈しくなり、会社の人達も次々と出征して行った。

昭和二十年二月、現社長は同航空学校を卒業して陸軍技術少尉に任官され、故郷に帰ってきた。社長初め社員一同喜んだ。若くて美しい陸軍少尉であった。胸には飛行機の徽章、肩には金筋に金の星、腰には長い軍刀を下げて、実に立派な軍人さんであった。また堂々と挨拶をされた。その時には、社長も涙をこぼして喜んだ。それから多摩陸軍技術研究所勤務になり、休暇には時々帰省され、良いお話をしてくれた。

戦時中は、ラジオはかけ放しであった。夜中に、「菅原々々」と呼ぶ声に目をさまし、良く耳を立てて聞くと、社長の声である。空襲警報が発令になったと知らせてくれた。「はい、わかりました」僕は答えて身仕度をした。いよいよ長野にも敵機が来たと気が張った。しかし、この夜は無事に済んだ。それからの社長は夜も寝ないで我々の事を心配してくれ、僕はほんと

に有難いと思つた。

あくる朝、二、三人の工員が小さい声で「日本は危い」と話していた。

社長が仕事場に見えて「みんなで頑張るんだ。なんとか勝ち抜くまでは」と、力いっぱいあげましてくれた。

社長は強い愛国心の持主である。その当時、月、火、水、木、金、と、いって日曜日を返上して働いた。盆、正月も、休みはほとんど無かった。間もなく二十年八月十五日、朝いつもより朝礼が早かった。「なんだろう、いつもより早いではないか」と、首をかしげる工員もいた。国旗掲揚の後、「今日の昼、重大ニュースの発表があります。みな事務所に集まって聞いて下さい」と厳肅にいわれた。それも天皇陛下から直接のお言葉とか。十二時近くなった。みな早く行くとうと、さそいあっていたが、僕は腹がすいていたので、先に食堂に行った。若い工員が「社長さんがお呼びですよ」と迎えに来た。僕はめしを食べかけのまま行くと、皆集まっていた。

「菅原は耳が遠いから前の方に来給え」と言われたので、僕は社長のそばで聞いた。

ニュースが終わった。社長はうめくような声で「ウー、そうか」

「皆さん、御苦労さんでした。今日までよく頑張ってくれ、ありがとうございました」と、流れ出る涙をじっとこらえるように、僕らが事務所を出るまで、頭を上げなかった。

戦争は終わった。それも敗戦というみじめな結末である。道具も片付けず、ふらふらと家に帰ったものもいた。また考えこんでしまったものもいた。それは言葉ではいいようのない有様であった。工場は臨時休暇となった。二、三日後、大変なデマが飛んで来た。

外国兵士がたくさん上陸し、赤、白、黒人兵士が長野にもたくさん来るといふ、何がなんだかわからない話であった。僕は社長に会って別れを告げ、涙ながらに岩手の家に引き揚げた。

その後三年余り過ぎた頃、長野から手紙が来た。差出人は佐藤理助さんの名前で、仕事があるから帰ってくるよう、社長さんも相変わらず元気で張り切っているからとのことで、僕は青森造船所のやりかけの仕事を済ませ、直ちに懐しい工場へ帰った。

工場は平和産業の開発のため立派に立ち直っていた。

社長はニコニコ顔で、「菅原君、元気でいたか、良く来てくれた。あちらで一寸話でもしよう」と言われ、住居の方に伺った。

かあさんも、お元気で、ここから僕を迎えて下さった。

「わしも社長をやめ、伴が社長になり、嫁を迎えた」とのお話。「今は若夫婦は東京の営業所に住居している。仲良く張り切って働いている」との事。それもお嫁さんは同業者の安藤鉄工所のお嬢さんで、素晴らしい美人だと、大喜びで話してくれた。

かあさんは、「菅原はお酒が好きだから、今晚帰ったお祝いに、一杯上げますよ」と言ってくれた。昔酒でよくへまをして、かあさんには面倒をかけて、家の者のようにかばってもらったことがあるので、僕は頭を下げて礼を言った。「菅原君、今のところ沢山仕事もあり、安心だが、納期が大分おくられているから頑張らなくて欲しい。頼むよ」と言われた。もとより僕は家に帰ったようで、元氣よく仕事についた。

その後襲った戦後の不況に仕事も減り、各会社でストライキが起き、新しいところから倒産し始めた。工場でも終戦後引き揚げた大勢の人達の考えの相違から大騒動となり、一年近い日時を要したがなんとか無事納まった。

そのため会長の苦労は一通りでなかったようだ。会長は「赤字が大きい時程、一心に働かねば赤字の穴は埋める事が出来ぬ。仕事もせず理屈を言って遊んでばかりいたのでは自滅するより仕方ない。文句は後にして自分や家族達のためと思つて働いてくれ」「稼ぐに追いつく貧乏なし」と、処世の訓をいろいろと話してくれたが、僕は時代の波の恐ろしさを知った。

その内に朝鮮動乱がはじまり、仕事もようやく忙しくなってきた。

僕は会長の命令で東京の毛利町の工場に行った。現在の田中さんが先頭で、高野、水田兄弟、吉越君など、腕ききの人ばかりで工場をかためていた。

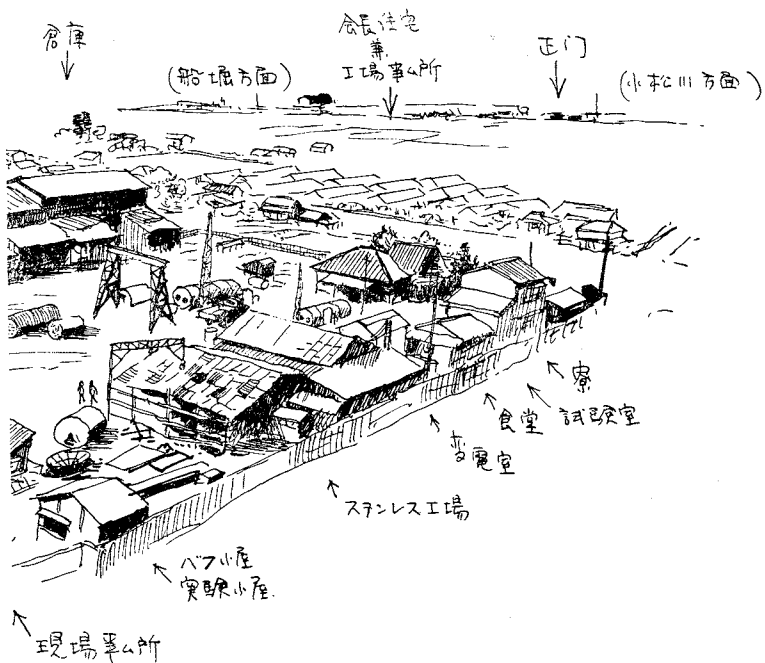
会長が「東京も段々に大きくするから、君はこれから東京工場に根を下ろして工場の礎となってくれ」と言われた時、僕は事業家として会長はまだ大きく伸びてゆくに違いないとうれしかった。

仕事が増えるたび工場が狭くなって、「菅原、どこかうまい工場をさがしてくれ、君は知合いもあることだから……」と頼まれ、さがし歩いた末、上田鉄工所の工場の一部を借りて手分けでやったり、現在の赤坂組の親父さんのいた深川の佐藤鉄工所なども一時借りて、仕事を間に合わせねばならなかった。

その半年くらい後の十二月の押し迫った頃、会長が大きな眼を光らせ、「ようやくわしの気に入った大工場が見つかった。正月はわしと一緒にその工場でしょう」といわれ、仕事はいったん年末で切り上げ、仲間達は田舎へ帰り、僕は日本橋の若社長の家で新年を迎えた。

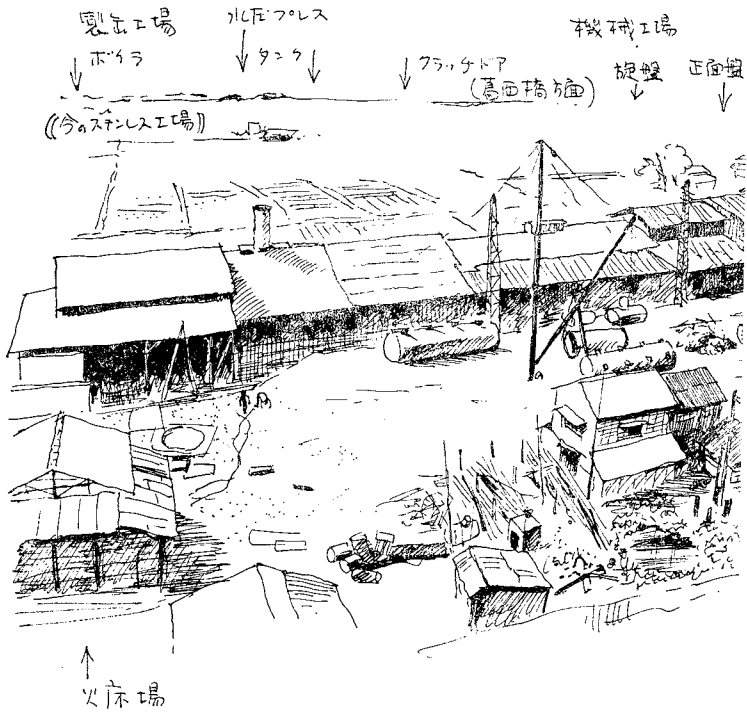
元旦の朝お祝いのご馳走を頂いていると、会長から電話がかかり、「迎えをやるからすぐに来い」という相変わらずの忙しい話だった。

旧葛西橋はせまい木造の橋で、商店も二、三軒くらいしかなく、工場の門前は川が流れ、地元の海苔作りの小船が何艘も浮かんでいて、往来する人もまれな淋しいところで、工場には、千坪余りの池もあれば、周囲にはよしがぼうぼうと生い茂っていて、枯草の中には小鳥たちが



北沢洋一・画

追憶 第二部



昭和32年ごろの羽生田鉄工所東京工場のスケッチ

遊んでいた。

呆然としている僕に会長は、「どうだ、いい工場だろう」と満足そうな顔でいわれたので、「はい、大部広いからいいです」と、とんちんかんな返事をしてしまった。

正月がすむと直ぐに機械の引越しが始まった。今のようにトラックもない時で、ガタガタの三輪車で寒い風の吹きさらす中を全員心を合わせてようやく恰好がついた。

その当時は今と違って、地面が低く沼地のようで、雨が降らなくても長靴を穿いて仕事をした。別に客用として長靴も用意してあった。雨降りの日は工場は休まねばならなかったが、そんな不自由をだれ一人口に出さなかった。

草分けという言葉通り、なんでも最初が苦労だ。その苦労をもともせず、おもう信念巖も徹すと歯を食いしばって苦闘する会長の前に立ちふさがるものはなかった。

工場では毛利会が結成された。また外来としての今田鉄工(現田代組)の協力も大きかった。日本橋の営業陣も張り切って注文を取り、設備資金のやりくりを夜昼なく努力していた。

会長は自ら陣頭に立って世話をやいた。会長の腕は立派で、頭と手と両方をきかせてやるのだから無駄がなかった。大きなボイラの胴板を昔の手巻きロールで巻き、機械の不足を補っていた。

「失敗は成功の基だよ」と仕事の合間に茶を飲みながら、焚火を囲んで会長と話をする時は楽しかった。みんなおやじさんと呼んだ。春になると、ひばりと麦畑の話をして、人を頼るなと教えてくれた。

北海道の国鉄の六十間もの大乾燥機を作ったのも、おやじさんの技術と力があったからだ。その後のことは、ほかの方たちが書いてくれるだろう。余り長くなるのでここいらで中止しよう。

おやじさんはまた義理に厚く、養父の胸像を建てて、それを朝夕仰ぎ、自分で掃除までやってその恩に酬いようとした。

成功する人は心掛けが違うと僕は思った。僕も人生のかなりをおやじさんに任せ、そのことを生甲斐として働いて来た。自分は日本一幸せ者だと思っている。

叱ったり、怒ったり、泣いたり、笑ったり、おやじさんは本当にいい人だった。

過日、おやじさんの墓の前で、僕はおやじさんに言った。

「おやじさん、東京は若社長を初めとしてみんな命がけで人に笑われないように頑張っています。だからこんな山の中に引込んでいないで、たまには東京工場へやってきて、みんなにはっぱをかけてください……」と。

メガホンを手に

高野 旭

私が最初に親父さんに会ったのは羽生田鉄工所へ入社した昭和三十一年三月二十五日でした。

長野県の山奥から東京へ出て来た私に言われた最初の言葉は、「われは何が好きか？」でした。私が「カレーライス」と答えたことは、最初のことなので今でもはっきりとおぼえています。東京といっても、その当時の工場の回りはまだ田圃が多く、寂しい所でしたので、親父さんに「何でも相談に来い」と言われ、安心したものでした。

工場の中を一緒に掃いたり、水をまいたりしていた元氣だったころのことを今もよくおもい浮かべることができません。メガホンを肩からさげて工場内を歩かれていたことなどは、とくに忘れられません。病院へいかれてからは、話をする機会もなく残念でした。

そしてそれから約十年間、いまもいろいろなことを思い出しますと、ちょうど私の子供から大人になる時に親父さんに指導を受け、何も知らなかったのが、しかられたりして、仕事もすこしながらできるようになり、また、会社も十年前とは比べものにならないくらいに発展しました。親父さんの偉大さは、私ばかりでなく大勢の人が目をみはっていることと思います。私たちも先のことをみきわめるようにならなければだめだと思いつくづい思います。親父さんが亡くなった今後も、その教えを守っていききたいと思えます。

会長さんと私

高 村 馨 子

「会長さんと私」いきなりこういう題で書き始めましたけれど、私が会長さんと接した日々は少なかったのです。

でも、会長さんのイメージは深く私の頭の中に残っています。いつもチロ（スピッツの犬）が一緒に、片方だけ色のついたメガネをかけ、ステッキを持ち、濃紺の着物に羽織をはおった

スタイル。ちょうど私のおじいさんを連想させるような親近感を感じさせた会長さん。お茶の時も熱いお茶がおきらいなので、お茶と、コップにお水をそえて出したことを思い出します。

先輩たちの話では、昔はがんで仕事に対してきびしく、いつもどなられどおしだったとか。

十年くらい前の工場は雑草が生いしげり、冬の時期など雨や風が吹くと、とても仕事ができなかったとか。そういう悪いところに工場を作ったということ。でも今は会社の前は立派な道路が走り、その向うに立派な橋があり、工場地帯もだんだん京浜地帯から京葉地帯に発展しつつあるとか。こういうふうになるのを会長さんは見透していらしたのか、運がよかったのか、私にはわかりませんが、両方としても会長さんの偉大さには深く感動させられます。

私が最後に会長さんにお会いしたのは病院にお見舞に行ったときでした。寝たきりのままでしたけれど、とても元気そうで、私たちの顔や名前を覚えていてくれて、近況などを尋ねてくれた時はとてもうれしく思いました。私たちからみれば、会長さんは一人でも、会長さんからみれば大勢の従業員たちのことですのに、忘れないでいてくれたこと……。

この秋の佳日には会長さんの銅像が建つそうで、そうなればなおのこと、私の思い出の中の会長さんはいくらありとよみがえり、消えることはないでしょう。

親爺さんの小言と冷酒

立野 俊雄

故会長の三回忌にあたり、郷里須坂の菩提寺には立派な墓石を建立し、懇ろに法要が営まれることになり、われわれ東京工場の従業員一同も遙かに信州の空を仰ぎ、ひたすら故会長のご冥福をお祈り申し上げる次第です。

故会長の生涯は、いわば前半を郷里において現在の本社並びに工場の基礎を築き上げ、後半から晩年は東京において支店並びに東京工場を建設されとともに、斯業界のために献身的な貢献をされて来たわけで、当地は第二の故郷としてひとしお思い出も深いことと思われます。

われわれもこの二十余年間を肌に触れた指導と教訓を受けて来た故会長に対する追慕の情を、この東京工場内にありし日の思い出としてぜひともそのお姿をお残しして永遠に当工場の安泰と発展を見守っていただきたいと希みました。その全従業員からの切なる要望が入れられ、このたび胸像が建立されることになったのであります。

これを記念して一同が勿忘草としての文章を寄稿し、そのお人柄と業績を讃え、胸像とともに何か精神的なものを後世に残すべく有志の方々のなみなみならぬお力添えを得ましたが、何しろ私自身著述は至って不得手で、ただただ考えるだけでさっぱり筆が取れないまま締切期間がいっぱいになってしまいました。故会長のご性格からしても、美辞麗句を並べるよりも不慣れた素朴な文章のほうがかえって喜んでいただけるものと、恥を忍び、つたない文章を寄稿した次第です。

なお、追憶集といえ、被追憶者のそれぞれの年代にその思い出を記して行くべきなのですが、なかなか正確な年代を思い起こすことができないので、私の脳裏に走馬燈のように次々と浮かんで来るままの思い出を記してまいります。

それと、私にとっては日常親爺さんと呼んでいたせいか、何かそのほうがびったりときて親しみを感じるので、恐縮ながら文中親爺さんと呼ばせてもらいます。

親爺さんの第一印象

私は当社の前東京営業所長佐竹道吉氏とは既知の間柄であった。

終戦翌年のこと、当時、蒲田区下丸子の（株）北辰電機製作所に在籍していたが、文京区に

在った自宅が戦災にあい、「着のみ着のまま」で小岩の知人宅に寄寓していた頃であった。

たまたま出先で同氏に逢い、従来の会社には距離的に、また当時の交通事情からして通勤至難の旨を話したところ、氏の勤めている会社を手伝わぬかということで、当社にご厄介になることになったのだが、当社の東京営業所も戦災にあい、暫定的に親爺さんの友人が持っていた日本橋小伝馬町の大進洋行の貸事務所の一室が事務所であった。その部屋には三つの会社が同居していた。

営業所の社員といえば、所長の佐竹氏と、先輩である現在の田中製造部長と私の三名であった。親爺さんは市川に邸宅を持っておられ、長野の本社と東京とを始終往復していたので、その頃は時折り事務所へ見えるだけと聞いた。

私の入社した時はちょうど本社へ行っておられ、暫くの間お目にかかる機会がなかったのである。

ある日のこと、今日親爺さんが長野から上京されるとの連絡があり、所長が上野駅へ出迎え、一緒に事務所へ来られた。

まだ一面識もない親爺さんに逢うまでは、長野県下で戦時中は皇国第四〇八工場として軍の指定を受け、そのほかに昭和新刀の会社やら、はたまた農機具の会社等、数多くの事業を営ん

でおられたと聞き及び、ごちごちで堅苦しい人ではないだろうかなぞといろいろの臆測をしていた。事務所へ来られてから一応商売上の打合せや報告等が済み、佐竹所長より紹介された私は、氏名、年齢等、口頭で申し上げ、よろしくお願ひしますと挨拶した。

ところが予想に反し、にこやかに「私が羽生田の親爺です。どうぞよろしく」という具合に、頗るさばけていて、そのうえ私如き若輩の者に腰を低く丁寧な挨拶されたので、全く恐縮の至りというか、かえって戸惑ってしまった。

とかく世間では、多くの事業を営まれる社長とか重役連は、そっくりかえって横柄な態度をとるものだ。ましてやこれからご厄介になる事業主からこのような応対を受け、深く考えさせられてしまった。

その日の帰途「稲穂は実るほどに頭を低く」の諺に思いをやり、すべからく人間かくあらねばならぬのだと、自分の過去を反省させられた。

これが私の親爺さんに逢った第一印象であり、それから二十余年間の親爺さんの日常生活が始まったわけであるが、いづどこで誰に逢っても人の気をそらすことなく、尊敬の念を以て接する態度は寸分も変わることはなかった。

全く凡人には出来ないことであると深く感じさせられた。

仕事の鬼

人間はなんのためにこの世に生を享け、何をなすべきか。このことについてはいろいろの見解があり解釈がある。犬猫にしてもこの世に生を享け、一定の使命を持って来ている。犬は賊の侵入を防ぐために番をする。猫は害を及ぼす鼠を捕えることはいうまでもない。

しからば万物の霊長たる人間の使命はなんであろうか。人間の使命は「文化の創造」であり、より住みよい社会を創り出すために各々がそれぞれの立場において、よりよい文化を創り出して行くことにあると私は思っている。

わが社も進歩発展して行くあらゆる産業界の原動力であるボイラを初めとし、圧力缶、化学機械、プレス、フランジングマシン加工等で、各人がそれぞれの職場において産業文化発展のため、ひいては国のため、全人類幸福のため、日々の労働を通じて社会に貢献しているわけであるが、この働くということについて、親爺さんは折りに触れ、いわゆる親爺さん特有の処世哲学的な話をよくしてくれたものだ。

「人間は働くために食うのか、食うために働くのか」食うために働くのだと人はいうが、食うくらいのことでは乞食だって犬猫だって立派にやってのける。人間精いっぱい働けばお天道様と

三度の飯はついてまわるものだ、と。

しかし、ただただ働くだけでは意味がない。やはり一定の目標をたて、その目標に向かったならば、たとえ夜であろうが昼であろうが、はたまた夜中であろうが容赦はしない、万難を排して猪突猛進しなくてはことは成就出来るものではない。要は仕事の鬼と化して事に当たらない、と耳にたこの出来るほどよく言われたものだ。

実際に親爺さんは、事業に対して恐ろしいほどの執念と根性を持っておられた。いふなれば仕事の鬼ともいう人であった。

そして自身、身を以てわれわれに範を示された。おかげで夜となく昼となく、あれこれと無理難題を命ぜられ、随分つらいことも多々あったが、亡き今日になって考えると、そのように鍛えられたことが何物にも替えがたいわれわれの人生勉強であったし、得がたい経験であった、と同時に、この結果がわが社の今日の繁栄をもたらした礎石であったのだろう。

なかなかの風流人

前述のように親爺さんは仕事の上においては誠に厳しい人であった。それゆえに年譜にも記載されているように、業界その他の要職につかれ東奔西走され、時には病氣も顧みず無理をさ

れては医者から随分注意を受けたにもかかわらず、何や彼やと社会のために尽くされた人であった。その反面また、なかなかの風流人であった。

どちらかといえば洪好みで、書画骨董も珍品、逸品を相当持つておられたようである。

そのほか石、植木、庭造り等にも趣味を持っていて、晩年、ハンマーの音を聞きながら余生を送られた工場内の会長宅の庭などは、こじんまりとしたなかなか凝ったものである。だが芯からの経済家で、趣味を生かすにしても、けっして法外に金をかけるようなことはなく、しかも立派なものを造り出すのが得意だった。そして和服が非常にお似合で、休日などには着物に太い絞りの兵児帯を締め伺候しぜんとした姿が今でも目に映るようだ。

また聞くところによれば、若い頃は働くことも人の二倍も三倍も働いた人だったが、道楽にかけてもまた人には引けを取らぬものがあったようだ。まだ元気で第一戦で活躍しておられた頃、お得意を接待する席に私も随分お供をしたものだ。親爺さんは銀座の「銀すず」という割烹店がお気に入りによくそこを利用した。

宴席上で呑むほどに酔うほどに、いろいろの唄や芸を披露しては客を喜ばせたものだ。

親爺さんの十八番である壺坂靈驗記が出る時は頗るご機嫌の時であった。そのほか端唄、小唄、長唄、義太夫、琵琶唄まで出された時は、いささか恐れ入ってしまった。

私の方々にお供をした頃は、親爺さんもまだまだ元気で、その頃六十四、五歳であったろう、その歳にしてあのもて方であったのだから血気さかな頃のことか思い俵ばれる。

親爺さんの弱点

親爺さんの生涯は、文字通り波瀾万丈そのものようであったようだ。ゆえに晩年に自叙伝を編纂すべく体の調子のよい時には過去を振り返っては記述した跡がうかがわれる。しかし、これは未完成で遂に他界されてしまった。その一部を読ませてもらったが、幼少の頃より本当に苦労された人だ。自分自身がそのように辛酸をなめて来ただけに「情」にかけては本当にもろかった。

鬼神も避けるような芯に強い気性のある反面、われわれが考えると、どうしてあのような人に情をかけるのかと思われるような人の面倒をみたりして、そのため随分損をしたこともあった。また将棋の差し手ではないが、われわれと違って世の中のことを三手も五手も先を読む人でありながら、当然負担となり重荷になることがわかっておりながら、人から頼まれると無下に断られない性格であった。

その一例で昔の失敗談を聞いたことがある。ある知人から借金の保証人を頼まれ、断り切れ

ず保証したところ、その後知人が買った商品が暴落し、借金が返せなくなり、保証人までが土地家屋はもとより家財まで差押えられてしまい、ちょうどご祭礼の時のこと、目の前にある簞笥から子供の晴着を出して着せてやることもできず、親としてこんな切ない思いをしたことはなかった。

このように気丈夫の反面「情」にかけてはまことにもろいところがあった。しかしそれがため随分多くの人が助けられ感謝していると思えば、一概に弱点、欠点ともいえないかもしれない。

そこで、私が親爺さんには随分恩になった人があるでしょうねといえ、
「恩は着るものであつて着せるものではない」と平然としていた。

敵を攻めるにも一カ所だけ逃げ道は空けておけ

永い年月の間には、会社関係や個人関係でもいろいろと紛争もあった。なかには最初人情をかけたことがかえて仇になったこともあった。しかし公私共に自ら争いを起したり、訴訟等を提起したことは一度もなかった。

いつも訴訟問題が起きる時は被告となるばかりで、売られた喧嘩は訴訟問題である以上好む

と好まざるとを問わず買わねばならぬし、買った以上何がなんでも勝たねばならぬとの信念を持って戦い続けて来た。正邪善悪は天の裁くところ、いくら科学が進歩した現世でも「正を悪に」「邪を善に」置き替えることはできない。したがって未だかつて敗訴したことは一度もなかった。こと裁判問題以外の事で、明らかに相手方が悪い事件であっても、よく親爺さんはこのように言われた。「相手方をとことんまで追い込んで、一步も後退できぬところまでやるものではない。泥棒にも三分の理ありとの諺もある。最後まで攻め抜いてしまふと、たとえ相手が悪いにせよ後に恨みが残るものだ。必ず逃げ道は一カ所空けておいてやるものだ」と。

なるほどこういうことはすいも甘いも嘗めつくした人でなければわからぬものだ、ただただ感銘している。

人情の機微

人情もかけようで仇になる。なかなかむずかしい世の中である。だが親爺さんは人情の機微をつかむことにたけた人であった。

現職の社員ひとりが、いつであったか、当社入社 of 動機について話してくれたことがあった。その人は何年か前学校を卒業するや直ちに上京し、某所に就職したが、その勤務先が自分に適

しないことを悟り、ある時当社の門をたたいた。ちょうどその日は休日であったのだろう、親爺さんが直接に逢ってくれた。その人は境遇やら将来の希望等をつぶさに話したところ、親爺さんも自身年少にして大志を抱いて上京し、非常に苦勞したことなどの話をして、故郷を後にして来た當時を回顧して、その人の立場を自分の事のように理解し、励ましてくれた。

なお歸りに小遣もいることであろうと、何がしかを手渡されたという。その人はその時ほどうれしかったことはなかった、このような人の下でぜひとも働いてみたいという気持ちになり、入社を決意をしたのだそうである。これは単なる功利や打算ではなく、親爺さんの真心から湧き出た気持が彼を引きつけたものに相違ない。

また、商売上でも、たまたま得意先で同業者がせり合いになり取引が難行した時など、この取引をどうしても成功させなくてはならぬと、草の根を分けてもその有力な関係筋を調べ紹介を得たり、時には単独で先方の社長、重役等にお願いに伺ったり、または「將を射んと欲すれば先ず馬を射よ」のたとえのように、大社長から奥方までにも取り入って取引を有利に導いたという事例は枚挙にいとまがないくらいである。ともかく独特の処世術というか、その熱意と努力で人の心を捕えることについては全く妙を得ていた。

生活はまことに質素

前述のように親爺さんは市川市菅野の閑静なところに立派な邸宅を持っておられた。

当時、東京には日本橋茅場町（現在の社長宅所在地）に営業所があるのみで、受託品の製造は本社工場が担当していたが、次第に受託も増してきたので、遂に親爺さんは東京工場建設に踏み切り、その地を深川毛利町に求めた。やがて親爺さんは東京工場充実のため自ら市川宅を整理して工場内の一隅に居を移し、小池元工事部長や水田職長その他の従業員と起居を共にし、ひたすら工場の充実と会社発展のため、日夜努力されたのである。

その後二カ年たつたため頃、新都市計画が施行され、毛利町一帯が第二種の工業地帯に指定されるや、わが社のような重工業工場は移転するよう要請があり、やっと東京に工場を開設し、ある程度の設備も整備出来たところだったので、さっそく都の公聴会にかけてもらったにもかかわらず、工場残留はついに否決されてしまった。やむなく適当な移転先を諸方詮索し、ようやく現在の工場を入手することが出来た。現在の工場に移転してからも、元の工場主が事務所として使用していた老朽家屋を事務所兼居宅として、日当たりの悪い一室を自分の居所としておられた。その頃より既往の糖尿病と腎臓病のため時折り寝込まれるようになった。

健康上悪いからどこか日当たりのよいところに住宅を建てられてはと再三再四進言したが、工場建設途上にある現在、そんな贅沢なことではできぬといって、頑として聞き入れぬどころかかえってお説教されてしまった。

だれしもきれいな家に住み、おいしいものを食べ、樂が出来るといふことは理想かもしれないが、人それぞれが分に応じた生活をしないでほならない。一度生活程度を上げてしまふとなかなか元の生活に戻せるものでない。極端な例だが、戦時中及び終戦後わが国の津々浦々どこに行っても食糧といい、衣料といい、日用品に至るまで、あらゆる物資が欠乏していた。それでもその欠乏と貧苦に耐え、ともかくも今日まで生き抜いて来たではないか。しかるにその後産業も経済も復興して、すべての物資が豊富に回ってきた昨今、敗戦の重荷を背負っていることも忘れ、だんだんと贅沢になり、消費ブームが続いている。こんな状態から早く目覚めないと日本の国は滅亡してしまうといつて世相を歎いておられた。

ご説ごもつともで、親爺さんの亡くなられた年の秋のこと、貴族の国、紳士の国とうたわれて来たイギリスも、国民が働くことを怠り、栄耀栄華にふけて来たその結果は、国家経済に破綻を来し、遂にポンドの切下げのやむなきに至り全世界の経済に大きな波紋を引き起こしてしまった。親爺さんの予言を身近なところでもさまざまと見せつけられたような感じがした。

そこでわれわれは、親爺さんの教訓のように虚脱状態にある現在の世相から早く目覚め、国家意識と質実剛健の精神をよび起こし頑張らなければならぬ。

暖かい室内で肥料から水まで与えなければ枯れてしまうような温室の草木でなく、踏まれても刈られても次から次へと芽を出すあの野生の草木のように、質素でありながら不滅の生命力をわれわれは持ちたいものである。

親の意見と冷酒

昨今、人の平均寿命は食物の関係か、または精神的のものかはわからないが、だんだんと延びて来ているようである。昔は人生わずか五十年といわれたもの。してみると、私は当社に入社して二十三年になる。昔流にいえばわが人生の半生を当社で送ったことになる。

したがって親爺さんとの思い出も非常に多い。面白かった事、楽しかった事、苦しかった事、怒られた事、等々。だが面白かった事、楽しかった事等はいつしか消え去り、やはり無理難題をいわれ苦しかった事、仕事上で怒られた事がいちばん思い出として浮かんで来る。その当時はなんで親爺さんはこんなに無理難題をいうのだらうか、どうしてこんなに怒るのだらうかと、時には恨みがましく思った事も幾度かあった。

しかし亡き今となって当時の事を回顧してみると、憎くていったのではなく、このせちがら
い世の中に強く生きるための愛の鞭であったのだ。その一つ一つをよく噛み締め、反省して
みるとなかなか意味があり、味があり、よい勉強であったと思う。そして私の人生に益すること
が多々あった。

親爺さんのお小言、ご意見はちょうど冷酒と同じで、あとになってからだんだんときいてく
る。

会 長

田 中 純

昭和三十六年七月入社。

全然知らない仕事とはいえ、毎日つらく、苦しかった。幾度やめようかと考えたことか……。まもなく会長入院。退院後の療養中には現場を見てあるき、または番小屋みたいな所を造りそこからながめている会長は、なんて人使いのあらいい人間かと思った。

その後ある時には講師を呼び、上杉謙信、武田信玄の講談を聞かせたい一心だろう、聞いた人には五十円ずつ出すという風変りな会長。社員を想えばこそその一念だったのだろう。

再び入院。

ある日、会長の枕許によばれ、「しっかり頼む」と言われた。自分も責任感をおぼえて来た。会長の生前を振り返ってみると、仕事にだけ命をかけていたのであると思う。

われわれも故会長に報いるためにもがんばろう。

豊富な機転

田 中 光 男

会長が逝去されてすでに三回忌、このたび、工場の一角に故会長の胸像が建立されることは、全従業員の心のより所としてまことに有意義であります。ふと目を閉じると、訃報を聞いた時の驚き、盛大な社葬の模様、昔の現場工事の折りのこと、毛利工場や小島工場の建設時代、その他いろいろの出来事が昨日のように鮮明に脳裏に残っていて、やさしい内に犯しがた

い威厳のある会長の温顔が彷彿としてまぶたに浮かび、今はただ懐しく、また寂しく、感無量心に迫るものがあります。

「事業は人なり」という言葉がありますが、いまさらのようにこのことが思われます。羽生田鉄工所の浮沈にかかる幾多の難関に直面しながらも、そのつど難関を突破して、しかもそれを転機に飛躍にと結びつけ拡張発展させられました。

創業以来八十有余年、故会長のこの不撓不屈の信念は現社長に継がれ、今や大きく実を結ぼうとしています。このように偉大な発展を成し得る基礎を築かれた故会長の功德を数行で表現することはとても不可能ではありますが、私なりに感じたことの一部を思い出として、発表させていただきます。

慈悲深く人の世話が好きで、職人の家庭の不和の解決や、菓をもつかみたいような困った時に、あれをもって行け、金があるかいつも温情あふれる援助を惜しみませんでした。多くの職人がお世話になり、またよく面倒をみてくれた親父さんとして、はつきりと記憶に残っています。

偉ぶらない温厚な庶民的な人で、職人と一緒に働くことを好み、肌で苦楽をとみにされました。

昭和二十五年千葉県販運笹川工場の現場工事の話ですが、「バラック」小屋に職人と寝食を共にされ、文字通り陣頭指揮されて、終戦後の物資のない困難な時に難工事をみごとに完遂されました。あの時の少しも差別されない、また失敗しても決して怒らない親父さん。入社して間もない私は特に強い感銘を受けると同時に、この人の下にこそ働きたいがあると思ひ一生勤める決心をしました。

また工場で残業がある時は皆が残るまで居残り、必ずご苦労さまと声をかけ、子供は元気か、奥様はどうかと家庭の安否を聞かれました。この言葉が疲れた職人を励まし、人々は明日の働く意欲をかりたてられ、元氣を取り戻して家路についたものです。古参の者は皆このような経験がありました。このような人であったので、時には社長であり、時には会長であつても、常に「親父さん」と呼ばれ、非常に親しまれ、信頼され、かつ尊敬されていきました。工場内で「ボルト」を拾う姿、作業服にゲートル巻の英姿、中央現場事務所でがんばっておられた元氣な親父さん、どれも懐しい思い出です。

仕事に対する情熱、執念とも思われる根性はただただ感服の一語に尽きます。寝ても起きても二十四時間、仕事のことばかり考え、いかによい製品を、経済的に、しかもお客様に喜ばれるかということ苦心研究されておられました。よく食事の時に仕事の段取り、材料取り、職

人の手配、納期等について相談され検討されました。「アスアサウナオイデコフハニ」という電報をもらったのも思い出の一つです。このような仕事に対する熱意、誠意が今日の羽生田の基礎を築き、さらに大きく発展させた原動力となったものと思われまます。

人の指導が非常に上手で、実践から体得した経験で多くの人を適材適所に配して全能力を発揮するよう率先垂範された方で、全く「リーダーシップ」の見本のような人であられた。と同時に、社交が上手で、特に商談では特殊の卓越した才能を示すことがありました。永年の苦勞努力の結果が豊富な機転となり、仕事に対する誠実さがお客様を信頼させたと思います。

こんなエピソードがあります。昭和三十年ごろ、黒板を至急に買って来いといわれ、いささか疑問に思いながら買ってくると、黒板一面に得意先の名前を列記しました。書き終わると同時に数名のお客様が応接間にこられ、商談が成立したことがあります。書かれた得意先の中には遠地の架空の名前も含まれていました。この機転、いや商才は天性とはいえ全く驚嘆のほかありませんでした。

先見の明、これは現工場の敷地購入、溶接工場の認可、クラッチ缶の製造、プレスおよびフランジングマシンによる加工、いずれも親父さんの見通しの良さを立証するもので、いろいろのトラブルがあったものの、現在は三本の基本柱として会社発展の礎となり、独特の工場とし

て業界にも異色の存在となり、今となっては従業員一同が非常に感謝しています。

晩年は自分の若かりしころの理想を実現するために溶接学校の校長として、また溶接事業協同組合の理事長として、後進の若人の育成に情熱を燃やし、奉仕を惜しみませんでした。アカデミア賞の受賞はこのことを如実に物語っています。

最後に、この偉大な遺徳の数々を心の奥深く刻み、人生行路の道標とするとともに、会社をますます発展繁栄させることを堅く誓い、故会長のご冥福を心からお祈り申し上げます。

故会長よ、やすらかに

藤 堂 鯉 作

私が故会長を知ったのは、昭和二十八年二月九日、毛利町工場に雑務係として就職した時のことである。

そのころは、おやじさんは健康すぐれず、週に一度見回りにこられる程度であった。それで私は、家が会長宅の近所にあつたので、その日の仕事の現状を報告する事を頼まれ、毎日、帰

りにはおやじさんの所へ寄ったのであった。そのたび、あれこれきかれるが、うまく返事のできないこともあった。その都度お小言である。「明日工場に行ったら、田中君に電話するよう言え」そして帰りにはコップ一杯の酒が出るが、小言のあとではうまくない。

それがしばらく続き、その年の秋、健康が回復してきたといわれ、俺がいなくては工場はうまく行かぬと、本八幡の家を整理して毛利町へうつることになった。それから朝早くから仕事場に出て工員の指導のかたわら、おやじさんも一緒になって仕事をされた。何分にも当時は人も少なかつた。そのころは新しいボイラはあまり製造しなく、中古品を修理したり、タンク製造が多かつた。

仕事のことにはウルサイおやじであった。朝は早く、夜は残業しないとご機嫌がわるい。おやじさんは何とか新しいボイラを作り出すことに活躍されたが、何分にも工場がせまいのと、近所にあそか病院があるため思うようにいかなかった。やがて思いきって他に場所をさがすことになった。

二十九年十一月現地に話がまとまり、十二月に移転することになった。それで三十年一月から羽生田鉄工所東京工場として営業が始まったのだが、この地はくぼ地、そればかりか雑草深く、工場内建物はくさっており、荒地であった。仕事をするにも長靴ばきの有様、第一に排水

工事から建物の修理と、毎日忙しい日が続いた。その時も、おやじさんは先頭に立ち、整理すること久しく、やっと一段落ついた時はすでに五月となっていた。

仕事の方もだんだんとあるようになった。そこに大仕事が出た。それは青函連絡船用の豆炭乾燥機である。長尺物なので、工場内で出来ず、工場をぶちぬきやつと作ることができた。それがきっかけて次々仕事もあるようになった。そうになると、おやじさんも張り切り、全員午前六時から午後九時十時と働いた。おやじさんはドナリながら指導する。

それからしばらくたったある日のことである。私が出勤し工場の方へ行くと、大工がケタの取りかえ仕事をしてもらった。ボートがちょっと長いから切ってくれと頼まれ、それをノコバンで切っているところへおやじさんが来て、ソナナ仕事をだれに頼まれたコノバカヤローと、わけもキカズに大声でどなられた。ふいのことでも私もあぜんとした。私も反撃に出た。なにこのバカおやじ、孫三人もある者にバカヤローとはなんだといって、家に帰ってしまった。

あとで使いの人が迎えに来た。自分は工場勤めはよすつもりであったが、ともかく一度きて話をするように勧められたので出勤して、おやじさんの所へ行くと、おやじさんはニコニコ顔で出迎え「やあ、昨日はおれのかんちが良かった。悪かった」といわれ、そうなることこちらも言いすぎをわびるほかになく、その場は丸くおさまった。その後は私にはドナラなくなった。

またその反面、親切なおやじさんであった。ある日、私が脚気で休んだ時、それには玄米を食うにかぎると、三徳釜という釜を買って来てくださったことを今も思い出す。

また工員にもいろいろと親切にされた。時には怒り、時にはなだめたり、まことに人を使うのはウマイ人であった。だんだん人も多くなると事務所内では目がとどかなくなる。そこで現場事務所を作り、四方が見えるように硝子戸は全部素透しにした。ゲートル、メガホン、望遠鏡といういでたちで、ドナリながら指導にあたられたこともあった。

そうするうち、月日は一年二年と過ぎ、そのころからおやじさんの持ち前の本性を発揮され、次々と工場を伸ばし、機械を設備した。クラッチの特許には大分苦心されたようである。また、二千トンハイドリックプレスは、多くの反対を押し切って設置した。その他いろいろあるが、ともかく会長のカンはずるどく、することなすことみんな当たるといふ頭のよさ。また仕事の鬼であり、忍耐力が強く、また男性らしい人であった。

思えば会長は、多事多難を克服され、その結果現在の羽生田工場の基礎を磐石になし、年七十四歳にて、仕事に生まれ、仕事に去られた。

その故会長の銅像が建立され、工場にある日も近い。会長をしのび、感謝の意を強くする。地下の会長よ、ますます会社の繁栄をお守りください、また一同に幸せをおあたえください。

人情家

富 沢 和 夫

会長が他界されて、早や一年半もたちますが、まだ会長が、われわれの近くにいるような気がします。

故会長をしのんで思いつくままに書きます。

小生が入社したのは、今から八年前ですから、会長の下で共に働いたのは、五年半くらいでした。いちばん思い出に残っているのは、今でも忘れもしませんが、入社早々、会長との電話応対での事です。

今でこそ、電話応対もどうということはないのですが、その当時、まだ、卒業して田舎から出て来たばかりで、電話に対する知識も浅く、また慣れていなかったもので、大変な失敗をしてしまったのです。次は、その失敗談です。

電話のベルが鳴ったので、受話器を取ったまではよかったですのですが、「もしもし」と言った

ら、いきなり「兄ちゃんかい」と聞こえてきました。よく聞きとれなかったので、「……………」だまっていますと、また「もしもし兄ちゃんかい」と言ってきました。兄ちゃんってだれの事だかわからないので、もたもたしてしまいましたら、「おまえは、だれだ」といわれましたので、「富沢です」と答えました。がそのあとは、もう頭の中が、ガーンとしてしまっただまっているほかありませんでした。社長が、私に替わってくれましたのでほっとしましたが、その電話の主がつまりは会長なのでした。そして、あとでわかったのですが、「兄ちゃん」とは、社長のことだったので。それ以来、しばらくの間、電話恐怖症になってしまい、電話のベルの音はもちろん、タイプライターの「チーン」という音にも、神経が立ってしまったものでした。以上が、いちばん思い出に残っている事です。

故会長の残した業績を、今、ふり返ってみると、まず何といっても、羽生田鉄工所のボイラ、クラッチドア装置、ハイドリックプレスという三本柱を、全国的なものにしたことです。常に新しいアイデアで、人より先へ先へと事業を拡張した事は、会長でなければ出来ないことでしょう。特に、二千トン・プレスをはじめ、十台以上のプレス、またフランジングマシンを設置したことは、プレス部門を大手の会社にひけをとらないものになりました。これも、すべて会長の偉大なる先見の明があったからだと思います。

また、故会長は日本溶接協会東京都東部支部の支部長に就任し、溶接技術専門学校の校長にもなったりして、その他、数々の協会の理事長にもなり、製缶技術の向上にたいへん貢献され本当に自社だけでなく、当地産業界のレベルアップに力を注いだ事は、これまた、会長の人徳の現われでしょう。

また、一方では、社員の情操教育という事にも大いに力を入れて下さいました。そして、時先生を招いて、昔の人、また現在活躍している人が、どのようにして成功したかというような話をわれわれに聞かせてくれました。そういうことは、人生経験の浅いわれわれには、たいへん参考になりました。また考えさせられることが多々ありました。

故会長自身も、時々訓辞をし、常に「会社というものは、自分だけでなく家族の者の協力があつたから、家庭の円満は、会社の繁栄につながるのだから、家庭を大事にするように」といわれました。そして、社員の事はもちろん、家族の事も親身になって相談に乗ってくれました。本当に、人情家でありました。

故会長は、羽生田鉄工所東京工場の基礎をがっちり築きあげてくれたのです。故会長が、これまでしてくれた羽生田鉄工所東京工場を益々発展させ、当社のモットーでもある「世界をめざして躍進していく」ことを誓い、故会長のご冥福をお祈りいたします。

巨星

永井実

あまりに大きく多彩であられた故会長を髣髴させるには、果してどこから手をつけてよいか――。

区々の思い出もさることながら、会長が「俺は職人だ。車鍛冶から出たのだ……うんぬん」とよく言われたが、その車鍛冶から今日の隆々たる(株)羽生田鉄工所の基礎を築き上げられた故会長から、そのつど頂戴した訓戒を、その時点でのように受けとめたか、そしていままたそれを反省してどう解釈したらよいか等、三回忌を迎えるに当たり生前を追想しながら、思い出を「点」として不肖ながらとらえた会長の間人像ではあるが纏めてみたいと思う。

会長は実に響きのあるよく通った声を持っておられた。従業員出勤前すでに中央の現場事務所(現在の新事務所落成前)二階に陣取られ、出勤して来る従業員にメガホンを取って「おい〇〇君お早う」と呼び掛け、にっこりとほほえまれた時の声は今でも耳朶に残っている。あ

る時はその声、そのメガホンが我々への落雷にも使われたものだ。

こうして一日の仕事はオープン！　ところがどうして、このようなオープンは我々如き凡人オープンに姿なのだ。会長はよく言われた「お前達は夜は寝るものとばかり思っている、仕事には夜昼はないのだ」と。さもあらんかな、朝一番の打合せ時などでは追求されると、しどろもどろの答弁を繰り返すこと再三で、すべては先刻お見透しなれば窮して「ハイハイ」返事をしていると、「われは（お前は）俺の言うことを、いきをするかわりに聞いているのか」とよく言われ、大笑いされたものだ。

実に四六時中仕事を追い、飽く迄も追求してゆく態度、仕事が生み、仕事の報酬は仕事なり、という徹底された文字通り「仕事の鬼」であられた。

会長はまた人を駆使する能力において抜群であられた。人を駆使する能力——これは人を見る眼力と、微妙なる人間心理へのすぐれた洞察力と表裏一体の関係にあるもので——これなくして、どうして他人様を意の如くに駆使し得ようぞ。日頃から従業員への公的立場に対してはもちろんながら、彼らが持つ側面（私的）に対しても常に細心の関心を払っておられた。

我々がどう考えても無理と思われる製造工程を提示され、各職場の職長その他のポストを招致、ネックに対する指示等種々論議を交すも、ネックはネックとして最後まで残る場合も多々

あつたが、結局会長は自分の出された線に皆を持って行かれた。

そして我々曰く「おやじさん（会長）がいうんだ、仕方ないや」あまり感心出来た表現ではないが、これが実情であつた。

部下を動かすにリモート・コントロール操作は不可といわれる者もあるが、会長はこのリモートを以て皆を意の如くに駆使され、その時々の実情をよく把握されておられた。

されば病床に我々を呼んでの「微に至り細にわたる指示」は的確なものであり、また単なる報告書等に対してもよく眼光紙背に徹せられ、その処置には実にぬかりがなく、このすぐれたリモート・コントロールにより、陣頭指揮は通常のそれと何ら変わるところなく会長の面目を遺憾なく發揮しておられた。

明治の先駆者福沢諭吉の立身論は、微に入り細をうがって人心の機微を懇切丁寧に述べているが、世に処するには「種々工夫なかるべからず」と。

たとえば人を叱責するには、「如何にも毒々しく聞こえても真実には無害なること、鉄砲を放つて弾丸なきものの如きを要す、空砲罵倒なれば相手を怒らしめず」あるいは「公然と表向きの際より、むしろ勝手口から入り込むがよい」。

「馬鹿者の世の中に独り利口ぶるは一種の馬鹿なり」

また「正理は人間社会に於て敵なきものなれば、つとめて正理の声を高くし、その行はるる部分のみは実際に此れを行なつて正理者の証拠を示し、時の変に際しては滑らかにその理を曲げ、恬然居然として俗にいふ野面（のづら）たるべし」と。

しかしこの福沢は門下生に向かつては声を大にして「独立自尊」を説いているのである。これらが果して全部現在の社会に通ずるかどうかは分らないが、実学者諭吉翁の面目躍如たるものがある。

しかして故会長を識る我々にとっては、会長が翁の実学論を知つてか知らずかは測り得ぬも、その人間心理の洞察においては翁と軌を一にされていることを知り、敬服するのみである。

微妙なる人間心理、遠くて近い男女の仲もその埒外であるわけではない。されば会長はその豊かな人生経験よりして、「鳴く蟬より鳴かぬ螢が身をこがす」とか、「目で殺されるなよ」あるいはまた「ローソクを消せば女はみな同じ」など、その蘊蓄をかたむけられ、笑いのうちに男性・女性の機微を説かれたものだ。

会長がチャンスを自ら求むるにいかにか積極的にあられたか、これは自分が直接に見聞した事ではなく、ある知人から聞かされたことであるが、「会長ならさもあらん」と思われたので挿

入したい。

A氏は会長と出張、列車をともにした。発車後車内が一応落ち着くのを見きわめた会長は、「チョット頼む」と席を立ち、最後尾車の方に向かって行かれた由、暫くして戻って来られた会長はA氏に軽く会釈し、そのまま今度は逆に列車の進行方向に行かれた。いくら待っても戻られないのでいぶかったA氏も進行方向に車内を歩いて行ったところ、そこに十年の知己の如く某氏と談笑している会長を見たので、そのまま自席に戻った。

やがて帰って来られた会長に、「先ほどの方は」と尋ねたら、「昔、俺が若い頃宇和島の現場で一度会った人だ」とのこと。そして曰く「皆は列車に乗り席を得たらそのままだ。俺は乗るといつでも列車の最後から先頭車まで、わずかの知人でも求めて歩く……うんぬん」と。

この姿こそ会長がチャンスをいかに積極的に求めてやまないかを雄弁に物語っているもので、しかも昔、一度会ったのみの某氏を己がペースに引込み、十年の知己の如く打ちとけ談笑する手練のほどは常人のよくするところではないと思う。

社会は活動体である。一時の休みもなく時勢は進展してやまない。しかもその最先端を行く企業はまさに「生きもの」である。この生きものに対処する企業家に求められるべき要素は何であろうか。いろいろと列挙できるが、「先への見透し」はその重要なもの一つとして挙げる

ことが出来る。なぜなれば、この容赦なく激動する現実において「現状維持」は退歩であり、破滅への道標である。

会長はこの「将来への見透し」に対して実に慧眼の持主であられた。

見透しにもいろいろある。過去の種々なる実績の積重ね、あるいはレポート、業界の推移等をミクロ的・マクロ的に検討して将来への見透しをつかむ、いわゆる類推的な帰納法（この勤勉努力はもちろん大切）であるが、これのみにては現代の企業にて最も必要とされる「創造性」を見いだすことはとうてい不可能である。

会長はこの「創造性」と「帰納法」とをよく兼備されておられた。

このへんの事情を東大名誉教授で亜細亜経済研究所長の東畑精一先生は上手に表現されている。その要点は――。

学生が試験勉強に対する連日連夜の努力は一大勤勉の姿ではあるが、ここからは何ら新しい学問的創造は生れて来ない。企業に営々と日夜を問わず励み努力するも此れは畢竟「単純再生産的努力」で、この努力は百台の自転車を千台にするのが恐らく限界である（愚、案ずるに実は此れが大方の姿であろう）。然しこれは一台の自動車の生産に踏み切った事にはならない、自転車はいくら積み重ねても自転車であって自動車にはならない。自転車から自動車これが真

の「創造性努力」であり、また創造性を持った「将来への見透し」である……うんぬんと。

私がなぜ本項に冗文を弄んだかをご推察願いたい。それは、会長が工場に残された二つの職場は、この意味において会長の「創造性」を如実に示しているものであり、しかもまた、その創造性のゆえに現に我々はその恩恵に浴していること大であるからである。

自転車から自動車、それは創造性のゆえに非連続的「飛躍」を意味する。飛躍する創造は同調からは生まれない。抵抗と反対そして時には嘲笑をすら甘受し、孤独に耐えるきびしさが求められる。

我々は往時「会長はなぜこのような無理をしてまでやるのだろう」、あるいは「この際やめたほうがよいのではないか……」等々、よくいったものだ。されば凡人の小さな抵抗ではあつたろうが、会長は恐らく抵抗と孤独に耐えておられた事もあつたらうと推察され、うたた慚愧の念と、またそれにも増して平々凡々の我々との隔たりがいかに大なるものであつたかを知るのみである。

企業は半分までは「運」といわれている。いかに人心の把握においてすぐれ、よく人を駆使し、また創造性に富んだ将来への見透しを持ったとて、この「つき」から見はなされては雄図あたら挫折あるのみである。

会長はこの「運」にも非常に恵まれておられた。

深川毛利町からの移転先を八方手をつくし、やっと現在地に工場を移転した時（去る三十年一月）は果してどうであつたらう。地面は低い、水たまりにペンペン草、猛然たる蚊、蠅の大群、加えて交通の至難さ、反対も仄聞されたところである。

それが四、五年経るか経ぬ中にアレヨアレヨの発展振りである。浦安へ通ずるメイン・ストリートは工場前を走る。新葛西橋は開通する。地下鉄も近くを通り、明春は船橋までオープンするという今日このごろである。

いかにあらゆる面にわたり非凡であられた会長といえども、この発展振りまではよく推測し得なかつたところと思われ、実に「運」の一字につきるといふも過言ではなからう。また実際、その他なんらかの意味での「ピンチ」の場合も、会長には常に「つき」の女神が饗宴を張っていたことをよく聞かされた。

しかしまた諺に「運はしばしば我々の戸をたたくも、愚者はこれをよく内に招き入れぬ」とあるごとく、凡夫の結果論かと、寒心の思いなきを得ぬものである。

「事業には寿命がある。例外なく失敗に終わる傾向を持つ。特にその現状維持においては、これは明治の事業家、森村氏が彼の波瀾万丈の体験より得た事業観である。この必ずや失敗に

終わるといふきびしい自覚の態度がある時、その事業に対する心構えは尋常一様のもものではあり得ないと思う。

会長の終局の事業観もこのきびしさに徹しておられたと思う。

「単純再生産的努力」ではそれ自体、創造性においては現状維持と何ら変わらぬことをつとに洞察されておられた会長は、その天賦の才を踏まえて全エネルギーを己が事業に傾注された事と思われる。

さもなくば、どうしてあの仕事への執拗さと、主体性の強さを考える事が出来ようか。

新し物好きの日本は、戦後アメリカの科学的経営学の旋風により、企業における人間的側面を見失い、マネジメント理論に口角泡を飛ばし、大切な彼・我の価値観の相違には全くふれず、枝葉の技法にのみ得々としているうちに、ご本家のアメリカでは、すでにこの企業における人間性の喪失が問題となっている現在である。一考、また再考を要すべきであろう。

「齢七十古来稀なり」とははや昔の語り草となった。現在は百歳を迎える人も増してきた実状なれば、健康に恵まれあと五年はと、会長の意中を忖度できぬ事もない。されど命は天に在り。

黄泉の会長、ご安堵され給え。

革新の意気に燃える氣鋭の社長は「守成の難」によく耐え、着実にその業績を挙げておられる。

われらもとより浅学・菲才その任に非ざれど、英邁にして意欲的であられる社長のもと一丸となり、城郭を歩一步拡大し安定成長の姿にするのみである。

巨星われらの会長。

願わくば至らざるわれらを常に導き守護されんことを。

—合掌—

天衣無縫たり得ず、また引例も失当の謗りを受くるやも知れず、されど愚小は斯くなるのみ。筆致の稚拙、故会長の像を穢さんことをただ恐れるのみである。

会長の商訓あきないくん

浜 中 秋 雄

会長の商売は見積書のいらぬ商売であると思う。なぜならば自分の方から値段を言わない

からである。相手方の予算を聞き出すだけだし名人である。

私がある会社あての見積書を書いて会長に見せると、会長は笑って、「そんなもの初めから持って行くな！」「相手の予算を聞いて来い！」なんとかこの注文を決めてと思って、相手の会社へ行く出掛けにいわれるので弱ったことが何回かあった。ある時会長に反撥して、親爺さん、そんなことをいっても相手が教えてくれないし、また羽生田は羽生田の採算ベースがあり、それに適正利潤を加えて見積書を持って行くのが商取引の常識でしょう。親爺さんの頭の高さにはいやになると、心で思いながら、そのようなことをいった。その時会長は笑って、

「今も昔も売手と買手の気持は変わらないよ、相手がいわなければいわせるのだ！」

しかし実際の取引では会長のような引出しをあける名人ならともかく、われわれのような者には相手がなかなか口堅く、とにかくどのくらい掛かるのか見積書を出してくれ、と逃げられてしまうのがオチである。

外へ出られないほど身体の具合が悪くなった晩年の会長は、外から帰ってくるわれわれの話を書くことを楽しみにしていたようである。そして自分もわれわれの話から知識を吸収しようとし、また、われわれの参考になる自分の経験談を話してくれる。不思議なもので、この件は会長に聞かれてもだまっていよう、そう思っていて、世間話のうちにつきしかしゃべってし

まうことがたびたびあり、あとでしまった！　と思うときがあった。会長は人の話の聞き出し上手であり、話し上手である。

会長がよくいった言葉がある。

打った鳥と網の中にはいった魚は逃げない。

私は私なりにこの言葉は商売の合理性、商売の進め方、能率的な営業、次の仕事に対する心構えを教えるものではないかと思っている。けっして注文書をもらってしまったから、契約金をもらってしまったから、という意味ではない。もちろん商売に対する責任、損をしても信用を重んじる精神は会長の羽生田鉄工所設立以来の精神であると思う。次の仕事に取り掛かる会長の商売に対する新しい進歩的な、発展的な意欲がその裏にある。会長はまた営業をする者に、お客様に口が足りないのも困る、また言い過ぎてよけいなことを話してしまい商売上損することなどを戒めていた。

会長の朝の早いものには閉口する。よく朝早くから会長よりの迎えの車が出される。人間は朝が一番気分よく、その気分のよいときに、また相手の会社の活動の前に先手を打って、会長の愛読書のあたかも太閤記の秀吉の如く一気に、商売にしてもこれはまとまるとの見通しがたてばその機をのがさず進んで行き、相手の会社へ朝一番で担当の人の出勤前を待って商談をす

る。万事がこのような調子でやるのが、いわゆる会長流の商売の極意であると思う。

また、これと反対にこの商売はどうも見通し不利であると見れば、日本のかつての太平洋戦争のようなことはなく、すぐ相手の会社へ行ってこの件は辞退して来い！ まさにひきぎわのウマさも格別である。

甘味の無い所にアリは寄りつかない。

この言葉もよく会長からでる言葉である。

私が資材をやっているころ、出入りの商人に対しては羽生田を信用して商売にくるのであるから、買ってあげるところばかりがお客様ではない、材料を売ってくれる会社にも買ってやるという気持でなく、明るく親切に対応するようにと、戒められた。

会長の昔の苦難時代の材料仕入れに関する話をたびたび聞かせられることもあった。それで立派な商社から店を持たないブローカーの方まで、親爺さん親爺さんと来社するようになってしまった。私などが出入りの商社に高い高いと値切ると、いつも前記の言葉が飛び出す次第である。この人氣が、つまらないものに引掛かったり、変な物をつかまされたりしたこともあったが、目に見えない無形の恩恵があったと小生は思っている。

(昭和四十三年六月二十日記)

「彼」

原田晴海

今日もまた 機械のうなりで一日の始まりが宣言された
焼けつく真夏の太陽の下で
そして凍てつく朝もやの中
彼は力強く動き出す
そんな躍動する姿を
眼から 耳から そしてからだ全体から感じさせ
我々の腹の底に 力強いなにかを思わせる
そんな響きのある彼の声で
今日も始まった

ますます照りつける太陽
流れる汗 熱気のコもった無情な風

彼はひたすらに動き続ける

時には軽快なワルツを口ずさむように

時には重々しくうなり そしてきしむ

それでも彼は頑張り 動き続ける

不屈の精神を我々に訴えるかのように働き続ける

そんなファイトのある彼の声で

今日も続く

薄暗い電燈に鈍く光って立っている

彼はつかれた さすがに疲れた

彼は考えた 何も言わずに考えた

あの日は寒かった そして主人は冷くなっていた

花で飾られた主人を抱いて彼は誓った

よし頑張るんだ 主人の倍もそれ以上も頑張るんだ

明日への活力を養うが如く彼はじっと立っている

力強い不滅の魂で

明日も始まる

「親父さんと呼べ」

番 場 一 夫

昭和三十二年三月当会社に入社して初めて親父さんに会った。挨拶に事務所へ行った時は、会長という肩書の前に小さくなっていたが、

「よく来てくれた。これからは苦しいこともあるが、がんばってくれよ。俺を会長とは言わないで親父さんと呼ぶんだ。自分の親父のつもりで……」

この言葉を聞いただけで気持ちが楽になった。

親父さんはいつも現場事務所におられ、一日に何度となく職場にこられては仕事上の注意をされていた。私も注意を受け教えをうけた一人だ。ヤスリを使っていたところ、いつのまにか親父さんが後ろにきて見ておられ、おまえのヤスリでは四角な品物も丸くなってしまおうと、ヤスリを取られ、「ヤスリ仕上げはこういうからだの使い方をするのだ」といって、体全体で教えてくださった。

ある時は、製缶屋なら火作りがよくできるようになる事と言われた。

「仕事は上の人のをよくみて第一に目でおぼえる」——こんなことも言っておられた。

鍛冶屋で過ごしてきた親父さんが、クラッチドアに、また、火作りにはあまり関係のない油圧プレス業に力を入れられる。私は少なからず驚いた。しかし、親父さんは「これからはほかの工場より一歩進んだ仕事をしていかないとあとにとり残され、工場はだめになる」と、先の事を言っておられた。今考えるとその通りかもしれない。二千トン・プレス製作の時は親父さんにとって何度目かの工場をかけての仕事だったのかもしれない。

私が入社してからクラッチ、プレスと、新しい仕事が出来たが、全部順調に進んでいる。そのプレスが軌道にのりはじめたところから、親父さんのからだにとっても疲れがうかがえるようになり、病院通いがだんだん多くなれば、そして入院された。病院にお見舞いについても、プレスや職場の話で面会時間は終わった。工場を大きくすること、新しい仕事のこと、いつも頭の中がいっぱいなのだなとつくづく感じた。

外には協同組合、溶接支部と、いろいろ働かれ、業界の人々と作っていかれた。

会社にはまだまだ大型の機械や設備を作ろうとなされておられたようだが、その実現を見ることが出来ないで、さぞ残念でしたでしょう。

「早く嫁さんをもらって両親を安心させる」と言われたのが、親父さんが私に残してくれた最後の言葉だった。

自分の思った通りに工場を動かしていた親父さん、いつも工場を守っていて下さい。風に乗る、太陽の光と一緒に。

たよりになるオヤジさん
平 林 和 男

故会長の銅像建立を記念し、追憶を詩わせていただきます。思えば私がこの会社に胸をふくらませて池田さんに引率され入社したのが、昭和三十二年の春、まだつくしんぼの芽がスタートしたころでした。もうあれから十一年余の歳月が流れて今日に至りました。ほんとうに長いようで短い月日でした。私が入社した当時は、まだ今日のような立派な建物でなく、会社のまわりには草がぼうぼうとはえ、時にはムシナが出没するという、今では考えられない珍事もありました。その後一年一年建物が増築されて来ました。

あのころのオヤジさんは、毎日朝六時には現場事務所に来て、もう私たちの一日の作業を指図されておりました。また私たちが中途半端な仕事をしようものでしたら、その時は頭ごなしに怒鳴られたものです。その当時は私もまだ若く、社会に巣立ったばかりで、この世界のことを良く知らなかったのです。私もすぐに腹を立て、なんだこのクソオヤジ、こんな会社に無理していなくともその時は思い、それが一日の仕事が終わり床についた時に、その日オヤジさんに言われたことを思いだし、その言葉は自分に早く良い職人になれとの意味なのだと考え、明日こそはと自分にいい聞かせて来ました。

またオヤジさんは義理人情にかたい人でしたので、私たちにとっては、ほんとうにたよりになるオヤジさんでした。私もオヤジさんの深い人類愛というものを知り、今日にいたることができたことを本当にしあわせに思います。当時をふりかえりますと、あのころは若い人は四、五人くらいでしたので、職場の人たちと気が合わず、何度か故郷を思いだし、帰ろうかと思っただけでした。

三十四年ごろからですか、プレス業が本格的に開始したのです。私もプレス業の創業とともにこの仕事に従事いたしました。その年の暮もおし迫った十二月十三日、七百トン・プレスを吉田さんと建造中に右足を骨折し、約二カ月の病院生活を送ってしまいました。その時もオヤ

ジさんの暖かいところざしで、退院後は倉庫に二カ月くらいおりました。そしてその後、プレス部の担当が永井さんから池田さんに受け継がれたのを機会に、私も池田さんの下で使っていたようにになりました。

その後、三十六年には関東でも羽生田鉄工所だけしかないという二千トン・プレスの完成をみたのです。この機械が業界に知れ、大きな注文がぞくぞく来るようになったのですが、まだ当時は、球型の仕事の経験浅く、東洋火熱の指導員に来ていただいたことがちよくちよくありました。その後、オヤジさんは精力的に動きまわり、業界にオヤジさんの名声を高めたのです。残念なことにこのころから年々身体が病いのため衰弱していき、永い病院生活の後、ついに四十二年の一月十一日に帰らぬ人となってしまいました。

その日はちょうど私の宿直日でした。私が最初に、病院からの連絡で逝去されたことを知らされました。その時は、自分の実父に去られた思いで、悲しい寂しい思いをしました。オヤジさんの逝去の日に最後まで仕えた事は、私にとって意義深いことではなかったかと思っております。欲を申せばもっと延命でいてくださったらばと思うものです。でも、オヤジさんは他界から下界の私たち一人一人の毎日の生活を、あの寛大な心と御慈愛のこもったまなこでいつも見守っていてくださるものと思います。

これからはオヤジさんが精魂こめて築いてくださったプレスを、私たちで一層業界のために尽くすよう努力いたします。オヤジさんも他界から私たちの成長と会社の繁栄発展を見守ってください。これにて私のオヤジさんへの追悼の詩といたします。

慈愛のまなざし

平 林 ぶ ん

故会長様のご他界を惜しみ、また、このたびの銅像建立のご計画、つつしんでお慶び申し上げます。

会長様は、惜しみても惜しみても、なお、お名残りのつきないご遺徳の数多いお方でした。限りなき欲を申せば九十九歳、百歳以上もご延命でおいでいただきましたかと思えます。

でも、会長様は天国で下界の私ども、ひとりひとりの毎日の生活を、あの寛大なお心とご慈愛のこもったまなざしでいつも見守っていてくださることを信じております。

私は、和男の母として、三回ほどお目にかかったばかりですが、その折りの、あのご慈愛のあふれる数々のお言葉は、今もなお、私の胸に強く生きております。

和男は昭和三十二年三月二十六日に入社いたしました。ことしで十一年も過ぎました。この間、和男が三年目に大怪我をいたしました時も、慈父のごときご厚情をもって慰め、励ましてくださいましたありがたさは、今も、かた時も忘れることができません。

この永い間、生まれたままの息子を、ともかく人生の道に立つことのできるようにお育てくださいましたご恩の万分の一でもお報いしたいとぞんじまして、会長様のお写真を部屋にお飾りし、毎朝、粗茶粗飯をお供えしております。そして、会社のみならずのご繁栄をお祈りするとともに、わが家も日々平和に生活して行かれますよう祈り、ありがたく朝食をいただき、おのおの仕事に励んでおります。

ご生前のご恩の深きを想い、つたなき筆をもちえりみず、ご追憶の一言を述べさせていただきます。

銅像建立完成の佳き日の一日も早かれとお祈りいたしました。ペンを置きます。

〔註〕 桜沢君の御母堂の文章に註しましたように、右の平林ぶんさんの文章も、平林君のお母様の、故人への追慕の念を文章にしたいとの御意向を有難く頂き、お願いして書いて頂いたものです。

(編集部)

偉丈夫

古 沢 仁 一

昭和三十五年十二月一日、私は当社に来た。以来、七年。

初めは、東京にもこんなんびりした田舎臭い所がまだあったのかと。やがて、水害で工場は数日水びたし。これはえらい所へ来たと思った。しかしともかく今にいたる。

私たちが早出をしている時など、よく卵を持って来てくれたりした亡き会長。

その会長が力を入れていた溶接技術専門学校に私は学んだ。

覆水盆に返らず。

故会長は偉丈夫な人であったが。

まだまだ生きていて欲しかったが。

宇宙にも行ける時なのに、変らず、

覆水盆に返らずか。

それもよし、今は宇宙へも行けるのだ。

あの丸っこい顔の会長に会えるかも知れぬ。

香をあげて

堀内今朝徳

故会長さんの三回忌をお迎えし追善供養のため胸像を建立できることを私たち一同何よりとお喜び申し上げます。

私も信州の田舎から上京して十三年目、いまさらながら月日の早さを感じさせられます。

この長い年月、私たちを一生懸命力づけ、元気つけてくださいましたのは、今は亡き会長さんなのです。在りし日の会長さんが走馬燈のように臉に浮かんで参ります。

そうです、長男が生まれた時など、細かなところまで気をくばり、あのころ、ちょうど、皇室のおめでたい時でしたので慶一と命名してくれました。

子供たちもお蔭様にて元気に遊びまわっています。

会社でも、外でも、お逢いすると、いつもいつも家庭のことなどまで心配してくださいました。

社宅にもよく見えて、本当にここにこしていたころの会長さんが忘れることができません。

私も羽生田鉄工所の一部の責任者として、よく感じさせられますが、人を使うということはへんにむずかしいと思います。

クラッチドアの部分ひとつでもいろいろ問題もありますが、一生懸命に会社のためにがんばっています。

長い間会長さんがやってきたこと、教えていただいたことは、一生皆さんの心に、しみついて離れることはないでしょう。

会長さんが逝去された後、会長さんの戒名を頂きました。私のうちにも仏壇がありますので、一緒に毎日花や水、そして香を上げて自分の親同様に供養させていただいております。

会長亡き後、社長さんと一緒に、これからも良き羽生田という会社を作るため、皆々様のこ

協力が大切です。自分たちの気づいたことやらをお互いに話し合って実現させ、暮らしよい働きよい会社を作りたいと思います。

どうぞ会長さん、私どもを見守ってください。

文筆の不得手な私が、亡き会長さんを偲んで思ったままを書いてみましたのです。

会長の格言と私

増 井 富 夫

冒頭から私事で申しわけありませんが、私は昭和三十二年六月十九日に入社して以来、満十年になりました。

私の現在あるのは、社長はじめ先輩諸氏のご厚情、並びにご指導ご鞭撻も多々ありますが、何にも勝る故会長の御親情のたまものと深く信じております。

俗に十年一昔といいますが、入社当りがまるで昨日のようにも思われます。

だが、一方、こうやって思い出を誌そうとすると、次から次と、いろんなことが頭の中をか

けめぐります。

故会長に最初にお目にかかったのは、どうしたわけかはいって四、五日たってからでした。朝八時ちょっと前、青木さん（故人）に呼ばれて現場事務所に行ったら、糠味噌の漬物らしきものでお茶を飲んでおられました。私をご挨拶をして、そしてもじもじしていたら、「君、これはわしの朝食だよ。まあそこへ腰をかけて、一つどうだい」と箸をむけられたのを覚えています。

それから年齢はいくつか、故郷はどこかとか、職歴はどうだというようなことを聞かれました。それにお答えするのに私は謙遜していったつもりだったのですが、あるいは、少しおどおどしていたのかもしれない。

「田舎は一応新潟市内ですが、もう場末の水のみ百姓の三男坊で、仕事はまだかけだしです。で何も出来ません」

それまでにここにこしておられた会長が急に少しこわいくらいの顔で、「自分をそんなに卑下するものではない」とおっしゃいました。私はほっと救われたような気持ちでぐーんと落ちついて、そのあとのお話を聞くことができました。

「大ほらをふくこともないが、もっと自分を大事にして勉強しな」といわれたことを今でも忘

れることはできません。

また、こんな話もあります。その後まもなく、毎朝朝礼をすることになりました。

故会長はその場を利用してよくお話をしてくださいました。

偉人伝やら日本の敗戦の記録やら、マッカーサーが日本を評してまだ十二、三の子供であるといったとか、あるいは義理人情の話から職人論……等々。

なかでも義理人情にからむ恩のお話です。

「恩は金で精算できるものではない」ということでした。私ももつともだと思えます。会長のたとえ話のひとつにこんなのがあります。

たばこを忘れてきて、休憩時間に行こうと思ったが、その日にかぎって財布も忘れてきたというような時、だれかが五十円貸してくれたとします。ありがたいと勇んで買ってきそう新生のうまさもさることながら、つくづくその人の恩を感じる。あくる日五十円もってきて昨日はどうもありがとうと返しても、それは金の貸し借りが終わっただけで恩は返していません。かといって、こんどは相手が偶然たばこも金も忘れてきて自分が貸してやったとする。それで恩は返せたと思ったら大きなまちがいだと思う。自分はそういう場合、それはあくまでも当り前の事をしたまですると思う。要するに、受けた恩は小さくとも、恩は気持で受けるものだ

から、精神的なものである。つまり自分の心からの納得のいく恩返しが必要である。

というようなお話など、まったく同感です。

その次は職人と礼儀について、「親しき仲にも礼儀あり」とか、江戸の職人衆のペランメエ言葉にもおのずから上下の違いはあったとお話しされました。たしかにそうだと思います。落語に出てくる八つぁん熊さんでも、親方に話す時と友達同士の会話では違っています。

それが昨今ではずい分変わってきたように思います。まあ時代が変わってきたのだからといわれればそれまでですが、私は私の現場に若い者がはいつてくると、必ず故会長の言葉をお借りして、義理と人情を話して聞かせることにしています。

いとおやじさん

丸 山 清 治

私と故会長の出会いは、当会社に入るための面接の日でありました。その時も確か病院から事務所に来たようにおぼえています。

入社以後、私は運転手ですので幾度も親父さんと病院通いをしたり届け物をしたりしたものでした。そんな訳で親父さんの記憶というのが、病院と言えば親父さんといった具合に連想されて出てくるというのが本当のところですよ。

また親父さんの初めての私への言葉は「両親は元気か」でした。自分はそれまで家にいたので、それほど親の事など気にしていなかったから、ちょっと耳が痛かったことを覚えていません。親と一緒に住んでいれば親な、どうるさいだけで、とても親孝行などできるものでも無かったですし、やはり親許をはなれなければ親の恩はわからない事だし、だから親父さんに親の事をいちゃん初めに聞かれて、やはり人を子を預かる人の気を使うところは違うなと痛感させられました。この言葉は、会社にはいってからもよく言われたものでした。

寒くなると、よく病院に入院されました。その時には荷物をはこんだりしたので、本当に他人とは思えません。

親父さんは冬になると病院には行って、春になると退院するというように病院の出入りの多かった人なので、荷物の持ちはこびも自然多かった。おかげさまで病院の中もよくわかるようになったほどです。でも救急車に乗って行った時などはびっくりしました。けれども病院にはいれば元気になるのだから、人より丈夫な心臓を持っていたのでしょう。またこれだけの会社

を作ったのだからどこか違っていても別に不思議ではないでしょう。

親父さんのほんとの元気な時を知らないので、人に聞くほどこわい人だと思ったこともなかった。それよりも自分にはいい親父さんでありました。だから、もっと長生きしてほしかったと思います。

親父さんにしてもまだまだ思い残す事もあったでしょう。残念なこともあったことでしょう。

思い出すがままに

丸 山 政 男

今度、故会長の三回忌を迎えますので、それを機に追憶文を書いて下さいとのことで、日ごろ文章を書くことに無縁の生活を送っている私たちが机に向かって四苦八苦している姿を見て、故会長も蓮のうてなの上でさぞ苦笑しておられることでしょう。

思い出、それは沈み去った太陽を惜しむが如く、落日の光が西空を茜に染めるように、過ぎ

去った日を美しく映し出す。しかし真の思い出を語ることの出来る人は、その人と深き心のつながりを持った人にもみ許されるものでしょう。

私と亡き会長とは、同じ会社の内で生活しておりましたけれども、会社における立場や責任の大きさ、年齢、生活してきた環境等、すべてにおいて大きくかけ離れておりました。ですから、存命中に個人的に触れあう機会も少なく、その人となりやエピソードを記すには、あまりにも心の準備が無いのです。

しかし、会長の残された最大のものは、羽生田鉄工所という会社であると思います。ですから、会社の過ぎ去った日々を振り返って見ることによって亡き会長を偲びたいと思います。

私がこの会社に入社したのは、ナベ底景気も終りに近づき、好景気の兆しを見せ始めた昭和三十二年の春でした。洋々たる希望と、見知らぬ社会への不安を胸に、古里の山々に送られながら上京しました。葛西橋を過ぎるまでは街並は明るく、行きかう人々も多く、東京へきたということが実感として感じられましたけれど、橋を渡ると街の様子が一変し、街並は消え、所々に薄暗い街燈の光が見えるのみでした。もしその時バスの内に人々がひしめき合っていないかったならば、田舎の道を走っているのかと錯覚を起こしたことでしょう。

裸電球の門燈のついた、大きな黒い門のくぐり戸から工場の内にはいり、普通の家を改造し

たという感じの事務所で、会長が私達を迎えてくれました。普通の作業服を着て、会長という呼び方よりも、やはりおやじさんというほうがびったりする感じの身近な暖さに満ちた印象を受けた記憶が、今もなお、心に残っております。その身近な暖さはどこからきているのでしょうか。あれは健康を害される、三、四年前でしたか、朝礼の時に十ポンドくらいのハンマーを持ってまいりまして、柄の握り方、足の位置、手の振り方等を、実際にやって教えられたことがあります。きっと私達の仕事を見るにつけ、歯がゆく感じられたのでしょうか。また、朝礼の時のお話にしても、我々と同じ次元で語り、私達の肌を感じる事柄を語られていたと思います。

当工場も私が入社したころは、まだ小さく、工場内には葦が繁り、夏ともなれば蛙の鳴き声に郷愁を感じるほどでした。そして、四棟ばかりの工場と、その中央に小さなデリックが一つ立っていました。その当時に比べれば今は大きく発展しましたけれど、その間には自動溶接の採用、二千トンをはじめ多くのプレスの設置等、多くの新しい設備を作りました。それらの大半は会長存命中に取り入れられました。ここに会長の未来を見る目の確かさを感じさせます。

今、私達は過去を振り返ってみる機会を得ました。過去は一つの教訓ではありません。確実に未来を予測してはくれませんが、未来を考えることは難しいことではありませんが、つねに私達

は未来に向かつて生きております。ですから五年後十年後にいかに変化し発展するかという事に関心を持ち、そのために投資して行かなければ進歩がないのではないかと思います。

会長がなくなつて早や三年になろうとしています、当社もいま一つの転機にきているように感じます。長期的な目でいま何を為すべきかを考え直し、新たな進歩と発展への礎を築き、より良い会社にすることが、亡き会長への最良の供養になるのではないのでしょうか。

人の気持がわかる人

水 田 政 夫

今の会社に移つた当時は、車もすいていて家から会社までスムーズに通えた。

私は通り道、きまつて会社の近くの公園に目をやってみる。昼間の人ごみもなく、ひっそりとした公園の前あたりだ。公園越しに羽生田ボイラと黒く大きく書かれた看板が見える。当時は守衛もなく、タイムレコードもなかった。だがなんとなくすがすがしい張りのある工場だった。私が作業衣にきがえていると、きまつておやじさんがお早うと手を上げて笑いながら歩い

てくる。その笑顔が今でも目をとじると浮かんでくる。

ロール巻きをする時は、おやじさんは、その横に腰掛を持ってきて腰をすえ、掛声をかけながら見ていました。しばらくしてみんなが疲れてきたころには、パンを買ってこさせて食べさせてくれたりもしました。働いている人の疲れぐあいや、身体の調子を感じとることに鋭い人だったと思います。

ともかく、みんなの気持をよくわかってくれる人でした。

また道具やボルト類を大切に使うよう、おやじさんは、かばんを持って長くつをはき、時にはきやはんを巻いて、ボルトを一本一本拾って歩いていたこともありました。また、鋏打ちのボイラに使うように、朝みんなが仕事をする前や仕事の終わったあとなど、ボイラのまわりのボルト拾いをした人でした。

ボイラ水圧検査のときには、みんながもたもたしていると、おやじさんがポンプについて早くやれ、早くやれと、石を投げつけたりもして、きびしい人だと思ったことも何回がありました。

けれども休日の前の日には、映画をみてこいと、こづかいもくれたり、やさしく面倒をみてくれた人でもありました。

蜂の巣

宮 沢 巖

私は十六歳で入社いたしました。直ぐに工場の寄宿舎にごやっかいになりましたので、私はいつも社長を身近に感じながら働いておりました。朝起きて井戸で顔を洗っておりますと身仕度をすませた社長が工場を一巡してこられ、「よう、お早う」と挨拶をされ、そこにある大きな井一杯、井戸水をうまそうに飲まれ「味噌汁のさめないうちに飯を食べなさい」と言いながら事務所の方へ帰って行かれました。

社長は実にタフで、だれよりも早く起き工場、炊事場、事務所、倉庫と、運転前に自動車の点検作業をする人のように、工場の一日の能率向上のための下検分をしておられたのです。

当時、多管式ボイラをさかんに作っておりましたので、社長自ら陣頭指揮に当られ、特に私達には細々と教えて下さいました。

私の心に今でも焼きついておりますのは、鏡板の成型について社長が苦勞されたという話で

す。社長はある時、蜂の巣をみているうちにこれだと思い、一生懸命研究し、へりの折り曲げを工夫されたとのことです。「職人は道具があつて仕事ができるのではなく、道具がなくてできる腕でないと駄目だ」と申されました。本当にその通りで、どんな仕事でも研究と工夫がなければならぬと思います。

朝の挨拶では折りにふれ「諸君が元気に工場へきて働けるのは、寒い冬の朝でも、早く起きて飯を焼き、弁当を作り、履くものの心配までして出してくれるおふくろさんや奥さんのおかげの苦労があればこそであるから、その有難味を忘れてはいけなしいし、親孝行しないものは成功しない」と口ぐせのようにおっしゃいました。

私が出征する時、「死んで帰ってきてはいけない」と腹の底から叱るように言われた有難いお言葉を胸に本当に死なずに還れたことは社長のお蔭と、心から感謝申し上げます。

微力ではありますが、社長の残された工場で、社長のご遺訓を胸に一生懸命働きぬく覚悟しております。

社長が蜂の巣のところで洩らした「心ここにあらざれば見れども見えず、食らえどもその味わいを知らず」とはまことに職人の大切な心得だと思ひます。

会長との出遇い

三 好 敏 夫

私が故会長に最初にお遇いしたのは、今から九年前の午後でした。会長にお遇いする時までには、私は私なりに会長とはどのような人か想像していました。これだけの工場の従業員の業務監督をしている人だから、さぞかし体の大きなエネルギーな男に違いないという勝手な想像をしていたもので、二十歳にもならなかった私などは、何だか逢うのがこわいような、それでいて逢ってみたいような変な気持をいだきながら工場の門をくぐったものでした。

私は鉄工場などという所は、なにしろ生まれて初めてだったので、鉄板やいろいろな型のものがあっち、こっちにいっぱいいるのがっているのです、この会社は何て変てこりんな品物ばかり作っている会社なのだろう、と思いつながら工場の中を会長にお逢いするために現場事務所に向かって歩いていきました。現場事務所は現在の工具室の近くにあつて、二階建の建物でした。私は建物の階段を登りながら、またしても会長とはどのような人物なのか想像しているのに気

がつきました。

室内にはいり、あたりを見まわしましたが、老人が一人こちらを向いているだけで、会長らしき人はいませんでした。私は、会長は外出しているのかと思っていると、私の連れの方がこの方が会長さんですよと介绍说してくださったので、私はびっくりぎょうてんしてしまつて、一瞬ぼかーんとしてしまいました。

それからあまりにも私が想像していた人物と違うので、私の頭の中のコンピューターは本当にこの方が会長なのかというクエスチョン・マークの信号を私に送って来ました。しかし現実には、白い子犬をつれた会長がニコニコ笑顔を私たちに向けながらすわっていて、親しさをこめた声で「よく来たね」と声をかけてくださいました。その声を聞いたとたん、私の体から力がすうっとぬけていくような気がしました。その時まで私は、体を緊張のためコチコチにしていたのでした。それからは楽な気分になり、会長にいろいろとためになる話などをお聞きして、楽しい時間を過ごしましたのを今でもおぼえております。

そのようなことがありまして、私は私なりに会長という人柄のもつ人徳、つまり人を引きつけてリードしていく力は、事業を行なう上でも必要欠くべからざることだなあと、つくづく思ひ、このような人の下で働けるわれわれ従業員は本当に幸福だと思ひました。

鉄三昧の人

森

清

病床の会長は、眼を閉じたまま、とうとう、私を見てくれなかった。

その日、昭和四十二年一月十日昼過ぎから、会長重態のうわさがどこからともなく工場内に伝わった。夕刻、ともかく数人でお見舞に行くことになった。藤堂さん、堀内さん、水田さん、それに私。佐々木義夫君に車を出してもらい、ちょうど、自宅で休んでいた吉越さんをさそって行った。他の職長の人々や、若い人々には、翌日から次々とお見舞に行ってもらおうと、私たちはその先陣の積りだった。

あそか病院の会長の病室にはいると、伝え聞いていたよりも、その病い重しとの感がした。枕許に酸素ボンベが二本、鼻の穴には細いビニールの管が入れられ、ベッドの上の電球には風呂敷がかけてあり、病人とその室の空気は重々しく苦しげであった。それでも、眠り続けてい

る会長の顔色はうっすらとではあるが赤味を帯びていた。胸にかけられた毛布の浮き沈みも、静かながらも、早くも遅くもなく、乱れてもいなかった。

私たちは、かわるがわる、会長の面前に顔を寄せて声なき見舞いの言葉を告げ、退室した。帰途、病気は重いのだろうが、会長のことだから、今日明日ということはなかりうと私たちは話し合った。

ところが、翌未明午前二時頃、工場から電話がかかって来て会長の逝去を知らされた。電話口の田中工場長の言葉にも私は、静かに眠っていた、なごやかな会長の顔が想い浮かばれて、とても信じられ難い思いであった。人の死の知らせは、最初、悲しみよりも驚きをひとに与えるもののように思う。悲しみには、時が必要なのである。それだけに、時の重みが悲しみをしだいに深めて行くのもある。そしてまた、深まった悲しみは、なかなか消えがたいものなのでもあろう。会長の死も、私の心の中でそのようであった。

企業家としての会長は、常に進取の人であった。

昭和三十二年、と言えば私がご厄介になるようになった年だが、当社では溶接部の非破壊検査を行なうために工業用X線装置を設備した。その時、当社へその装置を納入し、使用方法や

暗室の作り方などを指導してくれたのは、現在当社のX線検査を担当してくれている公栄産業の松本社長であった。

そのことを私が知ったのは最近だが、当時、松本氏は理学電機の営業責任者として第一線におられた。当社長に呼ばれて氏が来場、工業用X線装置について簡単な説明をしたところ、商談は直ちにまとまったという。事務的には日本橋の東京支店に行つて、社長や小池一貴さんと話し合ったが、会長が、X線装置の必要性、重要性を感じ取り、よし買おうと決心することの早かつたことに松本氏は驚いたという。そのころ、中小企業、それも草ぼうぼうの工場の、小さい規模の羽生田鉄工所東京工場が、百万円からするX線装置を買うことは、少し他から見ると驚異的であつたらしい。松本氏は、それ以後、他の中小企業の工場へ行つて売り込みをする時に、この羽生田の進歩的行動のエピソードがたいへん役立つたと言つてゐる。そして今でも、何かのはずみで会長の話が出ると、「おやじさんは本当にえらかつたなあ」と述懐するのである。

このことが、各種の面に現われ、それが、今日の羽生田鉄工所東京工場の地力となつて遺つてゐるのだと思う。

進取の人であったことは、その日常生活において、より顕著であった。元氣だったころ、仕事着に着替えて事務所に来るのは、誰よりも早かった。私なども当初、他人より早く出て仕事の段取りをするようにと会長に言われたことがある。それは未だになかなか実行出来ずにいることだが、ともかく会長は、そうした日々を過ごしていた。

その日々の仕事において、常に新しい仕事や物に取り組んでいた。新奇な物を珍しがるとは思わないかと思われるほど、新しい物に興味を示した。仕事や物についてもそうだが、人についてもそうであったようだ。それがために、若干人の誤解を招くような点もあった。

工場内の管理の面についてのエピソードをひとつここに書いてみよう。

何か新しい、そして少しむずかしそうな仕事はいつて来る。すると、さっと関係者を、もちろん作業者も含んで集合させる。そして、さまざまな意見を言わせる。討論させる。その間に、自分の過去の体験談を会長は少しずつ話す。ある程度、その仕事に取り組む方法が固まるころには、否が応でも集まって話し合った人々はその仕事を何としても完遂させねばならないといった気持になってしまう。そして、さっそく人々はその仕事に向かってまい進する。作業に当たる人も、自分がその仕事を作る計画に参画したのだという気持があるから、自然張り切ってしまう。

会長は、その仕事に軌道に乗るまでは何かと注目し、人々と一緒になって考え、時には模型を作っている所に椅子を据えて実楽しそうにその出来上がるのを見たりしていた。しかし、その仕事がある程度のめどに達したと見ると、もう別の新しい仕事に興味を移してしまうのであった。

あとを任されて、その仕事を進めて行く過程で困難にぶちあたった時など、会長のその態度、姿勢に若干の疑惑を持つこともあった。もちろん、任されたことについて生き甲斐を感じて一生懸命やることもあったが。

今、いろいろと企業内の仕事と人間の問題、企業家、管理者としての進むべき道が論じられていく。私たちも学んでいる。そこでは、バイタリティーだ、リーダーシップだ、やれモチベーションだ、行動科学だとかかましいことおびたしい。会長は、そうしたことを身体できとり、すっかり身につけていた人であるように、改めていささかの怖れをとまなびて感じるものである。

会長の仕事上の生活では、一に前進、二に前進、何が何でも前進あるのみであった。その迫力を、ひよわな私などは大いに学びたいと思う。生前の会長についていて、その迫力にのまれがちだった。未だにその弊から脱し切れない。しようのないやつだと、地下で怒っておられる

かもしれない。合掌。

ところで、会長が朝礼で話したことから、二つの話を書きとめ、それを通して追憶の筆をもう少し進めたい。

あるとき、会長若かりしころのことか、船の中で乗り合わせた人が、ある一曲の謡の一節を何回も繰り返してうたっていた。横で聞いていた会長が不思議に思い、どうしてあなたはそう同じ所ばかりをうたっているのですかと尋ねた。相手の人曰く、師匠の許しがまだ出ずにこれから先を教えて貰えないんですと。会長は、その人のその言葉に師と弟子との人間的信頼感、ひとつの道の修行のきびしさと尊さを学んだと。

この話は、ひとつの精神訓話として聞くとさっぱり面白くない。反撥すら覚える。しかし、自分の日常生活、仕事をしてゆく過程の上で考えると、深い意味をもって私たちの胸に迫ってくるのではないだろうか。西洋でも俗諺に言う、ローマは一日にしてならずと。それに通じる話であろう。

謡といえ、幾度か会長が夜の一刻犬とたわむれながら、うなっているのを聞いたような気がする。謡か、長唄か、端唄か、小生無粋者にしてその何たるかを知らないが、往年の若々し

い会長を偲ばせるかと思つた。

また、しばしば、刀匠の話をされた。

刀を作り始める時の刀匠の身心の潔め方、鋼を練り、鍛えることによつて一本の芸術的にも美の域に達する日本刀が作られてゆくという話。この話をしながら会長は、昔、一塊の鉄を叩き、練り、鍛えながら、数多くの治具や工具、製品を作つた体験談をも織り交ぜた。その話をする時の会長は、眼を細め、自分の話に自分で酔う感があつた。永年の体験があつたからである。

今は、鉄というものを、昔ほどには身近に感じることなく、単なる物体の一種として扱ふ傾向が強い。製品を作り上げることに急で、鉄に親しむことが少ない。治具も工具も既製品で間に合う。その方が安上がりだし、合理的でもある場合が多い。けれども、「鉄も生きもの」という昔の人の言葉をも時には深く味わつてみたいものである。その心持が、私達鉄工業に従ふ者に必要なのではあるまいかと、会長の話した刀匠の話を想い起こしながら思う。

ここでまた思うことは、私の見た限りでの会長は、本当に鉄にだけ生涯を捧げた、鉄とだけ付き合つた、鉄ひとすじ、鉄三昧の人であつたということである。三昧、机辺の辞書によると、一つの対象に集中して心を動かさない状態などと解されている。念仏三昧、法華三昧、禅

三昧、仕事三昧などと言う。鉄三昧とはあまり聞かないが、会長のために鉄三昧という語を使ってみたい。このことは、会長の自伝風回想文の草稿を整理していながらつくづくと思ったことである。一徹さ、頑固さを、昔風としてしりぞけることは、現代の風潮の軽薄さを証明するのみである。このことも、私の学びたいことのひとつである。

しかし、それにしても、会長の晩年にのみ接した私として残念に思うことがひとつある。それは、ついに会長が、心と身体ゆとりを得ることなく、悠々自適の生活を送る暇なく逝かれてしまったことである。

病いが会長からその楽しみを奪ったわけだが、あるいはこんな私の臆測は凡愚のたわごとにすぎないのかも知れない。

会長は、たとえ健康にもう少し恵まれていたとしても、いや丈夫であればあるほど、仕事三昧、鉄三昧に生きたかも知れない。かえって、思う存分、鉄三昧に生きられなかった晩年の数年を、会長はどれほどか口惜しく思っていたのかも知れない。そうだとすれば、側にいた私などが、何程かの手助けをも出来得なかったことを、今にして悔やまねばならない。

仕事を離れて会長と私が接することの多くなったのは、会長が病床に親しむようになってか

らである。

病床の会長は、前述のような仕事ひとすじの人らしく、常に人を呼び、仕事のはかどりを聞き、受注状況を尋ね、更には次々と新しいプランを人々に示していた。そして、それについての調査、実行、その結果の報告を聞くことが唯一の楽しみであったようである。朝に昼に夕に、かわるがわる呼ばれた人が、会長の気迫についてゆけず、つい調子のよいことを言ったり、具合の悪いことを病床の人に知らすまいとかくしているうち、どこからかいつの間にか洩れて会長を怒らせ、泣かせたりしたことも間々あった。会長は、聞き上手、しゃべらせ上手の人でもあった。

私も、時に呼ばれて病室に訪ね、こまごました用事を言い付けられた。そんな時、工場の状態のあらましを頭に入れていかずに、不意に尋ねられて困惑することがあった。しだいにこちらも慣れてきて、下調べと下相談をしてから行くようになった。工程管理の任にある者として情ない話だったと思う。

幾度かの入院が重なるにつれ、呼び付けられることもしだいに少なくなり、時に淋しい思いをしたこともあった。

入院中に会長が私に言い付けることは、たとえばベッドの昇り降りの踏台を作れとか、時計

を掛ける場所の移動とか、便器を自分にびたりと合うように改良することとか、食事をとる時に身体をささえる道具を工夫しろとか、その他雑多な用事が多かった。時には奇妙な、意想不到的道具の改造や、製作を頼まれることもあった。

工場内の日常の仕事以外に不意に湧く会長のそうした用事に面食らう時もあった。どうしたら、どんな物を作ったら会長の気に入るのか。何しろ相手は名うての頑固者、出来ない、そんな物は無いということが通用しなだけに戸惑うことも多かったのである。

会長に頼まれた用事のために、藤堂さんや、その他大勢の人々の力を借りた。その人達の助けを借りて、その上で私が好い子になったような具合であったが、ここで改めてお礼を申し上げたいと思う。

ある時、ベッドからの上り降りに使う踏台を頼まれた。精一杯急いで作ってもらい、ペンキの乾く間もどかしく持って行った。会長は喜んでさっそく試用した。ところが、会長は直ぐ私を叱りつけた。その踏台が病室のビニタイルの上ですべりやすいのであった。足のふらつく病人にとって、それは全く危うい品物に違いなかった。あわてて持ち帰り、すべり止めを付けてようやく使ってもらうことが出来た。会長は、そこで私に、物を作る人間として、作る物、使う人に対しての誠意というものを教えてくれたのだと思う。人間工学というとむずかしくな

るが、それはなんのことはない、作る人の、品物と使う人に対する誠実性の問題であるという平凡にして非凡な教えを、会長は企業家として身体で知っていたのであると思う。

逝去直前、入院しているあそか病院の階段の一部に手摺のないことを苦にされ、「あれは病人にとって危険だ、直ぐ取り付けるように」という話が、たしか社長を介してだったと思うが、私にきた。さっそく、増井さん達に手伝ってもらい、ステンレス製の手摺を作って取り付けた。

取り付け終わって病床の会長にその旨報告すると、会長は低い声で「ありがとう」とただひとこと。疲れていたのか、また眼を閉じられた。

会長は、恐らくその手摺を使われなかっただろう。世の中へのことなど、それでいいのかも知れない。その手摺のために、幾らか楽に昇り降りしている患者さんが今もいることだろう。それだけで会長の心は、充分報われるのであろう。

そんな風に会長は、病床にありながらも、自分の身の廻りの改善工夫に意をつくすことに力旺盛であった。仕事の話をあまりしなくなってからでも、このことだけは続いた。ここに、あくまでも物を作ることに、そのことで創意工夫に力をつくすこと、そのことに楽しみを見出し続けたひとりの人を見る。そのことを尊いと思う。人生に処する態度として学びたいと思う。

逝去された日の翌日の昼、ふとしたはずみで社長と副社長に従ってあそか病院へ行った。諸先生、看護婦さんなどにお礼を述べるお二人に付いて病院の中を廻り歩いた。

会長が亡くなられた病室の前を通りかかった。社長と副社長が中にはいられた。空床が二つ並んでおかれていた。向かって左側のベッドで会長は亡くなられた。そのベッドには、布団も毛布も無く、いかにも寒々しいマットひとつあるのみであった。主なき淋しさ、悲しさがそのベッドに満ちていた。一夜あけただけで、こうも物事は移ろうものか。無常という厳しい現実の中の事象をそこに見て、私は胸がつまった。会長の休まれておられたベッドの横のベッドに腰掛けて、会長の逝ったあとのベッドを凝視し続ける社長と副社長。弟と姉。私はその場から離れた。

今ここに追憶の文章を綴りながら、空ということ、無常ということ、人の生老病死について改めて考えさせられた。空と言ひ、無常と言う。物生ずれば必ず滅す。この当り前の事実を私は恐ろしくないとはい得ない。私自身、そして、私の周囲のものすべてについて。しかし私達は常に死と直面し、それを避けることは許されない。死を自身の生の原点としてしっかりみつ

めること、そのことが大切であろう。そのためには、死者を生者の中に復活せしめることも大事なことであろう。

幸い、会長とのあれこれを想い浮かべ、その人についての文章を書く機会を与えられて、会長が私の中にいささか甦ってきたかと思う。私達は、死者の上にあぐらをかいてはなるまい。故人は私達の心の糧であるはずだ。それは企業の上についても言えるだろう。

多くの創始者がそうであるように、私達の会長も、荒地を耕し、種を蒔き、そして逝いた。私達はその実りを刈り取り、今、その恵みに浴している。私達もまた、更に耕し、また種を蒔き、刈り取り、また耕すという創造的な人間としての、社会的な日常生活を積み重ねて行くであらう。

会長は、一粒の麦であった。私もそうありたい。これからの若い人々もそうあって欲しいと願う。

生前の会長は市井の人であった。深川毛利町の、そう言っては失礼かもしれないが、ごみごみとした街角にある病院でひっそりと逝かれた。また、いろいろな意味で、畸人であったと思

う。崎人とは市井にかくれた、いささか常人とは軌を異にする、それでいながらその道に卓越した人と言うとか。世には、そうした隠れた人が数多くいて、社会や産業や文化の発展を本当にささえている。会長はそのような人の中のひとりなのではなかったらうか。 合掌。

(昭和四十三年六月二十三日記)

ステキな会長さん

湯 本 米 蔵

故会長三回忌を迎え、会長さんの思い出を書いてみたいと思います。

会長さんと私とは、五年間ぐらいの短い間でしたが、私には忘れもしない思い出が一つあります。

私が当社へ入社いたしましたのは、三十六年三月二十五日の吹雪の寒い日でありました。長野から四人で来ましたが、会長さんに事務所ですべてお会いしました。会長さんは「よく来てくれた、ガンバレよ」と言ってくれました。今日からは、この会長さんの会社で働かなく

てはいけないと、その時心に感じました。

入社後四カ月ぐらいあどでしたか、暑い日が毎日続き、私は胃腸をすっかり悪くして、会社を十日間休んだ時がありました。毎日床の中で会社をやめて田舎へ帰ろうと思ったものでした。会長さんは毎日、私の部屋へ来て「からだの具合はどうだ、早くよくなってくれよ」と励ましてくださいました。

胃の具合もだいぶよくなり、仕事に出られるようになりまして、仕事をしていきますと、会長さんが私に小さな包みを下さって、これを飲んでみると言ってくれました。それは胃腸薬でした。

私は、一瞬涙が出る思いにされました。今日まで元気に働いてこれたのも、会長さんのおかげだと思ひ感謝いたしております。

その後もうろろとありました。ある時は赤いシャツなどを着ていたり、日曜日に私の職場だけ仕事をしないものだから、「おまえらだけ何で日曜出勤をしないのか」と叱られた時もありました。

会長さんも長い間入院生活をすごされたいへんだったことと思います。私には会長さんは人情味のある、ステキな会長さんでありました。

情の深い方

横 溝 成 夫

初めてお会いしてから、早いものでふた昔を過ぎます。

たしか昭和二十二年夏ごろと思います。当時私は入営を目前に終戦を迎え、両親等の疎開先湯田中で、父の仕事を手伝いながら戦後の虚脱状態の日日を過ごしておりました。

一時しのぎの間借生活から本腰を据え、家の新築も済み、木製雑貨製造業としてようやく家業に身がはいり、引込み思案の私も徐々に近所のお付き合いに仲間入りしてまいりました。

温泉地のことで私たちでも毎日夜間に限らず一日二度、三度と近所の共同浴場に足を運ぶ習慣でしたが、そのころよく血色のよい小肥りで、なんとなく貫祿があり、非常にわだかまりなく時候の話などされる方にお会いすることがありましたが、どちらの方かはぞんじませんでした。

ある日父が、「お客様をお連れしたよ」と、朝風呂から帰って来ました。その声に振り返っ

て見ると、連れの人はいつもの方、もちろんそれが会長さんでした。

終戦直後のことで物資不足の時でしたが、父が比較的無理をして資材に限らず、棟梁までも人選して建てたせいとか、会長さんに間取り、建具、庭の配置等たいへんお褒めいただいた（当然のおせじ）ことを覚えております。

その後、父もお伺いするし、また、会長さんもお見えになるといふ毎日で、あとでわかったことですが、すでにそのころおからだも悪く、特に食餌療法で塩類ほかたいへん制約が多く、ご飯は少量で、代りに豆腐等を多くとっておられたようですが、私どもでは結構父と酒肴をすごされておりました。

そのうち仕事場ものぞかれ、よく段取りや、加工上の微細な点までご注意、ご指導をいただき感謝したものです。

さらに、当時まだ木工機械もなく、二キロほど上流の木工所まで運搬して、おもな加工をしていたのですが、そんなことではと、ボール盤やモーター等を分けてくださいましたのを機会に一通りの機械を据えることになりました。

おかげで仕事も非常にはかどるようになり、毎日の仕事も面白く、家内一同感激していたものです。

また一夕、特に私と弟だけがご招待いただきたいへんごちそうになったこともあります。その節、会長もご気分が良かったか、いろいろのお話の後、最後に浄瑠璃だか義太夫だかで題名は確か「本朝二十四孝」だったと思いますが、たいへん良い声で感情をこめて語られたことを想い出します。考えてみると会長も五十路にはいって間もないころでした。その折り、語りながらご自分で感激なされて、涙を流されておられたのには私たち兄弟は驚き、また改めて情の深い方だとしみじみ感じ入ったものです。

よくはぞんじませんが、そのころ須坂の工場になにか事情があつて、たまたま湯田中に多く滞在されたのがご縁で、このような私どもには幸いなことがあつたものと思われれます。

その後間もなく、おもに東京のほうにお出でになり、あまり湯田中には見えられなくなり、たまに父が上京の際お寄りした時のお噂を聞く程度でしたが、今度は私どもに事情が出来て、二十六年秋から私を手はじめに上京し、家の完成を待つて、翌年には家中が再び東京で暮らすことになりました。

東京に戻った私は、さっそくにお願ひして勤めさせていただくことになりました。しかしながらしばらくぶりでお会いした会長の印象は三、四年以前と比べてだいぶ病気が進まれたことと、一見して察せられました。これも後に聞いたことですが、笹川だかの現場でたいへんな

お怪我をされたあとだったからかもしれません。

しかしながら気力は前にも増して旺盛とお見うけし、事実、事業に対する情熱はすさまじく、社長さんはじめ社員の方たちを引っ張ってゆく力にはつくづく驚かされました。

先ず早々に油壺のボイラ解体作業、続いて間もなく奈良少年刑務所と、はじめての仕事にとまどいながらもそれぞれ芹沢さん、小池さんの良きご指導を受けて二、三カ月間を過ごしました。その間、まだ市外電話の不自由なころでしたが、会長さんから、また時には社長さんから電話による暖かい激励のお言葉や手紙をちょうだいしたことは今も忘れられません。そのかわり私の現場報告が三日もとだえれば、入れ違いに催促の速達が届いたもので、手紙が特に苦手の私には非常に重荷に感じられました。けれども、かえってそれだけ、心にとめておられるのだと思い、そのことに感謝したものです。

住吉町の工場が出来るの間もなく、田中さんに続いて私も工場に詰め、一年そこそこで再度現工場に移転すると、また田中さんに続いて住み込むようになり、住吉町以来朝に夕に会長のおそばで働いておりましたが、その間豊鏢と毎日作業服に身をかためて、元気に叱咤激励、陣頭指揮し、徹夜することも再三でした。また営業活動も活潑に進められ、都内はもちろん静岡などへも出かけられ、お供することも再々でした。それらのことをつい昨日のことのように思

う気がいたします。

しかし会長のおからだは逆に入院を要する状態を繰り返して快方には向かわず、時としては仕事に対する情熱、氣力を以て病を屠るかの感を呈することもありました。

そのころの日課で、私が毎朝会長にインシュリンの注射をすることになっていましたが、しだいに皮膚が硬化して、どこを刺しても針がしなうばかりでなかなかうまくゆかず苦労したこともあります。

ある時、私が倉庫の中でさがし物の折り、不注意で足の指先にパイプを落とした時など、「化膿しないように冷やせ」と、ご自分で水をくんで来て何回も水を取り替えて下さったことは、忘れられない思い出でございます。

会長はよく、

「設備は不景気の時にするものだ。それだけ安く出来るし、したがって好況の時には人より一歩も二歩も先に出ることになる」

とおっしゃって、実行もされ、それ故に会社も隆盛になって来たものでしょうが、社長さんや常務のご苦労もさぞやと察せられます。

三十三年以降会長のおそばをはなれて再び日本橋に席をおくようになりましたが、私の知る

限り闘病生活を続けられるうちに、ボイラメーカーとして確固たる地位を築き、クラッチドアの製造を軌道に乗せ、プレス事業を成功させ、またロータリーキルンや各種の乾燥機等の製作を成しとげ、常に進取の精神をもって事に当たられたことは、とうてい私どもが及びもつかぬこととぞんじます。

しかしながら故会長の遺された事業を更に隆盛に導くことが、ひいてはご冥福を祈ることと思いません。

やさしい心づかい

吉 田 昌 造

親爺さんは、朝礼あるいは機会あるたびに、口癖のように俺は親爺で働く、おまえらは子供で、親子なんだから困ったことがあったら、何でも相談にこいとよく申された。

この親しみやすい、近よりやすい人情味ある言葉が原動力となって、私たちは会社のため、生活のため、一生懸命働くようになったのではなからうか。

私も、会社の経営の苦しい時代に入社し、金銭的に苦しかった。物質的なことで夫婦喧嘩もした。この時、親爺さんは話を聞いて「夫婦仲よくやれよ」と励まされた。そしてある物を頂戴した。人情味ある言葉、やさしい心づかいこそ人の心をとらえるポイントではなからうか。私はこの時、嬉しくまた、感激いたしました。

賃金にかかわらず、内面から情ある援護をされればだれでもが、親爺さんのためならば苦しくともがんばってやろうという気になる。

しいていえば、親父であり子供であることの意を互いに解し、真の人情味を持って事に当たれば、若い現代の働く人々も長く落ちついて、安心して働くようになるのではなからうか。

大空のような心

吉田美智子

私が会長さんに初めてお逢いした時は、葛西という町が潮風の吹く海の近くであることすらも、全然知らない、新小岩から越してきたばかりの中学二年生の時でした。

*

しばらくたって会長さんの病状も悪化し、一人で歩くことも困難になってきた時でも、花に動物にふれる時はやさしそうでした。あの人なつつこい笑顔、青く澄みきった大空のような大きな心を持った会長さん。私も会長さんのように、立派な、そして誠実味のある人間になりたいと思います。

子供に対する深い愛情

和 気 三 郎

私は人間としての生き方にあまり関心を持たずに、また、わからずに最近まで過ごしてきた。わかるのは目先の苦勞と幾ばくかの楽しみ、ただそれだけ。

しかし現在は違う。ほかの人に負けない立派な歩み方もわかるようになってきた。というのは、今から七年前の五月、私は何も知らないまま、ただ「ハンドル」だけをたよりに当会社へ入社した。その時は自分にすべてを賭けず、「ハンドル」だけにすべてを賭けた。「ハンドル」

を握っていれば、「ハンドル」を求めている会社ならどこの会社でも結構だとも思っていた。そのくらいだから仕事に充実感を味わえない。朝から晩まで「ハンドル」だけに気を配るだけ。内面のことは全然考えなかったので、入社一年後、自然に会社がいやになり、生活の面からも退社の決意までした。その矢先、会長がなに食わぬ顔で寮へ寄られた。その時の会長の横顔に、私は全身がジーンとしびれてくるような気がした。というのは、会長ほど子供に対しての深い愛情を持った人はいないと思ったからである。会長が寮の前で車から降りた時には、庭に遊んでいた寮の子供たちが三、四人、自分たちのおじいちゃんのような態度ではしゃぎまわりながら寄って行ったのである。子供達が自然に引きつけられてゆく会長の子供愛とでもいうものに、私は何ともいえない感情に胸を満たされた。それだけじゃない。われわれ寮の世帯全部への思いやりは、人並みはずれた偉大なものであった。私ら家のものたちは、いまさらながら涙がにじむ。本当に残念だ。そうした会長の姿に、すっかり私の身も心もひきつけられてしまった。

つまり、私は決意したのです。そうした日から、私の体全体が一変し、「ハンドル」は第一としても、それ以外の仕事にも自然に手がでるようになり、毎日が楽しくなり、疲れも忘れ、自分にも勇気が出てきた。現在もその気持は、少しも変わらないつもりでいる。ただ一つ会長

は娯楽場所に関心がなかったこと。しかし私なりに考えてみれば現社長への足場を一心に組んでこられた努力の賜といまさらながら痛感している次第である。

会長は言っていた。亡くなられる直前、

「私が十年若ければなあ……」と。「社長と二人でみんなのためにどうしても……」と。その言葉は今でも耳許にこびり付いて離れない。

いうともなしに私の口許から声になった。

私は空を見上げて幾粒かの涙が流れた。

今は亡き会長ではない。この世がある限りどうしてもみんなの心の中に生きなければならぬ人なのだ。私たちのため、会社のため、それから社会人のために。今もお、亡き会長とは想われない。

私は考えれば考えるほどに、エネルギーが増してくる。夜が明けた。また今日の日が楽しみだ。仕事が笑顔で待っているかのよう。

諸君大いにがんばろう。「天下の羽生田ではないか」。みんなのために。一心同体でそれ進んだ。先導者の皆様、今後も今までより一層社会的向上に身をもって励まれんことを切に願うものであります。

(昭和四十三年六月三十日記)

朝 礼

和 田 市 造

私は三十四年三月に当工場に就職しました。信州の田舎を出発する前、会社の会長さんともなれば、白いワイシャツにネクタイを締め、背広を着て、とても新入りの私たちなどと話をされる人だとは思っていませんでした。ところが実際に当工場に働くようになって、自分の想像していたことに誤りのあることに気がつきました。服装にしても私たちと同様に作業服をきて現場事務所にでられましたので、親しみやすい方だと感じさせられました。また会長さんは、「自分の腕一本」で職工から大成された人と聞き、新入りの私たちのよきお手本になり、「人間だれしも努力さえすれば成功するのだ」ということを実感として理解し、希望にもえて仕事に励むことができました。

会長さんは、道具類を大切にし、ボルト一本でも大切にするようよくいわれていました。生前会長さんと直接話をしたことはごく少なかったのですが、いつもくだけた話を飾らず話され

たことが印象的でした。そして現在、「会長さん」の名前を思いおこすたびに私の頭にうかんでくるのは、毎日の「朝礼」です。毎朝全員の集まった前でごく一般的な話やら、「われよりほかは皆師なり」とか、「実るほど頭を垂れる稲穂かな」などとかいった格言を引き出して、若い私たちにも理解できるように解説をしてくれました。また時には、若い私たちには毒な話も飛び出し、少々あわてましたが、やがてはおまえたちもこの話の意味のわかる時がくるのだからといわれたこともありました。

また、会長さんが口ぐせのようにいつもいわれることは「自分の家庭を大事にしろ」ということでした。「最少限の人の集りである自分の家庭において波立つようでは、会社にきて決してよい仕事ができない」また「家庭に帰ってわがままをいってはいけない」といわれました。この時、私は、この会長のいわれたことを胸にきざみ込み、やがてやってくる自分の生活に生かそうと思いました。

また朝礼では、話だけでなく実際にハンマー等を用意させ、ハンマーの振り方などをコーチされたりしました。会長さんに接する機会の少なかった私たちにとって、すべての面において最も多くよいところを吸収できたのはこの「朝礼」であったと思います。

最後に故人の御冥福をお祈りいたします。

きびしきと思いやりと

赤坂末蔵

(有)金幸鉄工所

早いもので、会長が亡くなられてからもう三回忌を迎えるわけですが、全く昨日のこのようにいろいろな思い出が往来いたします。私は生来口下手でして、自分の思ったことを筆に表わすことなど到底不可能ではありますが、故会長生前の徳を偲び、感謝の念をこめて、いささかご追憶いたしたいとぞんじます。

私は八歳の時に父を失いましたせいでしょうか、父に対する思慕の情が人一倍強く、たまたま故会長より公私にわたるご指導を受けること十数年でしたが、思いやりのある会長に父の面影を見いだしたのでしょうか、いつとはなしに会長を「親爺さん」と呼ぶ習慣で親愛の情を表わしてまいりました。

事実、故会長は、私ども「金幸鉄工所」の名付けの親でもあります。

当時従来の赤坂工業所としては業績も振るわず、長い間苦勞してきました折に、新しく生ま

れ代わる意味で、心機一転して社名を改めてはどうかといってくださったのが会長であります。それで私の亡父の名の金次郎の「金」と長男幸一の「幸」とを採って金幸鉄工所と名付けられました。これは祖先の恩を慕い、子孫のしあわせを願うことが事業を繁栄に導く道であるとの意味であったのでありますが、私もたいへん喜び、心を新たにして再出発いたしました。以来、しだいに事業も改まり、今日順調に進展しておりますことは全く故会長のおかげと感謝しておる次第です。

さらに私が仕事一点張りの男であることも見越され、私が仕事のみ専念できるようにと、日常の会計および事務の一切は家内に任せるように指示され、なお専門的な経理の処理には、三浦労務会計事務所を自らご紹介くださる等、またかたわら息子たちには、「父親は仕事上手だから、父親の丈夫なうちに充分に仕事を教えてもらい、早く覚えて立派な会社にするように」との励ましも忘れない親爺さんでありました。

元来私の酒好きは有名であり、親爺さんもよく知っておられて、ご心配をかけたものですが、父親のごとき思いやりで、飲み過ぎないようにと、いつも注意してくださったものです。いつか家を訪ねられた際、家内と呼吸を合わせ、公私にわたり打ちとけた話をされ、親身なご指導をされたかたわら、一步仕事を離れては、全くユーモアたっぷりで一同を楽しませてくだ

さったことも、今は懐しき親爺さんの思い出として忘れ得ません。

不幸にして親爺さんが病床に就き入院された際、仕事の件で病院まで呼ばれたことがありましたが、闘病生活の中でも、事業に終始する熱意は常人の及ばぬところがあり、仕事の鬼といわれた面目が躍如として深く感銘したものです。その折も仕事の話がすんだ後、私に貯蓄をすすめられ、元来貯蓄など無縁の私をして、貯蓄に踏み切らざるを得ないよう、頭金を立て替えてくださり、忝慮なしに蓄えの効用を悟らされる羽目に相成りました。

「この事業はむだのない事業だ。仕事にはナッパ服で、衣服に金はかからないし、鉄の切り屑までも金になる立派な仕事だ」と平素いっておられた親爺さんの仕事に対する抱負は、私の生涯共鳴するところであります。

かつて私には苦い思い出があります。それは、二千トン・プレスの建家の鉄骨を請け負った際のことです。私は手不足を補って、さらにある下請を使いました。ところがこれが思うにまかせず、一向に進捗しない。責任上苦しんでいた私に対し、この時会長の決断によって会社の各組を動員してくださいとされ、私の責任を果たす助けをしてくださいましたことでもあります。その上、竣工式には感謝状並びに金一封まで頂戴し、またこの日が私の片腕として現在苦勞をともしている三男栄三の誕生日であったことなど、その日の私は複雑な気持ちでありました。その当時

を懐古し、故会長の仕事に対する並々ならぬきびしさと、かつ思いやり深い両面を深く痛感する次第です。

三回忌にあたり、今は亡き会長のご冥福を心から祈るとともに、羽生田鉄工所のますますのご繁栄を願ってやまないものであります。
(昭和四十三年六月三十日)

深い理解

宇田川 平次郎

宇田川組

故会長三回忌を迎え、私たちの職場内に会長のご胸像が建立されることはまことに喜ばしいこととぞんじあげます。と同時に、追憶集の刊行に際し、私たちにまで故会長についての想い出をとのことですが、永年文章など書いたこともなく、一段と身のひきしまる想いのもとに、この機会を謹んで、下手ながらもご高恩の万分の一に報いたい念願であります。

私たちは現在の会社からほど遠からぬ新田方面に居住する者の集りで、会社にお世話になる前は農業・漁業・海苔等により生活をしてきた者ばかりです。

昭和三十八年四月、私は、それらの人々十数人とともに故会長の会社である羽生田鉄工所で働く機会を得ることになりました。そのころは全くの素人で、仕事の一つ一つが初経験という者の集りで、故会長はもとより諸先輩の方々にも種々ご迷惑、ご厄介をかけた次第で、それこそ無骨者の勢ぞろいだったことと恐れ入っております。しかしご指導よろしきを得て、どうか会社のお役に立てるよう仕事にもなれて来たわけです。

宇田川班の班長として種々同僚の意見等を会長に具申いたしました。通勤する場合、また退社の際には会社専用のマイクロスバスを利用出来るようにしてくださったのも、故会長のご理解の結果だと感謝しております。

私たちは直接故会長と、ひざをまじえて語り合ったことはありませんが、数多く社会的にも産業界に業績を残されたと聞いております。

また会社の発展に生涯をかけられ、努力と勤勉によりご成功なされた故会長のおかげをもちまして一つ一つ理想的な実現をなされ、現在私たち一同職場において楽しく仕事ができるようになりましたそのことも、すべて故会長のご遺志が立派に生かされているからだと私は考えております。会長亡きあとには現社長であるご子息が、会長の遺徳を受けられ、ますます、会社発展に邁進なさることごさいます。

私たちも働き得る限り会社にご奉公いたし、故会長のご遺志に副うよう努力することを、お誓いいたします。

思うように書き表わすことができませんが、どうぞ私たちを見守っててください。

今度の胸像建立に際し、改めて故会長の遺徳をしのび、お手本にいたしたい所存でございます。

(昭和四十三年六月二十八日記)

会長に続く

木村 潔

(有)三協鉄工所

私の工場は羽生田鉄工所の会長が作ってくれたようなものである。土地の選定、埋立、建物の事、そして資金の心配迄、あらゆる事に会長の手を煩わせて居ります。この様な点で私ほど会長のお世話になった人は他に居ないのではないかと思います。何故私が会長にこれほどの面倒をみて貰ったかについては、人に説明しても容易に納得して貰えないのではないかと思います。

このいきさつについては、何回も人に話をしておりますが、その都度「信じられない」といった顔つきをされたものです。無理もない事で、私自身も当時何故これ程面倒を見て頂けるのか、度々考えたものでした。

会長が、現在の私の工場のお世話下さる迄に、お会いしたのは三度だけでした。

初対面は、市川様につられて、私は単に羽生田鉄工所の工場を見学したいだけの気持でお供したのですが、初対面の時の会話はそのたくみな人心掌握の一例を見せられたものとしていまだに忘れられない事の一つとなっております。

「あんな何歳だね」

「ハイ三十八で御座居ます」

「いいな、君等の年頃には、コレも出来るし、酒も呑めるし、頭も廻るし」

といわれたものである。

それから、その年頃に自分がどんな苦労と努力をしたかを話されましたが、その話振りが淡としたもので、落語でも聞いているような楽しさを覚え、私も実に気楽に、自分の経歴を語り、「現在一番欲しいものは借工場ではなしに、自分で思うように設備し、気兼ねなく働く事の出来る、自分の工場が持たたい事だ」といったような事を申し上げました。初対面で相手を

ぐっと自分に引付ける人柄と、その飾らぬ態度、また巧みな話術に魅せられて、なにげなく話した事でしたが、会長はそれを気に掛けていて下され、その後二度程お会いした時もその事が話題に出ました。

そうしたある日、突然に車を差し向けられ「すぐ来るように」との事で、何かとお伺い致しました処、「このような土地があるから買わぬか」との事で、現在の私の工場の土地を見せられました。突然の事でその日は返事を保留して帰り、社内にて相談した結果、その翌日、「実はそれ程の貯えもないし、金策のあてもないから」と、断わりに伺ったところ「そんな事では一生自分の工場など持てぬ。なんとかなるからやってみろ。百や二百足りぬところは面倒をみてやる」とえらい剣幕で怒られました。

また「土地の値が高く採算が合わぬと思ったら、人の倍働けば良いではないか」ともいわれ、「よし、無駄に使ってしまう訳ではなし、万一失敗したら土地を返せば迷惑を掛けなくてもすむだろう」と、極めて単純な考えで土地の購入に踏切ってしまったものですが、手金は打ったものの残金の支払いが出来ず、地主と同行して会長の許に伺い、会長から地主を説得して貰うような場面もあり、結局どうにもならぬところを助けて戴きましたが、土地の購入すらそのような状態でしたので、その後の建築、設備等についても並々ならぬ御援助を仰いだので

した。

当時会長に「人間望んだ事が達せられようとする時は、神様が門口まできて待っているのだから、自分が逡巡してそれにそむく事はない。一生懸命神様について行きなさい」といわれたものでしたが、会長は御自身が仕事の鬼であったように、すべての人を仕事一途に進ませたかったのではないかと思えます。その気持がたまたまその当時の私の意欲を汲み取って下さったのではないかと自惚れておりますが、私をどなりつけた怒りも、また他人に信じて貰えぬ程の面倒を見て下さった事も、その根底なるものは、私利私欲を超えた、国家社会への奉仕という会長の抱いておられた、使命感を無視しては理解し得ないのではないかと思えます。鉄工事業協同組合に注いだ情熱もその現われであり、働く者をよく愛したのも会長の社会に奉仕するという理念によるものでありましょう。

会長逝って一年有余、まだ私の心の中には会長が生きており、困難な問題にぶつかると何時でも「こんな時会長に相談したらなんと答えられるだろう」と、自分の考え方を会長から与えられた心の鏡に映して、弱く消極的になる自分の気持を、ふるい立たせる事が、自身の思考の型式の如くになっている事、またそれに依ってより良い解決の方法を得ている事を痛感しております。

お会いする度に必ず心に残る良い言葉を聞かされ、それを反芻しながら帰るのはある種の楽しみであり、またその時々々の活力ともなっていて、大いに励まされたものでした。話される事の内容は違っても、その底に流れるものは、「努力せよ」「何事も恐れるな」「積極的に進め」という事であり、何時でもお話の中に痛快な響きがあり、おいとまの挨拶をする時「まあ、うまくやれや」と必ずいわれたものでした。この「うまくやれ」という言葉が、その時々によって様々なニュアンスをもって聞こえ、今でも私の好きな言葉となっております。

会長のお話の内容には長い苦勞の積み重ねといったものが滲み出ており、一々私の心を打つたものでした。単なる説教でなく御自身の体験を通して得たものとして強く人の心に訴えるものがあつたのだと思います。「人間は五時間眠れば充分である」といい、「寢床にメモとソロバンを置いて寝ろ、夜中でも思いついた事はすぐにメモして置け」ともいわれたものでしたが、御自身これを実行しておられた様子で、早朝呼び出されてお宅へ伺つても枕元にメモの置いてあるのをお見掛けしたものです。

また、その早朝の呼び出しの早いのには一時悩まされたものです。会長に私を引合せて下さった市川様がこれまた無類の早起きで、夏冬を通して午前三時半には起床、一番電車が動くのを待って出掛け、一般の会社業務の始まる八時前に一仕事済ませてしまうほどで、知る人の

間ではよくその早起きが話題に上ったほどの人でした。ある時、十二月の中頃の事でしたが、朝五時に電話で起こされ、電話に出てみると市川様の声で、「これから会長のお宅へ伺うから君も来るように」との事、「そんなに早く会長は起きていますか」「会長は僕より早起きだよ」と、そんな訳で冬の朝六時前に会長宅へお伺い致しましたが、それから暫くの間、朝四時に電話で起こされる事が時々あり、閉口させられたものでしたが、会長は何時頃起きられるのか、夜中に考えておられた事を、すぐ私に命じたのだと思います。それでも、「お前さん若いから、あまり早くては可哀想だから四時になるのを待っていたよ」といわれ、苦笑させられたものでした。

四六時中会長の脳裡から事業の事が離れる事はなく、生活即仕事、事業即人生、といった生涯を貫かれた会長は、まさに事業の鬼とでもいふべきでしょう。

会長は私にとって大恩人であり、会長なき今如何にしてその御恩に報ゆべきかを考えた時「国家社会への奉仕」という会長の理念を受けつぎ、努力すると共に、早く自分の力を養い次の世代の者に、私が会長から受けた以上のものを伝え、また、与える事が最大の御恩報じであると思っております。

こうしていても会長の「うまくやれよ」という言葉が聞こえるような気が致します。

寛容と熱情を学ぶ

高橋 正 司

高橋建設工業(株)

月日のたつのは早いもので、会長の御逝去はや三回忌を迎えました。

明治百年を迎えた今日、小笠原の返還、また新葛西橋につづく地下鉄の開通を見ずして逝ってしまった。

天は何たる無情でありましょうか。

おもえば会長は私にとって、時に慈母ともなり、時に厳父ともなって導いて下さった、恩威並び備えた統率者でありました。

私どもが本社に子会社として入社して以来、今日に至るまで、会長の御恩は筆紙に尽し難いところではありますが、私が特に感激に堪えないのは、その過ちを許す寛容の徳でありました。

長い間には私なども幾度か失策を致しました。今度は誠だろうか、とても「だめだ」、そう思った大失策も一度はありました。

しかし会長は、「過ぎた事は仕方がない。然し高橋君、君はこの失敗でどういうことを反省したかね」と訊かれました。

私が自分の考えを述べると、「よろしい、それを忘れないでくれ給え。その反省があれば、今度の失敗は却って、高橋君、君の成長に役立つだろう。この失敗を君の成功の基とし給え」と言って、快然として赦して下さいました。

私はその時、この会長のためなら水火の中も辞すまいと決心したのであります。

次に私が推服してやまなかつたのは会長の仕事に対する非凡な熱情でございました。「高橋君、職場は人を作る道場だ。仕事に打込むことによって、その人の人間は修養されるのだ」と口ぐせのようにおっしゃっておられました。

あの終戦後の激しい危機を見事に切抜けて今日あるを得たのは、全く会長の、この仕事への熱情の賜でありましょう。

私はあの頃の会長の三面六臂の奮闘ぶりを今でも忘れることが出来ません。

否、恐らく終生忘れることが出来ないでしょう。

ああ、会長、こうして億い出を辿れば、万感交々胸に迫って惜別の情に堪えません。

私は、会長の遺訓を守って、社長の下に一致協力、社業に邁進することを誓っております。

温情のなかの闘志

田代春雄

田代組

会長が亡くなられてよりはや三回忌を迎えようとし、いわゆる光陰矢の如しという諺どおりであります。想えば月日の去るのは早いものだとつくづく考えさせられます。

今般会長に捧げる追憶集刊行と相まって、会長の銅像建立にあたり、改めて、私は感謝の念を新たにするとともに、もちろん会長のご恩を忘れることは終生できません。

私は私なりにさまざまな回想にふけりながら、未熟ではありますが、筆をはしらせ追憶集刊行に際しお役にたてば幸いとぞんじます。全くの不束者で筆をはしらせる自信は毛頭ないので、先にも申し述べた通り、私は私なりに会長について書かせていただきます。

ただただ会長に一方ならぬご厄介にあずかり、現在生活面においても一人前になれた恩義を忘れることはできないのであります。

種々なことが想い出されます。仕事上においては上下のみさかきもなく、私は会長と議論し

ました。その都度青年の血が再び燃え上がる快感を味わったものです。自己満足したり、勝手なことを言いながら同等な立場で主張をまげなかった私は、まるで親に甘えている子供のような錯覚を感じておりました。そのような場合でも、私どもに対する会長は、常に慈愛と博愛の精神と申しましょうか、温情の中にも激しい闘志を見せて私どもを育成してくださいました。

会社の発展は共存共栄の日本固有の精神だと申して、自榮、自尊、自己的觀念を罪惡として、お互いに喜んで楽しく働き、楽しく生活し得るしあわせを考えておられたことと思われます。ご機嫌なときには会長自らの生立ち、社会的な活躍などを時折り聞かされ、現代の私どもは苦勞が足りない等と言われたものです。

私といたしましたは、一鍛冶屋の小僧奉公から現会社が東京工場を現在地に移された当初、そのころはもちろんだら旧葛西橋があり、交通の便も悪く、私は自転車で砂町から会社に勤めたわけでございます。その当座、会長は、たしか日本溶接協会東京都東部支部を設立なされ、初代支部長に就任されました。

私は一職工としてでなく、工場の一部を無償で与えられ、独自の立場で会長の会社の下請会社として各種タンク類の火造り加工、一般製缶業として有限会社今田鉄工所を設立、それを会長は心好く認めてください、そうして会長のご指導、ご援助のもとに私どもは仕事をさせてい

いただきました。

また砂町からではたいへんだと言われ、現在の葛西地区の一端に私共家族の住いをも新築くだされ、今なお私どもは住まっております。今もって居住している私どもは、全く言葉で言い尽くせぬほど今は亡き会長に恩を受けておる一人でございます。

その後、会長は、溶接技術専門学校を設立され、校長にご就任なされたのも昨日のように思われます。また東京都鉄鋼溶接事業協同組合の理事長にも就任なさいました。そのころ私どもも会長のおかげをもって会長の意向に副うよう努力いたしました。仕事上共同で働いた同士と折合いがつかず、前途を考え、会長と相談の上、一応私どもの会社を解散して、改めて田代組として出直したわけです。しかし個人企業として会長の温情のおかげにより今もって継続して仕事に従事できますことは、ひとえに会長と現社長のおかげと深く感謝しております。

以上手前ごとになりましたが、会長は昭和三十六年には社団法人ボイラ・圧力容器安全協会を設立して理事長になられたように、数多くの社会事業関係においても、多くの技術者を残され、会社内部については、施設の整備、福祉福利に従業員に対し心をかたむけられた足跡は、会社自体はもちろん、産業界においても、その業績は偉大であります。会長の御高德を敬慕する者は、今度のご胸像の設置により、毎日会長の面影を偲びつつ常に会長のご指導を仰ぐ気持

で会社のなおい層の隆昌発展に励むことができると私は考えます。

新葛西橋が開通したころ、交通の便もよくなり、アカデミア賞を会長が授与されて間もなく、病いのため昭和四十二年一月十一日に逝去なさいましたが、熱意と努力と慈愛博愛の精神の一生を送られた会長の業績は、永遠に胸像とともに私どもの脳裡から去ることはないでしょう。

願わくば会長の英霊よ永遠に私どもを守り給え……。

(昭和四十三年六月記す)

追
憶

第三
部

会社というものは、自分だけでなく家族の者の協力があるからで、

家庭の円満は会社の繁栄につながるのだから、家庭を大事にしなければいけない。

—— 羽生田順平

追悼の言葉

安藤儀三

故羽生田順平氏は、長野県須坂市に於て、若き時代にボイラの製造を志し、世の進歩に遅れじと常に業界の動向を良く察知して、いつも業界のトップに立ち、技術の進歩と経営の改善に尽瘁せられたが、事業の発展は東京に有りと志し、茅場町に事務所を構え、終戦後、小島町に現在の東京工場を開設されました。東京に於ける業界に頭角をあらわし、日増しに受注は増大した。工場は拡張に拡張を余儀なくせられ、あなたの思つて居る通りに遂に今日の如き近代的大工場に迄完備せられました。

今や工場の隅々には、あなたの敢闘精神が行きわたつて居ります。然しあなたは寄る年波には勝つ事が出来ませんでした。遂に病あらたまり、あなたの魂を打ち込んだ工場も事業も立派に残されて、遂に帰らぬ旅に立たれた事はかえすがえすも残念であります。

四十一年十一月五日、故次男大治郎君の二十七回忌法要の際、あなたは命数短きを自覚せら

れ、私の手をしっかりと握って、亡き後は三郎をよろしく頼むと泌々と申されたが、その後継者の三郎君はあなたの意志をよく継ぎ工場経営を立派にやっております。どうぞご心配なく。心から御冥福を祈ります。

△現社長夫人巖父・(社)日本ボイラ協会東京支部長・(株)安藤鉄工所会長▽

叔父の陰に母の力

羽 生 田 勲

私は、叔父順平氏が羽生田鉄工所を今日の隆昌にした陰に、母親とも、偉大な力のありしことを補記したい。

叔父順平氏の名は順平氏の祖父桃源舎錦洞の名と同一で、祖父が臨終の際、嫁(とも)の手をとり、今度生まれる子が男だったら、吾が名をつけよと言ったその言により命名されたといふ。ゆえに母は順平氏には特に心を配り、養育に努力された。

幼少にして叔父源治郎氏宅へ養子に行かれた。

当時の両家は向かい合っていたので、叔父は時々わがままを言って来られたそうだが、母は

これを叱り、いたわり、他家の、接木のよくつくように陰の努力を惜しみなくされた。

事業にはいつてからも七転八起されたが、失敗をされるたびに母はこれをよしとして強く戒め、口で叱り、心で祈りつつ独立心をもって前進するように励まされた。

叔父は、当時、都子氏と文字通り奮起され、あらゆる困難に打ち克って遂に大事業をとげられ、母はその成功を喜ばれたが、子を想う一念は九十一歳の臨終の際まで、「順平や、順平や」と、その名を呼び続けて他界された。この時叔父は病氣中で遂にその臨終に間に合わず、最後の別離をともに出来なかったことは、無常というべく、ともに悲痛に耐えぬことであつただろう。ともあれ、叔父に対する泉のごとき愛の力は、最後の最後までも実に偉大であつた。

叔父は母と二人の姉に正月、盆、その他帰郷されて、行き逢う都度小遣を送ることを楽しみとしていた。母はこれをおしただき、必ず神仏に捧げ叔父の成功をのみ祈りつづけていた。

母と姉達が亡くなったあとにも叔父は心にかかけられ、そのうえ義姉である私の母にまでも志を送られた。これが一年や二年でなく叔父が亡くなられるまでいたされた。私は恥ずかしながらこの真似はなし得ないし、叔父の心の奥深く根ざしたその善行が今も尚羨しく感じられてならない。

終わりに叔父の冥福と羽生田鉄工所の繁栄を祈るものであります。

△舞▽

頌歌

羽生田政子

艶黒く光る墓石に木洩れ日の想ひ鮮らしく吾を支ふる

つらぬける偉業さもあれ大成院その追憶のなつかしきかな

杖引きし後姿はふりむかず雄々しく強く生きし人なれ

風そよぐ百日草の花園に在りし面影ほほ笑みかくる

新しき墓に参ればからからと在りしみ声の聞ゆるごとし

夢枕にしばしば顕ちてわが叔父の面影を追ふ夏の短か夜

丘に建つまろき墓石をさするとき皆頑張れよと声返りくる

一族の和平導く一步とも叔父のみ魂をおろがみまつる

幾度かいばらの道をのりこへしその母在りてこの子生まれし

父の墓建ててしのべる子等のため庭に陽炎濃くもえ立てよ

△羽生田勲氏夫人▽

思いつくまま

羽生田春子

夏——。若者のように明るく逞しく澄んだ空が信濃の山々の上に拡がる。

この大空のもとに、美しく、悲しく消えて行った今は亡き人々の思いに胸が一杯になる。祖母、叔父、叔母、又父母と懐しい多くの魂は、この大空のどこかで一緒になって私達を優しく見守っていてくれるように思う。

叔父はいつも家を訪ね、「みんな元気か、母ちゃんに孝行しろよ」と父の無い私達を力強く励ましてくださった。その笑顔が心に浮かんでくる。

「順ちゃんは人の出来ない苦勞をしてこれまでになった」と、すぐ年上の母はいつも涙ながらに叔父の努力を察し、よろこびもまたひとしお深いようだった。

「お梅姉えやん」「順ちゃん」と、死ぬまで続いた姉弟の間の通称はまことに微笑ましいものがあった。けれど、二人とも泣き虫でよく泣いていた。

お逢いするたびごと希望はふくらみ、事業の発展や開発されてゆく社会の談話に私達は胸とどろかせて聞きいったものだった。

叔父は『人間は五時間も眠ればよい』と、この言葉を持論に病床に就く以前は身を以て実行していらした。特に戦争中は文字通り活躍され第一線の将兵もこれまでと思うほどであった。

幼少で志を立て、数多い苦難の道を歩み、また怒濤さかまく混乱の時代も乗り越え偉大な功績を残された。

私はいつも心の奥深くより敬愛し、子供達にも在りし日の叔父の姿を物語っては励ましの言葉としてゐる。

夏草の生い茂れる野道を歩めば、叔父への限りない慕情が湧いてくる……。

△姪▽

姉思いのおじさん 小林 福雄

「福ちゃん、福ちゃん、ちょっと来い」、幼かった私は、とある町角で呼び止められた。赤茶色の背広を着た順平おじさんが、ニコニコ顔でポケットから十銭玉を三つ出して私の手に握らせて、「おけいちゃん（私の母）元氣かや？ よろしく言ってくれよ」と言いながら、例の上向きな特徴ある顔で去って行った。

東京に行ったおじさんは時々故郷へ帰って来た。その都度私の母をよく尋ねて、「姉やん！ 達者かなあ、ごぶさたしました」と、人なつこい笑顔ではいつて来た。母もよろこんで「順ちゃんコサ（方言で「たら」の意）なんだえ？ ちっとも顔を見せねえ」と言いながら、もう

涙声になる。「おけいちゃんに会っちゃかなわねえ、元氣良くて」といいながら、おじさんの目にチラッと光るものがあった。「姉やん、商売うまくいつているかい？ 金は有るか？ 無かったらいつでも貸してやるで」わずかな会話の中にこれだけ心の通う姉弟を見た私はいつもうらやましく思っていた。

また、街頭で知人の姿を見ると相手が見る見ないにかかわらず、一丁も離れた先から声をかけて、いつも低腰で先に挨拶されるので、町内の人々は「羽生田さんにはいつも先手を取られますよ」と話してくれた。

私が成長してからも東京の帰りの余暇を、よく商売のことで話しあったことがある。

「福！ われ商売はでかくやれ。こんなちっぽけな店でどうなる。商人は腕と度胸だ。町の役などやっちゃいけね。役などやれば飯の食い上げだ。商売に専念しろ。ほかの店に絶対に負けるな。ポヤポヤしていると時代の流れにおいてゆかれるぞ。根性をもってしっかりやれ」

強い順平おじさんの訓えに無学な私も心から奮起させられた。しかし時々話がくい違ったりして「福！ われ馬鹿！」とよく叱られたものである。その「福！ われ馬鹿」が今でもいっばん忘れることのできない一生の教訓とさえ思っている。おじさんの気軽な言葉の中にはいつも商魂の逞しさが溢れていた。

創業以来ボーラ開発工場として業績を築き上げられ、心のネジのゆるむ時もなくおじさんは、常にキャハン巻きで、工場にあっては陣頭に立ち、人の相談事には真心をもって相手になり、確信に満ちた態度でその根性をむき出しの人であった。

終戦後、工場にストがあった時、私の母や柳屋のお婆さんは「順ちゃんが、はたかれては大変だ」と工場にかけつけたところ、おじさんは心配どころか泰然自若としているのを見て、やっと安心したということも母から聞かされている。

しかしまた、私の母の死んだ時最も悲しんでくれた人は順平おじさんであった。東京から電話で最後まで看病の私達夫婦を叱りとばしながら母の病状を案じてくれた。しかもその時すでおじさん自身も病におかされていた。それにもかかわらず母を心配し、私達を励ましてくれたおじさんの愛情の深さに涙がつまって声にならず、電話の前で頭を下げるばかりであった。

一月十一日、巨星（私達にとってはまだまだそんな言葉では表現不足であるが）遂にむなく消え去ったのである。しかし今もなお燦然として輝き続けるそのいのちの美しさは、ただその人が私の叔父さんであると言うことのみにはとどまらない。

追憶集編纂に当たり、縁者の一人として稿を求められたが、私はおじの人間として心にふれた一面のみを記して擱筆したい。合掌。

△塙▽

一声の訓辞

芹 沢 菊 之 助

私は昭和十五年父の死んだ直後、故会長のすすめで入社した。それまでは伯父の石渡栄造の部下として、石川島佃工場の機装タービン部検査課に勤務していた。

故会長は、私の五、六歳くらいの時から年に二、三回は上京されたようだ。たいへん子供好きであったように思う。私は「信州の叔父さん」といい、可愛がってもらったことをおぼえている。

今から四十五年くらい昔になるが、あの大正十二年九月一日の関東大震災には、事務の飯塚氏とともに一面焼野原の東京へ来られて、ようやくバラック小屋をみつけ見舞にきてくださった。その時の話では、赤羽の鉄橋が落ちて汽車は川口止まりで歩いて来たという。私はちょうど外にいて、驚きと悲しみで口がきけず、飛びついて泣いたことを記憶している。

私は石川島へは病氣届を出した。信州の医師から診断書を送ってもらい、浪花町営業所で勤務した。一年半くらいで戦災で焼失、上諏訪営業所へ移り、まもなく会社が「皇国四〇八工場」として管理工場となり、石川島と同格になって、私も正社員となった。その祝賀式に私も参加させてもらった。

何人かの祝辞のあったのち、故会長の訓辞があった。ところがいきなり、
「皆で一生涯命やろう」
の一声で終わってしまった。

上諏訪へ戻って皆に話してやったらゲラゲラ笑うやつばかりで、私はしまったと思った。しかし私には、特に印象的なジュエスチャーとして見えたのである。

最も大切な時に出る天性ともいえるジュエスチャーは、後になっても目に残るものと思う。また、真似のできないことでしょう。

また、人をそろえることも妙手であるし、景気の悪い時にぐちをこぼしたことがなかった。また、だれとでもあいそよく交際し、徳になることはがさず自分のものとしたように思う。

私たちは故会長の工場に対する晩年のご心労を想い出すとともに、立派な外見と内容を今以上に改善できるよう努力したいものである。

△甥・当社勤務▽

仕事が生

池田 明雄

昭和三十一年十月一日、私は日本橋の事務所から工場へまいりまして、今日まで、十一年余り、この間、今は亡きおやじさんに、種々教えを受けましたことを、心から感謝しますとともに、おやじさんの姿を思い出しながらつづります。

その日初めて見る江戸川工場へ寝具一式を持って来たのですが、当時工場とは名ばかりで、周囲の雑草と工場内の姿に驚きましたが、ご年輩にもかかわらず、自ら作業服で第一線に出ておられる会長の姿を拝見して、事業に打ち込む熱意の深さに敬服したのでございます。その夜、おやじさんから、お茶に誘われまして、種々と仕事に対するお話を承りました。おやじさんから最初に命ぜられた仕事は「ワレ明日から朝五時半に起きてサイレンを鳴らし、夜は十時に変電所のスイッチを切るように」でありまして、いささか驚きの第一歩を踏んだのであります。

一週間ほどした日曜日に、おやじさんから映画に誘われました。銀座までおともをして帰りに「ウナ井」をごちそうになりましたが、ウナギは「キモ」を食べなければ、本当に食べた気がしないと申しており、その言葉に、いかにもおやじさんらしい感じを受けました。

おやじさんの仕事に対する熱意は驚くほど強く、それからの日々は、毎夜のように誘われては、必ず、明日への仕事の指図を受けました。その話の中に「男は仕事が一生。眠っていても仕事のことを考えなければいけない」と、よくいわれておりましたが、聞くこと、見ることが今まで、私の考えておったこととは、およそかけ離れたものであり、ただ、漠然と聞いて、時には反感を持つことさえありました。「親の心子知らず」と申しますが、おやじさんの豊富な人生経験を得る機会に恵まれながら、私の若さから逆に考え、「丁稚小僧」に來たのではないと憤慨するようなこともありました。

しかし、新しく入社して来る人には、必ず、苦心談を語って元気づけてくれたり、また、若い人の服装には、とてもうるさく、赤いシャツなどを着ておりますと、すぐその場でぬがされるほど、やさしさの中にも厳しさを持っておられました。

また、ある時は、若い人が喧嘩をしたおりなど、私を連れて、自らそれぞれの親許へ、自分の指導のたりないためといって頭を下げて歩かれた日もありました。

昭和三十三年に、五百トン・プレスを設立され、新しく、加工事業へもと会社を進められたのでございますが、今日、このような繁栄になるうとは、当時、だれしも予測しなかったことではないでしょうか。周囲の反対にもかかわらず、自分の事業に対する信念のもとに、三百五十トン、また、二千トン・プレスへと、着々進めて行ったおやじさんの先見の明は、自ら打ち込んで来た人生への事業に対する豊富な経験が自信につらなり、今日立派に稼動している基礎となったのでしょうか。

当時、プレスの一台一台が、おやじさんにとって、本当に仕事との勝負だったのではないのでしょうか。機械が出来ても、動かす人がおらず、昼といわず、夜までも、仕事と人のことで、ご苦労されておりました。人が休むと、必ず、「ワレ見てこい」といわれまして、特にプレスの皆さんには病気をしても、おちおち休んでもいられなかったことと思えます。ある時は、仕事が上がらず、自らプレスの前に腰をかけて、作業する人とともにご苦労されたこともたびたびありました。

おやじさんにとって、プレスが最後の大きな事業であり、それゆえに、プレスに対する熱意も、また、大きかったのでしょうか。

当時は、休みが二週間に一度しかなかったのですが、その休日を休むと、翌日は必ず注意を

受けたものです。今にしてみれば、充分理解できることでも、当時は、いやみをいわれたように受け取り、私の若さを「ブツツケタ」こともしばしばありました。ある時などは、私があまりおやじさんの思うままに行動しないので、「ワレのために病気になる」といって怒られ、私も意地になり、一カ月くらい口もきかない長期戦をしたこともありました。おそらく、おやじさんと一番喧嘩した仲ではなかったかと思えます。苦しみが大きければ大きいほど、また、懐しさも大きくわいてきます。若い時の仕事に対して、過ぎるという言葉は、決して、あり得ないのではないかと思えます。やがて、自分の将来に、その一つ一つが経験から、自信へと進める道につながるのではないかと思えます。

今日、顧みて、未熟な私を指導してくださったおやじさんを想い出す時、種々いわれました、その一つ一つが、私の胸に強く偲ばれてくるのです。おやじさんの仕事への情熱を今後の私の手本とし、また、力強く引っぱっていたいただいたおやじさんの心に深く感謝してやみません。

昭和四十二年元旦、あそか病院にてお会いしたのが最後になりましたが、話すことは、プレスのことばかり、最後の最後まで、プレスのことを心配しておりました。おやじさん、「プレス」は今日も立派に稼動しております。どうか、いつまでも、安らかに見守ってください。

△甥・当社勤務▽

祖父の面影

羽生田 恵美子

私が幼稚園に通っておりましたころ、江戸川の工場の中に住んだことがありました。工場のみわりには雑草が生い茂っていて、バッタや蝶やトンボがたくさんおり、細いどぶ川にもえびがにが気味悪いほどおりました。東京にもこんな田舎みたいな所があるのかしらと思えるような所でした。

そのころ祖父はまだお元気でした。朝早く作業服に作業帽をかぶり脚絆を巻いて工場の中をぐるぐるまわっておられたお姿がなつかしく浮かんでまいります。時にはメガホンを持って現場事務所の窓から大声を出しておられました。

そのうち杖をつけて歩かれるようになり、しだいに病院通いや入院も多くなってまいりました。

私が大きくなるにつけ、祖父のお体が弱くなられるのでお気の毒でなりませんでした。

お体が悪くても父と仕事の相談をしたり、会社の方々とも、たえずお話をして明けても暮れても仕事に余念がありませんでした。私達の顔を見るたびに、「海や山に行ってもよいから遭難しないようにしろよ。火事で二階に寝ていたため、逃げおくれで焼け死んだ人がいるから、どこから逃げさせるか、用心していなければいけないぞ。ふだんから注意し心掛けていないと、その時になってあわてるからな」と注意して下さいました。そういう時の心配そうな真剣なまなざしが私の臉の中にこびりついているのです。祖父の温かい声は聞こえなくとも、臉の中には永遠に消えないで生きていることでしょう。

△孫▽

祖父

羽生田義人

僕から見た祖父は、仕事一筋に生きてと、この一言に書き表わされると思う。そのためか、僕は祖父と一緒に遊んだり、長話をしたことをはっきりと覚えていない。それが今となって非常に残念で仕方がない。記憶をたどれば、工場の中にある祖父の住いに、日曜日やその他の休

日などに行くと、祖父は、にこやかに「やあ、よく来たなあ」と言われた時の、あの親しみ深い面影は、今も心にこびりついている。そして、多少お話しすると、「義人、工場を一回りして来い」と、よく言われたのは、幼かった僕にとっていささか参った。工場で働かれている人達に挨拶するという簡単な動作が恥ずかしかったのだ。それでつい父や母に頼んで、一緒に回ってもらったのだ。

その時、母がよく「おじいちゃんは、お前の将来を考えてのことなんだよ」と、僕に言い聞かせたのをはっきり覚えていた。祖父が僕を仕込もうとなされた御心は、なぜか僕の胸を熱くする。また祖父は、たいへん犬好きで、いつも犬と一緒におられたと覚えている。

年に一度、つつじの花が咲いた時は、「庭のつつじがとてもきれいだからおいで」と電話が来るのだった。庭には緑色のじゅうたんのような芝生の上に咲き誇る赤みがかったつつじの花が一段と美しく見え、池には涼しさを与えてくれる噴水が立ち昇り、金魚や鯉がスイスイと泳ぎ回っている。また庭の静けさ、重さを作り上げていく永遠の生命をもった石があった。これらを好む祖父の、やさしいお人柄がこの庭に満ち満ちているのだ。つつじを背景に祖父を交じえて家族と共に撮った写真のこまを見ると、なぜか祖父がどこかに、まだ、生きておられるのではないかという錯覚にとらわれるのである。



愛犬シロと（東京の自邸にて一昭和39年初夏）

やさしかったおじいちゃん

羽生 田 順 子

日曜日の夕方、私はおじいちゃんのことを思い出して書いています。

私達兄弟が、みんなでおじいちゃんの家を訪ねると、いつも居間の長椅子に着物姿で腰かけていて、「よく来たなあー、ゆっくりしていけよ」と、うれしそうに迎えて下さいます。「お腹はすいてないか、いっぱい食べて大きくなれよ」と、みんなの好きそうな物をたくさん並べて下され、学校のことや、家でのことなどを、一人一人に聞いて大笑いし、いつも楽しいおじいちゃんでした。それから、おじいちゃんのそばにはいつも犬がいて、おじいちゃんが歩くと、その先ごとについて回っていました。きっと、犬にも、おじいちゃんのやさしい心が通じるのでしょう。江戸川に行っても、もう、おじいちゃんがいないので、とても淋しくなります。

いつも私達のことを心にかけて下さって、「早く大きくなれよ」と言っていられませんでした。今は、天国で私達の成長を見守っていて下さることと思います。

△孫▽

私の願い

池田 恭子

ある日、ふとおじいちゃんが、「疲れたなあ」とそっとつぶやいたのを聞いたことがあります。

私は、あの時初めて、本当に生まれて初めておじいちゃんの口から「疲れた」という言葉を耳にしたので、びっくりしてすぐに「おじいちゃん何で疲れたの？」ときくと、おじいちゃんは、黙って笑いながらじっと私の顔を見ていましたが、何も言わずにまた横を向いてしまいました。

それでつい、私は何で疲れたのかを聞くことができませんでした。

でも、なんだか今になってみると、私の覚えている、いろんな時のおじいちゃんの中で、一番あの時のおじいちゃんの笑顔が好きだったような気がします。

あの時のおじいちゃんは、いつも工場に出ている時のような、あの雄々しくりっぱで、とて

も子供などがそばによりつけない、こわいおじいちゃんではありませんでした。

もっと身近で、暖かで、ちょうどやさしいご隠居さんかなにかのように見えました。

けれど、おじいちゃんの目が、あの時とつても寂しそうに光っていたのをはつきりと覚えて
います。

それで思わず私は、「おじいちゃん」と、呼びかけますと、おじいちゃんは「何だ」と小さい声でしたが、とてもうれしそうに答えてくれました。考えてみると、私がおじいちゃんと心から笑いあったのは、それが初めで、最後になってしまいました。

今してみると、私は、おじいちゃんも、私の友達のおじいさんたちのように、日のあたるあったかな縁側で、「ほんさい」いじりをしたり、孫達と散歩をしたりして、もつとのんびり、そして静かで平和な毎日をおくらせてあげられたらよかったんだがなあ——と、つくづく考えることがあります。

そしたら、きつと、きつと、あの時のおじいちゃんの目もつと明るく輝いていたのではなかったらうかと思えます。

△孫▽

おじいちゃん

羽生 田 真 理

「おじいちゃんは、小さいころから旅に出て、いろいろな苦勞をして羽生田鉄工所を築いたのだから、おまえたちもまじめに、いっしょうけんめいにやりなさい」と、何かにつけ父によく言われます。

おじいちゃんの思い出といえば、私たちが遊びに行くと、うれしそうに「よく来たなあ」といって、学校の話をしたり、冗談をいって笑ったり、私のソロバンをほめてくださったり、お習字を書いて持ってゆくと、とても喜んでずうっとお部屋にかざっておいて、みなさんに自慢して下さったりしたことがあります。私は、とてもうれしかったです。

病院に入院しているときも、私たちにおこづかいをくださったり、いろいろなことを心配してくださいました。もっとももっと長生きしてほしいかったです。そして、私たちが大きくなった時、いろいろなことを教えてもらい、いっしょにまた楽しみたかったです。

△孫▽

父に捧げる(詩・歌五首)

池田みち

彼岸花

赤い 赤い彼岸花を

だれよりもさきに

供えてあげよう

そしてふんわりした

草のむしろに 腰をおろして

えにしという言葉を

考えてみよう

あかね色の夕焼雲が

空いっぱいには 拡がったなら

好きな唄を

うたってあげよう

透き通った風の中で

木の実のように こぼれおちる

父と娘の素朴な詩を

墓石の露とおいてかえろう

入院の日に詠む

あからさまに老の涙を流したもう雪降る夜の別れのきわに

みまかりし日に詠む

子らを辺に言うべきことの難くしていまわの父はむせび泣くかな

横たいて仏となりし父の手を握りて帰る主なき家に

父は亡きしんしんとして凍つる夜のうすき布団の兄の辺に寄る

一すじの唯一すじの煙りなる父は雲居に吾れは草間に

△次女▽

父のこと

羽 生 田 み や

先日帰省した弟から「おとうさんの思い出の文章はできましたか」と言われ机に向ってみましたが進まないのをごいいます。

生前あのように、がむしゃらだった父のことを、かくまで手厚くご供養下さる皆さまの暖かいお心を父はどんなによろこんでいるでしょうと、申し上げる言葉もございません。

私は物心つきましてから凡そ四十数年の年月を父とその運命を共にしてまいりましたので、父の死はさながら私の仕事上での死のように一瞬にして色褪せ心の張りを失ってしまいました。

随分大袈裟な話だとお笑い下さること存じますが、一つの仕事を命として生まれて来た父と娘の不思議なえにしとでも申すものではないでしょうか。

先日お坊さまがこの世のことを勸忍土だというお話をしておられましたが、私どももしてきたことなど、ごく些細な苦勞で、とやこう申し上げることさえ愚かしく恥かしく思われるのでございますが、一本の道を父と共にわき目もふらず夢中で走りつづけて来た人生が余りにも緊張の連続であっただけに、その悲しみが深く大きいのでございます。

父は昔から出張が多く、たまに帰って来ますと

「みやちゃんや。父さんを番頭さんだと思ってごらん。使いようではいくらでも働いて儲けてくれる日本一いい番頭さんだよ」

といって私を慰めながら、留守を預かるものの考え方を教えてくれるのでした。

そんな父でありましたが、人に氣を使い過ぎてはそれが却って周囲のものの苦勞の種となることもございました。

お得意さまの言いなりにホイホイ注文を頂いてきて、一心に仕事を仕上げ、そこまではいいのですが、いざ請求書を持って伺いますと「お父さんに話してあるから、もう少し待ってくれ」と勝手に延ばされてしまい、大事な支払日の予算が狂って泣かされたことなど幾度もございました。

また人さまのこととなると、一肌も二肌もぬぐのに、自分のことはさっぱり駄目で、相手の

人の顔を見て、いやなことを言えないという弱さを持っておりましたので、つい私が父に代って言わねばならず、今日では「姉さんは口が悪い」という定評までいただいでしまい、こればかりは父に「半分は責任があるのですよ」と責めたい気持ちでございます。

また淋しがりやで、夜半出張先から帰りましても私に、やって来た仕事の詳細を聴いて欲しいのですし、町内の仕事先や、宴会先でも遅くなりますと誰かに迎えに来て貰いたいような甘えん坊で、私が迎えに行きますとよろこんで「みやちゃんが父さんのお嫁さんだったらなあ」と冗談を言いながら二人で夜道を歩いて帰った日のことを覚えております。この頃は私の十五、六才のことかと思えます。

またどんなにお酒はいただいても、ご飯は必ず家で食べることに決めておりましたのも、旅ばかりしていた父のもの淋しさゆえではなかったかと存じます。

お金なども、出掛ける時に、「いくら入っていますから何々に」と渡しますと、中も見ないできつさと懐中にし、仕事から帰りますとすぐに返してよこすというふうで、お金には全く無頓着なところがありました。時たま「人助けをして来たよ」と財布の中が空になっていることもございました。

「どんな小さなことでも約束したことは必ず実行した人だった」

と母と遠い日の思い出を話し合っては懐しんだり、またあらぬ蔭口を言つて仏前を賑わしております。

先月父の命日に、ようやく墓碑を建立し、みな様と共に手厚く埋葬出来ましたことは私の心からのよろこびでございました。今はようやく大きな肩の荷を下ろしたような気がいたしております。反面切ないまでの無常感を味わっております。

広々とした寺の境内の静かな墓地で、松風や蟬の音をききながら淋しがりやの父は訪れてくれる人をお待ちしているに違いありませんから、どうぞ近くまでお越しの時は、ぜひお訪ね下さるようお願い申し上げます。

△長女・副社長▽

きびしさの中に深き愛

羽生田 寿美子

時は待つ事を知らず、嫁いで早や二十余年の歳月が流れました。思いおこせば二十一年ほど前のこと、義父（以下父と呼びます）が五十二歳のころ、私の家（安藤）に時々見えるように

なりました。

丸々と太っていて、いかにも事業家タイプの落ちつきと、にこやかな明るい性格が印象的で、初めてお逢いしただけですっかり親しめる感じの人柄でございました。

そのころは終戦後の食糧難で、不自由な配給制度の時代でしたため、野菜も魚も家庭にくばられるころは新鮮味が全くないありさまでした。そのことを知られてか、市川のお家よりリヤカーいっぱい野菜の取りたてをわざわざたくさんとどけて下さったことがありまして、その細かい心遣いには本当に感謝いたしました。人が困っていると放っておけない人情深い性格は、今もなお多くの方々から敬服されているゆえんであります。

きびしさの中にも温かい心をひそめられたすぐれた統率者でございました。私はよく叱られました。家事と育児に追われて、なかなか会社へ出てお手伝いすることができなかつたため、お小言を言われ、自分の至らなさがわかっていてもくやくして涙の出た日もありました。しかし私ほど何でも遠慮なく好きなことを言って甘えたり、困らせた者もないと、いまさらながら恥ずかしくもなり、申しわけない気持になるのです。父は時折、主人に「寿美子は手ごたえがあるよ」と苦笑されたそうです。

父は仕事に対するなみなみならぬ情熱がありました。「月月火水木金金」にびたり当てはま

るほどの努力家で、若かった私には理解しかねてよくこぼしたものでした。「おじいちゃんの仕事ばかりしてつまらない。少しは楽しみのある生活をしてくださいよ」などと申しますと、「人並の事をして勝てると思うか。人一倍努力し研究しないでどうする」と言われ、ある時は「鉄は熱いうちにたたかなければだめだ」「百獣の王といわれる獅子は、子を千尋の谷に蹴り落とし、はい上がって来るようではなればだめなのだ」「また絹のぼろは使い道がないが、木綿のぼろは使える」などと、よく教えさとされたものでした。こうしたことから、父の生涯がいかにきびしかったかがわかるのであります。

無から今日の業績をのこされました立派な働きは偉大な精神力であったと、改めて頭の下がる思いがいたします。父の血のにじみ出るような努力の結晶は会社のすみずみに至るまで生きています。

長い間病苦と戦いながら、好きなお酒もタバコもビールも、甘いお菓子もやめて、後の事を心配しつつ働き抜いてくださった事など、こうして思い出をたどりますと、万感胸に迫り惜別の情があふれてとどめるすべもございません。

正月の松もとれて朝夕の冷え込みが一段ときびしくなっていました。父の容態はしだいに悪くなり、日に日に自分の死を知ってか、家族の名前を呼んでおりました。またこんな

ことを申されました。「今から銚子沖に行って鯛を釣ってきて、いちばんおいしいところを食べさせてやりたい」と、弱った体の中から申しました。私は胸がつまってしまつて言葉ができませんでした。

ついに病に勝てず、静かな永遠の眠りにつかれてしまいました。最後まで仕事のこと、家族のことを案じつつ、立派な生涯を終えられましたお姿が、一年八カ月を過ぎても、今もなお忘れることができず、新たな涙にくれるのでございます。亡き父の面影を偲ぶ時、生前中にもこうもしてさしあげればよかったと、己れのおろかさが悔やまれてなりません。

△現社長夫人▽

父に生きる

羽 生 田 三 郎

父は仕事が生き甲斐で、仕事に生き、仕事に打ち込んで一生を終えた。

幼いころ、羽生田家の養子となり、苦難苦闘の人生をたどったせいかわ、思いやりが深く、奉

公して苦勞したせい、ことに働く人達を大切にしていた。

いつも時勢をよく見きわめ、何年か先のことを考えて手を打っていた。自由主義経済のきびしい国際競争の時代を冷静に見きわめ、愛する事業の明日の繁栄を目ざして、たゆまぬ努力を続けていた。主力製品のボイラの研究、クラッチドア式圧力缶・真空缶およびハイドリックプレス、フランジングマシン加工等、新分野の開発、そしてそれに伴う新設備の建設に喜びを感じ余念がなかった。

父は四男二女の子福者であるはずだったが、不幸にして三人の男子を次々と失い、さすがの父もこればかりは心痛に堪えず、長男の死んだ時など、傷心のあまり火葬場で一夜を明かして暫く平静を欠いてしまったという話である。また東京の大学を卒業した次兄は、昭和十五年の十一月臨終の際、「自分は東京へ出て仕事をやりたかったが残念ながらもう出来ない。ぜひ三郎と力を合わせてやってもらいたい……頼む」と言い遺して他界した。前半生を本社工場の建設に全力を傾倒した父が、東京工場建設の決意を固めたのはこの時であって、その後はいつも兄の写真を身近に飾って仕事を唯一の手向けに、不憫な兄を慰めていたのであろう。

父はまた芸事が好きで、小唄、琵琶、義太夫等が得意で、よく次兄とともに「征露のいくさ洋々と、進み進んで南山の……」と、忠節広瀬中佐の旅順港閉塞の一節を声高らかに吟じてい

た。また楽しい夕飯の時など、好きな一杯を傾けながら、「妻は夫を慕いつつ、夫は妻をいたわりつ……」と、壺坂靈驗記の一節を涙ながらに唄って聞かせるところなど、明治の人の人情味をたっぷり持っていた。

太平洋戦争中、会社は皇国第四〇八工場に指定され、座間、土浦の航空隊を初め横須賀海軍工廠等にボイラを納入し、そのかたわら父は信濃土木株式会社、須坂鉄工組合、天心軍刀株式会社等幾つもの会社を創立し、国家へのご奉公に専念していた。

私が昭和十九年秋、岐阜陸軍航空整備学校に入校した時はたいへん喜んでくれた。見習将校になった時、カーキ色の国民服に戦闘帽、巻脚絆姿の父が、防空頭巾に紺緋、標準服姿の妹を伴って、夜行列車をもともせずにはるばる春浅い岐阜の各務ヶ原かがみまで面会にきてくれた時のことは、今でも忘れられない。精根こめた快作の軍刀を戦友の分と二振りたずさえ、「しっかかりやっているのか。刀は軍人の魂だ。よく磨いておけよ」と、更に「父さんもお前に負けないよう頑張っているから安心してくれ」と、にこにこ満足げにそれを渡してくれた。妹の開いた母からのお握りをほおぼりながら、短い面会時間を一期一会と交す父子の情は、淡々として水の如く美しいものであった。あとで聞いたことだが、当時切符制限はもとより、乗れば上々という満員列車に漸く窓から降り降りして、立ち通しのうえ二回も敵機の来襲に逢って危く難

を免れてきたという、命がけの面会であったそうである。そのことを知られて余計な心配をさせまいとした父の心に頭が下がるのである。

父は賑やかな性分で、いつも訪ねてくれる人が多く、剽軽なことを言ってはよく笑わせていた。また社会奉仕にも力を注ぎ、溶接協会、溶接学校、協同組合等進んで協力していた。そんなことが認められてか、晩年日本学士会からアカデミア賞受賞の光栄に浴した。

また父は、豊臣秀吉が大好きで、よくその話をしては教えていた。私がよくよく困ったことにぶつかって相談にゆくと、秀吉がまだ木下藤吉郎を名乗っていたころ、佐久間信盛、柴田勝家、織田勘解由等名だたる武将でさえ失敗した尾張、美濃国境の洲股城を、あらゆる困難に屈せず、生命がけで短期間に築きあげた才知と努力、そして根底に横たわる誠意の物語を聴かせ、「人が出来ることは誰でもやる。出来ないことをやるところに人間の価値があるのだ」と教えられた。また「人間は裸で生まれて裸で死ぬものだ。正直が第一だ。その日その日人に悪い思いをさせず一生懸命努力すれば道は自ら拓けてゆく。何事も人に勝つより己れに勝つことの方がむずかしいものだ。

「憂きことのおこの上につもれかし限りある身の力ためさん」

と、自訓の山中鹿之助の言葉をあげて励ましてくれたものだった。

父の闘病生活は東京衛生病院、順天堂病院、慈恵医大病院等の診療を受け、最後の数年間はあそか病院に入院したり通院したり、随分とお世話になっていた。入院中は病苦と闘いながらも絶えず仕事のことや、若い私どもの気付かぬことをこまごまと注意してくれた。また、あそか病院は私の工場への通勤途上にあるので、たいてい朝の挨拶に寄り、昼は折々呼ばれて仕事の指図をうけ、夕方にはその日の報告に寄るといふように、絶えず父を中心に用の有る無しにかかわらず行動を共にしたものだだったが、亡くなった今日、呼ぶ人も無く寂しい思いがする。

父はあそか病院に入院中、優しい親切な先生、看護婦さん、そして入口のおばさんに至るまで心から感謝していた。いよいよ死期の迫ったことを知った父は一月七日私を呼んで「俺はもう駄目だ、済まないなあ、わんだれみんなでうまくやってくれ、お世話さま」と言って声をふりしぼるようにして泣いた。「頑張るんだよ、いつだって負けたことがないんじゃないか……」とは言ってみたものの、せっぱつまった父の泣声は救いようのない悶絶の叫びで、私も全身を耳にしてこの言葉をうけた。

一月十一日早暁、父は暖かい家族や親戚の人達に見守られ、尽きせぬ名残りを惜しみつつ感謝の思いに満ちて安らかに此の世を去った。

後日主治医の田川重三郎先生が、「私がお父さんだったら十年前に死んでいたと思う。知ら

ないということは強いことだが、それにもまして精神力の偉大なことを深く感じた」と述懐しておられた。視力もほとんど失い、なおかつ襲いくる病魔に立ち向かい、平然としてその苦痛を他に洩らさなかったことは、晩節大いに学ぶべき点であった。

今私は主の無くなった父の安楽椅子に腰をおろしてその時の父をまざまざと思い起こすと、もう一息というところでその余命の少なきに泣く父であったが、父の生涯はもう一息、もうひといきと頑張り通した生涯であったのだと思う。

時に私には辛く、またきびしい父だったが、それもこれも跡取りである私に対する温かい教えであったことを身に滲みて感じ、生前その真意を充分理解できないでいた不明を詫びたい気持ちでいっぱいである。

私が今いちばん心残りに思うことは、余命の短いことを知ってか、病軀も顧みず、建設また建設と、無理と努力のし通しでどうか東京工場を軌道に乗せ、これからは少しでも余生を楽しめるのではないかと願っていたのに、そのいとまの与えられなかったことである。最後の夏には箱根に行つて静養され、少しでも楽になったのか、冬は房総の暖かい海岸へ行つて元氣になりたいと、世話になる先まで頼んでおいて、別の国へ旅立たれたことは返すがえすも残念であった。

今梅雨の長雨が父の好きだった庭の石を濡らし生き返ったように見え、棕櫚、ユーカリの緑は濃さを増し、窓ガラスに雨がたたっているのを見ると、父がそこにいるように思えてならない。

この父の遺志を受け嗣いで、不肖私は次代を担う責任者として自らを省み、今後は一層努力研鑽を重ね、亡き父の訓えに酬ゆべく、また、事業の繁栄と従業員一同の幸福、そして社会への奉仕を目ざして前進する覚悟でございます。暖かい周囲の方々の深いご理解と一層のご指導ご鞭撻をお願い申し上げ、拙い稿を終わります。

△三男・現社長▽

遺稿

ものは立った姿勢で見るべく、考えるべきだ。

—— 羽生田順平

想い出づるままに

羽 生 田 順 平

私はいつの間にか七十路の坂を越えてしまった。

顧みると、明治・大正・昭和と、激動する時代の波をくぐり抜け、一筋の道を馬車馬のように走り通して来たこの歳月は、時に長くまた短くも思える。

近頃はめっきり体力が衰え、人手を煩わさねば何一つ叶わぬようになり、外よりも内に、口よりも心に籠り勝ちになったようだ。

この老人気質をよく知り、病軀を気づかってこれにあだせぬよう心からその手足となって尽してくる温かな人々の気持ちを考えて、今日まで果そうとして為し得なかった自分の力の限界と、更にまた多くの支えとなった人々の並々ならないご恩にむくいようとして、それも叶わない焦燥感に心が痛むのである。

東京工場の建設もおおむね終り、ホツとしてこの夏は孫と一緒に箱根の山荘で静養させて貰

い、秋風とともに住み馴れた工場へ帰って来た。

今日は時折り秋蟬が枕許へ来て鳴いている。空蟬のいのちの限りの鳴き声を耳にしていると、遠い子供の頃の思い出に繋がる故郷の山々や、忘れ得ぬ人々の懐かしい姿がありありと蘇えって来て、もう一度元気になって、この秋には是非故郷を訪ねてみたいと思っている。

そんな懐古に耽っていると、内山の爺さんが庭の芝生に水を打ちに来て、黙って帰ってゆく。その後姿のわびしさが、今日の自分のそれであることをおもう。

やがてくる永い旅立ちの前の、静かな落着きのひとときに、想い出すまま、老いの筆を取ることにしよう。(編者註・内山氏も故人の跡を追うように没している。)

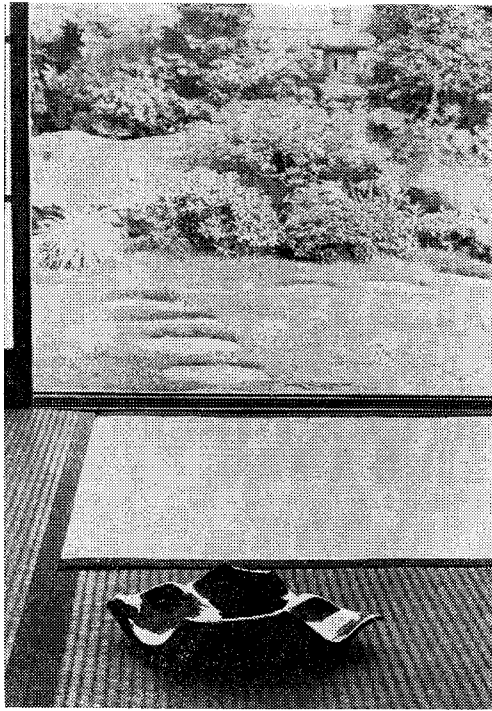
*

私は五歳の時、子供で何もわからないまま、向いの柳源という叔父の家に引取られた。

養父の家は小さな車鍛冶屋で、荷車や農機具の製造をしていた。

養父は昔気質な嘘のない実直な人で、それが大きな支えとなっていたようだが、仕事や家の職人たちには厳しく、養父と職人との仲はいつも養母が陰日向になって、何かとよく面倒を見てやっていた。

この養母には子供がなかったが、唯それだけとは思えぬほど、思いやりが深く、幼い私を可



主なきあとの居間より庭をのぞむ。故人は平葉子鉢のあるあたりにベッドをすえて病身を養っていた。

愛がってくれた。

そうした中で、日が経つにつれ心も定まり、家の空気にも馴れ、一途に働く養父たちの生活の中に、自然に溶け込んでいった。

そのうえ体も丈夫だったので、小学校へ上がる頃にはみんなと一緒に起き、電気がないのでカンテラ掃除と、ランプ磨きと、それから町に居えつけてある土管（当時の共同水道のようなもの）へ水をくみに行き、台所の瓶に水を一杯にして、急いで学校へ行った日のことは今でもハッキリと覚えてい

る。
夜、ランプに灯がつくと、養母から『順平が磨くようになってから家の中が明るくなった』と言われるのがうれしく、ランプの調子をよく見

て回った。

今でもランプの灯を憶うと、養母の顔と重なって、ランプを磨く子供の頃の私の姿が浮かんでくる。

したがって手のない時や、養母の病気の時には、寺の修行の小僧のように、飯焼きや、雑巾がけなどもさせられ、『飯というものは薪で焚くものじゃないぞ。心と耳で焚くものだぞ』と教えてくれた養父の言葉は、後年一人立ちしてから漸くその意の深さを解することが出来た。

九歳の頃、たまたま友だちから、村へタマゴを買いに行くことと儲かることを聞き、早速タマゴ買いのピクを買って出て見たが、百個はおろか、五十個も手に入らなかった。それでも一心に行くうちに、だんだん農家の人たちとも顔馴染になり、よい日には一日に十銭もの儲けが上がるようになり、そんな時は昔あった、さざれ蟹の菓子や下駄の鼻緒や、ピンツケ油（女の人の髪につける油）などをいっぱい買っては、養母のよろこぶ顔を思いながら夕暮れ道を一人心急いで帰って来た。

四年生の盆には、人手が足らず学校を休んで、家業の手伝いをした。

職人の中に土屋辰治という兄弟子がいて、腕もよく、人柄もいいので、自然とみんなに好かれていたが、それだけのことはあり、夜なべ仕事にトチ金（山から木材を伐採する時に使う金

具)の百個も作る腕前は、やっと半分位しか出来ない未熟な私の及ぶところではなかった。

またその頃の工場の収支は悪く、盆暮れになると養父たちは顔色を変えて、やりくりの相談をしていた。小さいだけに僅かな不況もすぐ収支に響いて、養父たちの嘆きは絶えなかった。

こんな有様を見て、少し値上げをしようと言ってみたが、堅気の養父はこうした無理をすることが、お得意さまへのご奉公と思ひこんでいたようで、苦勞のしどおしであったが、その反面、養父にも、祖父より受け継いだ作句趣味があつて、ちよつとした心のひまを見出すと古びた手帳に、出来た俳句を書きこんでは、ひとりその境地を楽しんでいた。

祖父の句に

初蝶や花の小道の果は山 錦洞

という風流な句がある。

養父の

詔らはぬ色かよ夜の白牡丹 玄司

という、夜の闇の中に無心に咲く白牡丹の美しい姿をそのまま照しみようとする曇りない心



臥竜ヶ池の畔に立つ桃源舎句碑（中央が養父の句）

を映した句が、今なお故郷の臥竜ヶ池の畔りに石に刻まれて残っている。

この句碑は、祖父順平が俳人芭蕉の支流をくむ桃源舎という俳門を起こし、その二代目を養父が継いだことから、後日門人たちの手によって建てられたものである。

余談になってしまったが、そのような家計のやりくりと、町の鉄工場の様子と、発展してゆく製糸工場の上昇を見るにつけ、私はなんとかして東京に出て、しっかりした技術と学問を修めなければ、いずれ家は取り残されてしまうと思った。そう思うと矢も楯もたまらず、尋常高等小学校に進んだものの、高一、二、三年分の勉強を済ませなくては試験を受ける資格がない工手学校に入ろうと、先生によく頼んで文字通り一心不乱に勉強して、翌年三月には神田猿樂町にあった日本工手学校の試験を、そのまま田舎の学校で受けさせて貰い、運よくよい成績で合格出来た。「よくやった」と先生に褒められた時のうれしさは今でも忘れることが出来ない。それは十三歳の春のことである。

つづいて東京の学校から四月三日に入学せよとの知らせが家に来た。

残る心配は自分の望みと今後の身の振り方を養父に話して許しを乞うことであり、家の事情を思うと心が曇ってしまうのだが、なんとか勇氣を出してそれを話そうと機会を待っている矢先、運悪く、養父に無断で家を飛び出した大工職の定さんがひょっくり帰って来た。

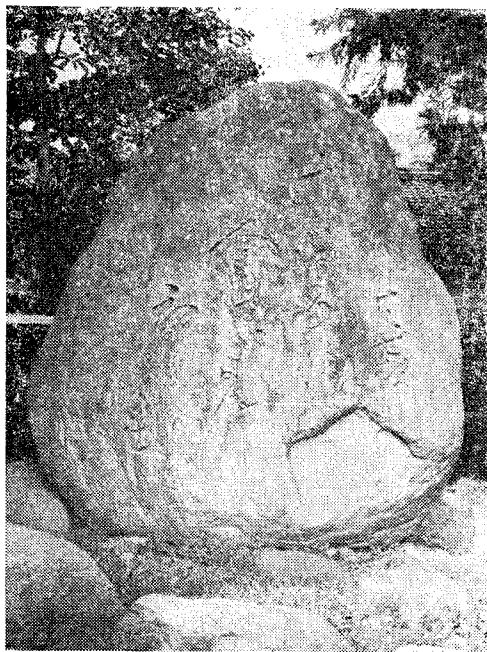
人手不足で悩んでいた頃なので、養父は事情も聴かず「やれよかった」と定さんの言いなり二十円の金を前貸してやった。それで済めばよいのに、定さんはその金を持ったまま中野町の町井さんとかいった車鍛冶屋へ逃げて行くという騒ぎが起こり、私は養父の命令で定さんを連れに町井さんへ行き、いろいろ掛け合って、やっと定さんを連れもどして来た。

ところが家に帰ると、更に一大事が起きた。東京の工手学校からの手紙を見つけられてしまい、実母が呼び寄せられ、他の縁者も多勢いて私の帰りを待っていた。この時ばかりは実母も『この人手不足に家を見すてて、東京の学校へ行くなどは、もつてのほかの恩知らずだ』と、私を厳しく叱り、有無を言わせなかった。

私は黙って頭を下げるより仕方がなかった。もとより無理な願いと分っていたので、万一の時の用意にとしたためて置いた書置きを出して、無断でやったことを心から詫言じた。

その書置きには『他人は百里の道を十日で行くのに、私は一カ月かけても着く見込みがないから、この際、思いきって、東京へ出て学問と技術を身につけて帰り、一日も早く親孝行をしたい』というふうなことを書いて置いたが、誰一人としてその気持ちを理解してくれなかったので仕方なく、『東京へは行かぬ』と心にもない嘘を言って、その場をすませた。

一難去ってまた一難で、養父との話合いは失敗に終わったが、決意は変わらず、入学式を目前



芝宮さんの大樺の下に祖父が建てた芭蕉の句碑
けふばかり人も年よれ初しぐれ

に控えて秘かに準備を怠らず、二、三日後の夕方には手下げ鞆を近くの氏神の芝宮さんの大けやきのウロの中へ隠しに行った。もしかして境内の乞食に見つかってはと杉の枯葉を上からぎっしり覆って家に帰った。

予定通り四月二日の夕食後、友だちの処へ行くとさきり気なく家を出て、夜行列車に乗り、翌三日の定刻には無事工手学校の門をくぐる事が出来た。

けれど東京での生活はなかなか大変で、僅かばかりの手持ちの金は瞬く間に使い果たしてしまい、先生に頼んで小使いさんの手伝いをしながら、小使いさんと一緒に寝て、なんとか一時は凌げたものの、腹いっぱいのみしを食うためには並大抵のことではなく、そのうえ学費にもこと欠くとなると、これまで苦勞も水泡に帰してしま

うので、四苦八苦しなから仕事を求めて歩いた。

『子供の時の苦勞は買つてでもしろ』と人はいうものの、その日々は生やさしいものではなかつた。

*

こうして思い出をたどると、懐しさが先に立つが、母のふところに甘えていた年頃には、他家の養子となり、遊びざかりを一途に働き抜いた少年時代は悲しくも、ほほえましい。

今、私にその痕が残っているとすれば何処だろうかと、老いの手をしみじみと眺めるのである。

*

ここまで書くと肩の荷を一つ下ろしたような安堵感で一息つきたくなった。

*

夏の暑さがこたえて入院し、二カ月ばかりで退院の運びとなった。

人間最後の欲求ともいうべき「長寿の願い」が自分一人の努力では果たされぬことをしみじみと思ひ、今更にかつての老父母への孝養の足りなさが悔やまれてくる。

視力もだんだんと衰えて、いつも日暮れ時のような思いがするが、今日はなんとなく気分が

良いのでまた書き足すことにしよう。

*

工手学校入学後東京での約一年間の苦しみは骨身に浸みる思いだったが、今でいうアルバイトをした。その頃の苦労は決して無駄ではなかった。

ある時は芝浦のガスエンジンの工場に、ある時は本郷のポンプ製造所に、更にまた酸素溶接工場にと転々と人の親切に頼って、技術の習得と生きるための努力を惜しまなかった。

その頃たまたま人力車が流行し始め、リムの製造にぶつかり、これは当時の生活のよき助けとなってくれた。

これはコツの要る仕事で、リムのわかしづけの出来る職人が少なかったので、欲しいだけの仕事貰えた。

一台で三十銭になり、相棒（友だち）を頼むと一日三円近い収入があり、そんな日は相棒と二人で本郷の屋台店へとんかつを食べに行き、腹一杯になるまで食べて帰ったことは忘れられない。

人はどうにかなくなった時より、どうにもならなかった時のことが忘れられないものだ。今でも人力車を見ると、その時のとんかつの味が思い出されて切なくなる。

そのような時でも学校は休まず、遅刻すると、廊下の片隅で先生の講義を立ち聴きしていた。いつも先生は「一日成さざれば一日食わず」と夜学の生徒を励ましてくれた。

十四歳の三月、当時有数な石川島造船所の試験に合格し、工場の一員となった日の感激は、現在小さいながら鉄工業者としての私の心の灯となり、今もなお燃えつづけている。

それからは食べることに寝ることの心配がなくなったので、職長や兄弟子たちを慕って貪欲なまで、機械や船舶の勉強に没頭した。そのおかげかしらないが、職長にも可愛がられ、時には子守まで頼まれて、工場への親しみが一層深まっていった。

子守ほどむずかしいものはないと秀吉が言ったそうだが、家を離れた私には背中から伝わってくる子供の、ふんわりとした温かみが忘れてならない大切なもののように、私自身を慰めてくれた。

十八歳の春には職場の小頭となり、二十人近い人の上で責任ある仕事をした。

人として学ばねばならぬ点は、高い人より低い人の心の中に多いものだ、ということを知った。

風の便りによると、その頃養父は帰らぬ私をあきらめるように『親不孝者』と口で言いながらも、近親者には「きっと一人前になって来る」と洩らしていたとのことで、さすがの養父も

老いゆく心の弱さをかくせなかったのかも知れない。先年工場に建てた養父の像は、今は事務所
所の片隅にあるが、これは都の道路計画の都合で工場の中央にあったのを止むなく移したため
で、ちょうど私の部屋の窓際となり、私と一緒に工場を見守るように、くるがねの頬を日に晒
している。

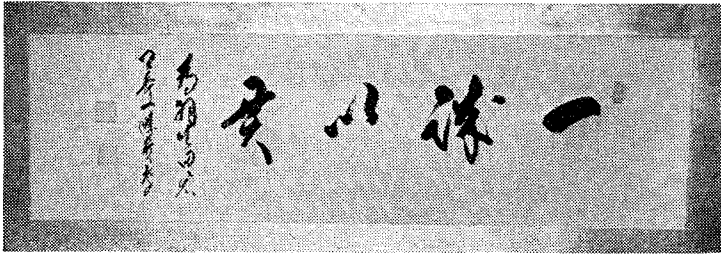
孫たちがやってきて、「このお爺さんはだれか」と尋ねられると、「お前たちのいいヒイお
爺さんだよ」と答えるのに躊躇しない。

春がくるたびごと像の下小さなツツジの花が燃えるように咲いて楽しませてくれるが、出
来れば工場にはもっと沢山木や草花を植えて、働く人の目を楽しませ、心の潤いとしたいもの
だ。

二十歳の大晦日の夜『父危篤すぐ帰れ』という電報に呼び寄せられ驚いて帰ると、病気でな
く、店の運営が成り立たぬところまできてしまったと、悲嘆にくれているところだった。

その債務は、元利合わせて四千円もあるとのこと、早速、関係者の方々の家を訪ね、懇ろに
話し合い、寛大な親切と理解をいただき三千円で話がついた。この時の方々は、独立後の到らぬ
私に絶えず温かな眼差しを向け、挫折するたび私を鞭打ちところから励ましてくれた。

さてその三千円は、私が上京後十年近い歳月の間に、やがて故郷へ帰る日のための事業資金



一條実孝公より故人に贈られた揮毫



晩年東京工場の応接に掲げ朝夕仰いでいた徳富蘇峯筆の額

にと一心に蓄め、高木さんという人に託しておいた命から二番目の大切な貯金を下ろしてこれに当てることにした。

早速私は高木さんに知らせると、高木さんは忙しい中を直ぐに金を持って駆けつけてくれ、その金の真実を話してくれたので、養父は泪ながら喜んでくれ、家の中は光がさし、万事うまく事が運んだ。

高木さんとは工手学校当時からの古いつき合いで、ある時のこと私が、高木さんの工場のストライキの最中、納期が迫って困り抜いている、メキシコ行きの石鹼製造機械を引受けて仕上げたことがあり、それ以後は親戚同様の付き合いをしている間柄で、私を子供のように可愛がっていて下さったが、関東大震災で一家全滅の

憂き目に逢われたことは、返す返すも心残りなことである。

これでひと先ず急場は凌げたが、再び東京に戻るわけにもゆかず、勤め先の工場をやめ、家業の再建に乗り出すことになった。

このような苦勞が禍いしてか、養父たちは次々と病気に倒れ、とりわけ養母の方は腎臓病が重くなっていた。

私は若かったが、「これから家の柱になるのだから」とすすめられて東京から家内を貰った。家内はその後も淋しい片田舎の町に嫁にきた日の恐かったことを、子供によく話しては東京を懐しんでいた。

日が経つにつれ、養母の病気は次第によく、家内との仲も至極睦まじく、後顧の憂いはなかったが、いざ仕事に乗り出すと世間の壁は思いの外厚く、商売に未熟な私には、他の同業者と足並みを揃えてやることは、非常に困難な業であった。

これで生計の立つわけがなく、家内は惜し気もなく嫁入り道具を手放しては、家の助けをしてくれた。

その頃幸い、越後（新潟県）の加瀬勇三郎氏の製糸工場の仕事を貰ったのを初めに、来光寺村の田代彦七氏工場と次々得意先ができ、以後二、三年は雪の越後の仕事に没頭した。

特に田代さんでは水不足のため、工場用水を一里もある海岸から小川をひいて使っていたが、事情があつて止められてしまい、地元の十見、鈴木の大会社に頼み、ポンプで吸上げようと苦心されたが何れも失敗に終り、大番頭さんがわざわざきて『高くもよいから是非相談に乗って欲しい』と頼まれ、その時私なりの考えがあつたので引受け、直ぐに東京の石川島へ行き、思い通りのポンプを作らせて貰い、船上で実験したところ見事に海水を吸上げてくれた。

早速これを砲金で作り持ち帰つて、十見、鈴木の両氏に見せたところ『こんなものでは無理だ』とにべもなくはねつけられ、田代氏も不安顔なので、これはどうしたものかと思案にくれたが、そうなると腹の虫がおさまらず、なんとかしてやり遂げて見せようと、一里ものパイプを買う資金を借り歩き、やつとのことその大仕事に取りかかることができた。

それから何日目かの朝、試運転となると多勢の人の集まる目の前で、ポンプは静かな音と共に海水を吸い始め、一時間半後にはパイプ一杯となり、出口に用意した酒の古桶になみなみと水を湛えてくれた。この時のうれしかったことは終生忘れることが出来ない。

天は自ら助くるものを助くとはまことにこのことであつた。

田代社長も賞讃して下さつたが、私は鉄砲よりも弾を貸してくれた人々にこの礼を言つて頂きたいと申し添え、私もまたここから感謝した。

この噂が拡がると、次々と注文が増え、うれしい悲鳴を上げながら雪のない間を、あたふたと仕事に駆け歩いた。

よいことも続く時は続くもので、そのころ大倉喜八郎氏が新発田という処へ大きな工場を建てられ、その仕事を頂き、毎日が日の昇るような思いで働いた。

そうなると、須坂方面の仕事も増え、同業者の方々と肩を並べ、多管式のボイラの製造に乗り出した。警察、県工場課の陰の数々のご支援もなくてはならない有難い恩恵であった。

どんな些細なことでも昔のことはなつかしく、ポンプのことはいくら笑われても幾度となく子供たちに自慢ばなしとして物語ってやりたいのであるが、この時代は仕事より世渡りのむずかしさを知った。

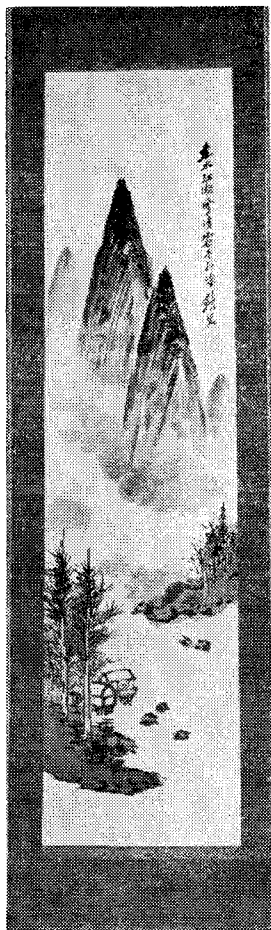
その後戦争が始まり、いささかなりとお国にご奉公させて貰ったことはまた後で書くことにする。

*

人生というものは過ぎてみないと分らないもので、昼と夜があるように、良い事の後には必ず悪い事がついて廻るものだと思う。

年を重ねるに従って一日も早く会社の基盤をしっかりと固めようと、無理を承知で設備や機械

故人遺愛の品々



鉄斎の幅



吉向焼の馬上杯



吉向焼の平菓子鉢

の改良に意を用いてきたが、みんなの努力のお蔭でそれも叶い、ほっと一息ついた頃、持病の糖尿病に余病が併発して、思わぬ不安を持つようになり、心配のかけ通しで誠に申しわけないことと思っている。

毎日車で工場の中を通るたび、機械までも「おやじさん、元氣を出しな」と語りかけるように思えるのである。

「思えば私も早や齡七十三歳となり、知っている限りの仕事を早くみんなに話し終えて、安心して天国へゆきたいと思う。

後から来るものを信じつつ、なおその人達に私のしたあやまちを繰り返させたくないための老婆心からでもあるのか。

東京の事務所も日本橋から江戸川の工場に移り、双方一対となり、仲良く励まし合って仕事に精進して貰うのでこの上なくうれしく思っている。

家庭も会社も同じことで、これを一つに考えたなら無理なく明るい社会となることだろう。

人生は短い。安心立命という言葉は、私の今の気持には程遠いが、生きてきたという実感が強いだけに、病床に過す無為の日々は余りにも苦痛で申しわけないと思う。

病む体をベッドに横たえていると、苦痛に思考の糸も乱れ勝ちで、しみじみと、ものは立っ

た姿勢で見るべく、考えるべきだと思うのである。

人は惜しまれて散るべき時に散りたいものであるが、なかなかうまくいかない。

私の心の中には、まだ話したいことが雲のように残っているが、ひどく疲れを覚えてきたので、あとはまた書くことにしよう。

後記

これで羽生田順平の未完の回想記は終わる。

前半は故人自らが書いたメモによるもので、おそらくこのころ、人生の終焉を考えていたのではないだろうか。

後半は故人が病院で暮らす日々が多くなった昭和四十一年の秋ごろ、入院の直前直後に口述した節々を、秘書の青木清一郎氏が便箋に走り書きしたものから補正編集したものである。医師の指示に従わねばならぬ、せっぱ詰まった老軀の衰えに、人生の無常を胸の奥深いところできびしく感じていた頃に違いない。

したがって死期を迎える覚悟の中に、人としてたどりついた境地とさりげない言葉の端に処世の訓えを読みとることが出来る。

しかしこの後半のメモをとった青木清一郎氏は故人の跡を追うように、昭和四十二年三月にメモの浄書も出来ず、不帰の客となられた。

思っても余りあるものは須叟の命であり、その人たちの残した数々の思い出であるが、故人がこうした回想記を残したことに敬意を表すると共に、この記が後から進む者の道標となることを疑わない。

本稿を整理するに当たり、成る可く故人の人柄を壊さないように努めた積りであるが、

曖昧な点や故人の真意にそぐわぬ点があったならば編者の未熟とご許容の上ご判読頂きました。

最後に故人の霊の冥福を祈ると共に、青木清一郎氏の霊に本稿の完成をご報告して生前の労を謝したい。

(池田みち)

夏草の茎折る雨に念仏す
みち

お礼の言葉

羽 生 田 キ ネ

「光陰矢の如し」とか申しますが、主人が亡くなりましてもう二年目の秋を迎えようとしておりますが、つい昨日のこのようので、いまだに主人は東京工場で好きな仕事に打ち込んでいるように思えてなりません。

主人が亡くなりました当時、私は病気のため入院中で、死去という突然の悲報に、みもよもなく、一時は主人のあとを追って行ってしまいたいほどの思いでございましたが、冷たい雪の降り積もった故郷の家に帰った主人の軽く小さくなった白い箱を抱いたときには、「お父さん、ご苦労さまでした」と、この世の別離を共にできなかった悲しみと、残されたものの責任感がしみじみと新たな涙となってわいてくるのでした。

その後私は、皆様方のあたたかいお心づかいやお励ましのお言葉におすがりして、ようやく小康を得、主人が晩年を打ち込んだ東京工場も見えてまいり、ただいまは一人信州の自宅で聞きなれた工場のひびきを枕にして、日夜主人の菩提をとむらい、信仰の生活の中に生きがいをみ

いだしております。

特に会社の皆様には、主人の生前はもちろんのこと、今日に至るまでの肉親も及ばない深いご理解と、ご温情をこうむり、お礼の言葉もなく、心から感謝申し上げております。

ご存知のように、主人は非常に個性の強いひとで、言いだしたらきかぬところがあり、無理を言っただけのように皆様をお困らせしたことかと申しわけなくぞんじます。今はその無理も言えないところへ行ってしまい、一人しょんぼりしているのではなからうかと、涙をさそわれることもございます。

私とともに送った五十余年の人生を振り返ってみますと、主人は、人の一生は重荷を負って遠き路をゆくがごとしと、自らの運命を悟って、その生涯を精いっぱい仕事に没頭して悔いのない人生を終えたのではなからうかと、ほほえましく思えるのでございます。

そんな主人を、家庭人としてより、仕事の虫としていちずにそれに没入できるよう、家をあずかり、子供を育て、できるかぎり仕事のさまたげにならぬよう遠くから見守っていたことは、私なりの想夫のひとつの姿であったように今もなお思っておりますし、病身となりましてからは、よけいに主人の足手まといにならぬよう努めた私を、主人も心の奥でわかっていてくれたのでございます。

そうした姿を古いと申せばこの上もなく古いといえましようが、主人を、一人の事業家として育てるための私にできたいちばん自然でやりがいある生き方だったのでございます。

後年、病気がちの私を気づかって、「おまえは俺よりも先に逝け」と、口ぐせのように申しておりましたのに、待っていられず、自分から先立ってしまったとは、最後まで気の早い人でございました。

そして、こんなことを申し上げるのは非常におかしゅうございますが、生きているときには私のような浅はかなものにはわからなかった、主人の人間としての味のよさを今となってはじめて見いだしたような次第で、主人に聞こえますなら、大声でおわびしたいような、そんなうかつな自分を責めたい思いでいっぱいでございます。

このようなとき、偶然とは申せ、会社の皆様が追憶集をご発行くださるとお伺いし、私は涙の出るほどうれしく、感謝の気持ちでいっぱいでございます。

主人は常々「うちの社員はみんな立派なよい人たちばかりだ」と自慢しておりましたが、私も同様、じみで、がんばりやで、人情のある点では、ほかの会社にひけをとらないと自負しております。

主人の亡きあとは一層それが顕著で、心を一つにして、足元を見ながらじりじりと努力して

くださる皆様の真剣な姿を拝見し、「よろこんでください」と主人に報告したことも何度あったかしれません。

この七月には、奥信濃の静かな菩提寺の境内に、主人の好みにあった墓を建立し、つづいて十月には東京工場に胸像建立、追憶集の発行と、主人へのなによりのはなむけがそろいますことは、家族はもとより、地下に眠る主人もさぞかし満足し、深く感銘していることとぞんじます。

『おやじさん——羽生田順平追憶集』の発刊にあたり、この紙上をお借りしまして、遺稿にそえ皆様のご厚情に心からお礼を申し述べさせていただきます、ふつつかな私のご挨拶といたします。

昭和四十三年七月

△故羽生田順平夫人▽

年譜

羽生田順平 年譜

年次	年号	年齢(満)	略歴
一八九四	明治二七	当歳	一月二日、長野県須坂町上町(現在須坂市)に出生 父辰右エ門、母とも。次男
一八九八	三一	四	二月、同町叔父羽生田源治郎(明治一七年五月、柳源鉄工所創業、車鍛冶及び農機具製造)叔母てるのもとに養子として迎えられる
一九〇一	三四	七	須坂尋常小学校入学
一九〇四	三七	一〇	(二月、日露戦争始まる)
一九〇五	三八	一一	須坂高等小学校入学 (九月、日露戦争終る)
一九〇六	三九	一二	上京、神田の日本工手学校入学
一九〇七	四〇	一三	三月、石川島造船所入社
一九〇九	四二	一五	日本工手学校卒業
一九一三	大正二	一九	二月、帰郷

年次	年号	年齢(満)	略	歴
一九一四	大正三	二〇	一月、石川島造船所退社、家業従事 一月、田辺キネと結婚 父長次郎、母ツル。四女	
一九一七	六	二三	三月、長男佐太郎出生	
一九一八	七	二四	新たにボイラ製造開始	
一九一九	八	二五	九月、次男大次郎出生	
一九二〇	九	二六	五月、長男佐太郎死去(三歳)	
一九二二	一一	二八	五月、三男三郎出生	
一九二三	一二	二九	一二月、次女みち出生	
一九二六	一五	三二	七月、四男照雄出生	
一九二八	昭和三	三五	六月、実父辰右エ門死去(六八歳)	
一九三〇	五	三七	一月、養母てる死去(六六歳) 三月、養父源治郎死去(六七歳) 六月、須坂町本上町に於て合資会社羽生田鉄工所設立、代表社員就任	

一九三一	六	三八	(九月、満州事変起る)
一九三三	八	四〇	八月、四男照雄死去(七歳)
一九三七	二二	四四	十一月、株式会社羽生田鉄工所に改組、代表取締役社長就任 上野上車坂に東京出張所を開設 (七月、支那事変起る)
一九三八	二三	四五	五月、本社工場を須坂駅前現在の地に移転
一九三九	一四	四六	東京出張所を日本橋浪花町に移転、東京営業所と改称
一九四〇	一五	四七	(株)羽生田鉄工所の工事会社として信濃土木(株)設立、代表取締役社長就任
一九四一	一六	四八	十一月、次男大次郎死去(二一歳)
一九四二	一七	四九	須坂鉄工組合設立、専務理事就任
一九四三	一八	五〇	(一二月八日、太平洋戦争始まる)
一九四四	一九	五一	(株)羽生田鉄工所、皇国第四〇八工場に指定さる
一九四五	二〇	五二	(株)羽生田鉄工所上諏訪出張所開設 長野刀剣株式会社設立、代表取締役社長就任 右製品に天皇より「天心」の銘を賜い、社名を天心軍刀株式会社と改称 三月一〇日、東京大空襲の為東京営業所全社屋焼失、従業員は上諏訪

年次	年号	年齢(満)	略歴
一九四六	昭和二一	五三	出張所に移転 (八月一五日、太平洋戦争終る) (株)羽生田鉄工所以外の関係会社、組合等解散
一九四七	二二	五四	一〇月、社長の席を嗣子三郎に譲り会長に就任
一九五三	二八	六〇	一月、日本橋本町に仮事務所開設 六月、新潟県十日町営業所開設 一〇月、深川毛利町に東京工場設立
一九五四	二九	六一	一月、実母とも死去(九〇歳)
一九五五	三〇	六二	一月、右工場敷地狭隘の為、江戸川区小島町の現工場に移転
一九五七	三二	六四	五月、長野県長野営業所開設 一二月、社団法人日本溶接協会東京都東部支部設立され、支部長に就任
一九五八	三三	六五	新たにクラッチドア式圧力缶、真空缶の製造開始 新たにハイドリックプレス加工部門開始
一九六〇	三五	六七	四月、日本溶接技術専門学校設立され、校長に就任 四月、東京労働基準局災害防止協議会委員に委嘱される

一九六一	三六	六八	六月 東京都鉄工溶接事業協同組合設立され、理事長に就任 六月、社団法人ボイラ・圧力容器安全協会（現社団法人ボイラクレール安全協会）設立され、理事長に就任 一〇月、新潟県高田営業所開設 一〇月、東京工場に容量二、〇〇〇トンのハイドリックプレス設置 一〇月、本社工場に石油部開設
一九六三	三八	七〇	四月、健康上関連団体役員辞任
一九六四	三九	七一	二月、日本学士会より産業功労者としてアカデミア賞を受賞
一九六五	四〇	七二	八月、東京工場に東京支店合併
一九六六	四一	七三	一月一日、午前〇時四八分、東京都江東区深川毛利町、社会福祉法人あそか病院にて死去
一九六七	四二	七四	一月二日、（株）羽生田鉄工所本社工場にて社葬 一月二日、（株）羽生田鉄工所東京支店工場にて社葬 二月二六日、菩提寺青木山長妙寺（長野県上高井郡東村豊丘）に納骨法名、大成院積順明居士正定聚位

編集後記

この書は、社内の者がみずからの手でみずからの糧となる本を得たいという願いで企画された。亡き会長を偲び供養するにとどまらず、今日迄の私達の日々を再認識し、今後の発展充実に資したいと望んだ。

そのために会長を社員の視点でのみ強調することになった。また会長の全人間的生涯を、われわれ社員の筆のみでは描きえない。

幸い故人の遺稿もあった。そしてまた社外及び親族の方々から御寄稿頂き、弔辞もあわせおさめ、私

達の至らざるを補って貰った。本来ならもっと多くの方々から、私達の知らない会長像を教えらるべきなのであるが、この書が前述のような発願であったため、極めて僅かの方々の文章を戴くにとどめた。編集を任された者達でその依頼先を決めさせて戴いたが、それにあたって他意はなかった積りである。いずれ機会が得られれば、社外の方々の文章による会長像を得たいと私達は身勝手ながら思っている。

本書を私家版ながらも公刊することについて、私達は決しておやじさんを誇示して世に送る積りはない。誰にとっても自分の父親は怖いながらも誇りに思いたいものであろう。私達はそのような気持でこの書を編み、世に送りたいと思ったのである。

もっともとおやじさんのことについて、或いはおやじさんを支援し、助けてくれた公私の人々について覚えておく必要があると思う。知っておくことは私達の義務かとも思う。私達はこれからはますます

す謙虚に皆さんの声を聞きたいと思う。

御寄稿頂いた方々には本当に大変なお骨折りをかけた。その人々の原稿のうち、社内の方については編集の都合で若干整理した。うちに筆者の真意にそぐわぬ点もあるかと思う。題名も改めさせて貰ったものもある。それらについてひとつひとつ筆者の了解をとらなかつた。労を惜しんだことをお詫びする。中には編集担当の者の不手際で、折角書いて頂いたものを載せ得ないという失態もあった。社外、親族の方々の原稿の取扱いについても、あるいは非礼の点があるかも知れぬ。改めてそれらのことについて、皆様方のご寛容を乞いたい。

口絵の写真も多くの方々から提供して頂いた。名を記さなかつたが厚くお礼を申し上げます。

その他限りなく、記し得ないほどの蔭のお力ぞえがあった。編集担当の者達としても深く謝意を表したい。

また、本書の制作にあたっては実業之日本事業出版部長森田淳二郎氏の熱心な御指導と御協力を戴いた。本など作つたことのないはずの素人である私達を助けてくれる氏の忍耐と努力で、この書は立派な本となって生まれるであろう。氏にお礼を申し上げます。

昭和四十三年八月五日

立野 俊雄

森 清

北 沢 洋 一

おやしさん―羽生田順平追憶集―

非売品

発行日 昭和四十三年十月二十四日

編集者 「おやしさん―羽生田順平追憶集」編集部

代表 立野俊雄

発行者 東京都江戸川区小島町二丁目一、〇二五番地

羽生田三郎

発行所 東京都江戸川区小島町二丁目一、〇二五番地

株式会社 羽生田鉄工所東京支店・東京工場

製作 東京都中央区銀座一の三の九

実業之日本事業出版部

